

lost ~ wing

I

~ 傷ついた愛の羽根 ~



kai.

Illustrated by: maimu=maimu (DOGURAMAGURO)

Products

◇All story making & written by K a i .A

◇Illusted by DOGURAMAGURO

Intoroduction

—登場人物紹介—

翼(24)

...本編の主人公。一見冷淡な性格で人付き合いが苦手だが、基本的に素直。ある事情で、自分自身を証明するためにホストへの道を歩み始める。元会社員。

羽月(19)

...もう一人の主人公。明るく元気で、誰とでも仲良くなれる。**186センチ**の高い身長と金髪・京都訛りが特徴。ある人物との再開を目的で上京を決意。

愛菜(25)

...美と品性を兼ね備えたカリスマキャバクラ嬢。天馬とは独立前からの付き合いで、【**Club Pegasus**】の常連。翼とある人物の面影を重ねている。

天馬(27)

...カリスマ性溢れる【**Club Pegasus**】代表取締役社長。厳しいが従業員思いで、翼や羽月の成長を見守る。

翔悟(22)

...【**Club Pegasus**】の**No.1**ホスト。容姿端麗で、何でも自分が一番でないと気が済まない性格。

光星(25)

...【**Club Pegasus**】**No.2**ホスト。黒い長髪が特徴。非常に攻撃的で傲慢な性格。後輩や新人に高圧的。

由宇(20)

...【**Club Pegasus**】**No.3**ホスト。明るい短髪が特徴。冷静で非常にドライな性格。

佐伯(28)

...【**Club Pegasus**】の店長。翼たち新人ホストを厳しく指導する。

美空(19)

...母親とともに小料理屋で働く心優しい少女。とあることが原因で声が出ない。

梨麻(22)

...【Club Pegasus】の新規の客。服装は派手だが、性格はおとなしめ。風俗で働く。

「ちくしょおおっ！！」

日本の首都東京ー

その街の中のとある部屋で叫びたたずむのは、一人の青年だった。

『彼』の右手には缶ビールが握られ、周りは酒の瓶やつまみのゴミばかりが溢れる。

カーテンで光を遮られ密封された部屋の中は、どんよりした暗闇と酒の臭いでむせ返っている。

「どうせ俺みたいなクズなんか.....もう.....」

『彼』はそうつぶやきながら、歯ぎしりをしていた。

その時、『彼』のケータイが音を鳴らす。

すると、『彼』はそれを手に取りギョロリと睨み付けると、部屋の壁に強くたたき付けた。

「ハア.....ハア.....うるさいうるさいうるさい！！もう俺に関わるな！！」

『彼』は息を切らしながら大声でそう叫ぶと、再びぺたんと座り込んだ。

「金もない.....仕事もダメ.....あげく.....。もう生きてるのも疲れた.....」

その時だった。

部屋のドアの郵便受けに、「ストーン」と音をたて何かが落ちてきた。

「ん.....？」

『彼』は重い腰を上げ、冊子らしきそれを手に取る。

「フリーの求人誌か.....。いまさら俺に何を.....」

『彼』はそう言いながら、その冊子をペラペラとめくった。

すると、とあるページにピタリと目を留める。

「ホスト、クラブ...」

『彼』はその続きに目を注いだ。

「新規オープンからまだ3ヶ月……ホスト募集中……。ホストってキャバクラとは逆に男が女を接客するアレだよな」

さらに続きを読み進める。

「月収100万も夢じゃない……頑張った分だけあなたを評価します……」

"あなたを評価します"

それが『彼』の心を激しく揺さぶった。

「これだ……！」

『彼』はニヤリとわずかな笑みを零した。

"ホストクラブ"と言う存在……その言葉が闇にうずくまる彼の心を動かそうとしていた。

場所は変わって京都一

「じゃあ行ってくるわな！」

金髪でひょろりと背の高い一人の19歳の男が、そう言いながら片手にバッグをかついだ。

「ホンマに行くんかいな、東京……」

「ああ！東京で一発掴んでくるで！」

その《彼》は、心配そうに自分を見つめる老人に元気に言い放った。

「じゃあなじいちゃん……身体に気ィつけるんやで」

「ああ、お前もなあ」

「ああ、ビッグになったるわ！それと……必ず見つけてくるで」

《彼》はそう言いながら、老人に背中を向け歩いていった。

老人は心配そうに、そんな《彼》の遠くなる姿を見つめていた。

東京へと向かう新幹線の中、《彼》はとある一枚の写真を見ていた。
それに写るのは、小さい男の子とさらに背の高い女の子の二人が笑っている姿。
《彼》は黙りながらも真剣な表情でそれを見つめ続ける。

『やっと、やっと迎えに行ける……逢えるかもしれないんだ』

《彼》は、どこか寂しそうに心の中でそう呟く。
そして写真をバッグにしまい込み、車窓に視線を向けた。

「まずは東京で成り上がらんとな！」
何かの決意をし、《彼》は東京との距離を経つ時間とともに縮めていった。

◇「俺は、これで……」

◆「俺は、東京で……」

『絶対成り上がってやる』

それぞれの思いを抱き、二人の男が一つの決意を胸にしていく。

それが東京・新宿歌舞伎町のとあるホストクラブを舞台に運命を紡いでいくなど、この時彼らは知るよしもなかった。

200X年・1月ー

『彼』は見慣れぬ街である、新宿・歌舞伎町に降り立っていた。
夕方に差し掛かるその喧騒の中、黙々と歩いていく。

「歌舞伎町……。初めて来たけど、こんなに賑やかなんだな……」

『彼』はポツリとそうつぶやきながら、求人誌の地図を片手にとあるビルへと足を進める。

「確かこのへんだな」

『彼』の前には様々な店の看板が並んだビルが姿を現す。
キャバクラやショットバーなどが各フロアにある中、ビル4Fその目的地はあった。

「ここだな」

エレベーターの矢印ボタンを押し、数秒でその扉は開いていく。
すると『彼』の後ろから誰かが走って来ていた。

「ちょっと待ってってえ〜！」

「ん？」

『彼』の背後には、185センチを軽く超すかのような、スラリとした男がバタバタ走ってくる。

エレベーター前で膝に手をつきながら止まると、ゼエゼエ息を切らしながら『彼』の顔を見上げた。

「一緒に……エレベーター……乗してください……」

「あ、ああ……」

『彼』は走って疲れ果てたかのようなその《彼》をエレベーターの中に入れると、すぐに4Fのボタンを押した。

「ハア……ハア……いやあ、すみません待ってもらって。えっと……あ、お兄さんも4Fなんですかあ？」

「…まあ」

息を切らしても元気な口調の《彼》に、『彼』は頷きながら答える。

すると《彼》は目をパッと開いて再び口を開いた。

「じゃあお兄さんも、今日【Pegasus】の面接なんですねっ！ホンマよかったわ～、こっち来んの初めてやし一人じゃ心細いからなあ！」

「あんたも？」

「ええ！そうなんですよお～！」

《彼》は陽気に『彼』に言った。

しかし、『彼』は何も反応せず、黙ってエレベーターの階数表示を見つめていた。

そんな中、エレベーターも4Fへと止まり扉をゆっくりと開く。

二人がエレベーターから出ると、絵に書いたような美しい白に彩られたドアが姿を現した。

ドアノブはまるで天馬の翼のような形に作られ、そこだけでも異空間に来たかのような雰囲気漂わせている。

そして、【Club Pegasus】という名前がオシャレな筆記体で堂々と掲げられといた。

「すごいなあ～！これが歌舞伎町のホストクラブかあ！」

背がひょろりと高い《彼》がまるで珍しいものを見たかのようにはしゃぐ中、『彼』はそれを横目にするると一人黙ってドアノブに手を回した。

「あっ、待って下さい～」

《彼》は『彼』の後を追うかのように、店の中に入っていった。

10分後ー。

内勤スタッフに面接席へと案内されていた『彼』は、店の方で用意されていた履歴書に項目を書き埋めていた。

そんな中、綺麗なまでに白を基調に内装されたさらなる異空間にキョロキョロせずにはいられないようで、『彼』自身慣れない世界に緊張を表情に出さずを得なかった。

そこに、高級ブランドスーツに身を包み、ヘアメイクされた茶色い髪をなびかせた端正なルックスの男が『彼』の前にやってきた。

「どうも、お待たせしました」

男はそう言って、【代表取締役社長・神代天馬(カミシロ テンマ)】と記されている名刺をスッと『彼』の前に差し出した。

「ここの責任者の天馬です、よろしく」

「よろしく、お願いします」

天馬からの挨拶に、『彼』は答えるようにペコリと頭を下げる。

すると天馬は早速とでも言うように、書かれた『彼』の履歴書に目を通した。目をキョロキョロと上下左右に動かし、20秒ほどでそれをテーブルの上にパタリと置いた。

そして、『彼』を真っすぐに見つめ口を開いた。

「24歳で、前は会社員の営業.....大学も出てんだね」

「はい」

「何でホストやろうと思ったの？」

「えっ」

「きっかけだよ。なんかあるだろう？」

「.....」

単刀直入な天馬からの質問に、『彼』は一瞬言葉を止め斜め下を見つめる。

「特にはないのか？」

「.....ねを」

「ん？」

「お金を.....稼ぎたいです。自分自身だけの力で一から稼ぎたいです。そして.....」

「そして...？」

『彼』は顔を上げ天馬の目に真っすぐ視線を送りながら次の言葉を言った。

「自分自身を評価してほしいです」

「.....」

数秒ほどの沈黙の後、腕を組んだ天馬がすぐに言葉を発した。

「なるほど。稼ぎたいはともかく、そんな動機を言った奴は初めてだな」

すると天馬はジャケットからペンを取り出し、あらためて『彼』に問い掛けた。

「名前は？」

「名前.....?.....合格なんですか？」

「仕事をやる気はあるんだよな？」

「はい」

『彼』はキョトンとしながらも、合格であることは少しずつ感じ始めていた。
間を置かず天馬は続けた。

「この履歴書に書いてある本名でやるのもいいが、源治名決めてるのか？」

「えっと……」

「じゃあ本名か？ならこの…」

「あのっ！」

自分の本名を言おうとした天馬に、『彼』はストップをかけるように口を開いた。

「何だ？」

「本名じゃなくて……源氏名で、【翼(ツバサ)】って名前で行きたいです」

『彼』は今日の会話で1番熱を込めたように天馬に言った。

すると、天馬はすぐに答える。

「翼か……うちの店にはまだいないな。それでいいなら好きにしろ」

「はいっ」

「じゃあ写真を一枚とらせてもらうぞ」

その後ポラロイドカメラで写真を一枚取り、面接は終わりを迎えた。

「翼」

「え、はい」

呼ばれ慣れない『彼』……翼に天馬が声をかける。

「早速明日から君はうちのホストだ。夕方4時に店に遅刻せずに来ること。わかったな？」

「はい、明日からよろしくお願ひします。失礼します」

翼は天馬に一礼すると、店を出ていった。

そんな彼の背中を、天馬は複雑な表情で見つめる。

「社長、どうかしましたか？」

「ん？ああ、いや」

内勤スタッフ佐伯の声に反応するも、天馬は翼のことを思い返していた。

「なんか暗そうな男ですねえ。容姿はまあまあだと思いますが……」

佐伯は皮肉を込めたように言った。

「そうだな。まああゆうタイプは……」

「社長？」

「いや、なんでもない。面接もう一人いるんだよな」

「ええ。背が高くてやたら元気な子ですね。では、そちらもお願いします」

佐伯の言葉に頷くと、天馬はそのまま《彼》の待つ面接席へと向かっていった。

その後【Pegasus】を出た翼は、じわじわと両手の拳をにぎりしめながら歌舞伎町の路上を歩いていた。

『やった……まさか俺がホストになれるなんて…』

明日から【Pegasus】のホスト『翼』としてのスタートをきることになった彼の口は笑っていた。

しかし、彼の瞳は決して笑っておらず、一筋の光も失ったかのように漆黒の闇に包まれたままだった。

「これでいい、これでいいんだ……！俺はここで絶対成り上がってやる！」

翼はボソリとそうつぶやきながら、ネオンが灯り始めた歌舞伎町の中に身を沈めるように消えていった。

一方その後を追うように、高い身長をヒョロリと見せながら、《彼》も【Pegasus】を後にしていた。

「よっしゃあ！明日から俺もついにホストやあ！」

グッとガッツポーズをする《彼》は、ウキウキしながら灯るネオンの中を歩いていく。

「それにしても天馬社長ホンマカッコええなあ。俺もあんなピシッとした男に成り上がりたいわ！燃えてきた〜！」

その時、軽く鼻唄を鳴らす《彼》の向かいから、背が高めのホステス風の美女が歩いてくる。

《彼》もハッとしたように彼女の華やかな存在に気付いた。

彼女も《彼》に気付いたらしく、クスッと笑いながら《彼》の前を通り過ぎていった。

「うわあ……メッチャ綺麗な人や……。東京にはあんなオシャレで綺麗な人おるんやなあ」

《彼》は口をパッキリあけながら、無意識のうちに彼女の姿をその場で追っていた。

「あ、アカン。これからホストやる男がこんなんじゃアカンな！よし、今日は帰って明日の準備や！」

《彼》はすれ違った彼女への雑念を振り切るようにその場を後にした。

その彼女が【Pegasus】に向かっているとは夢にも思わずー

PM 5:00 – Club Pegasus

「いらっしゃいませっ！」

店の中のホスト全員の声が大きくその空間に元気に響き渡る。

「いらっしゃいませ、愛菜(マナ)様」

内勤の佐伯が、愛菜と呼ばれる一人のホステス風の美女を迎える。

彼女もニコッと微笑みながら口を開いた。

「お久しぶり佐伯さん。がんばってる？」

「ええおかげさまで！ささ、どうぞこちらへ」

佐伯の案内に促されるまま、愛菜は店内の席へとついていった。

ピンクゴールドのドレスに身を包んだ愛菜は、モデルとも間違われかねないような美しいまでのオーラを放っていた。

そんな彼女に、店中のホスト達が一斉に視線を送る。

「天馬！」

愛菜は嬉しそうな表情で、自らの席にやってきた天馬に声をかける。

「愛菜、久しぶり」

天馬も昔からの旧友にでも会うかのように愛菜に言葉をかけた。

「新店、順調みたいね」

「おかげさまで」

天馬と愛菜は、お互いの視線を合わせながらクスッと笑い合う。

そんな中、天馬は彼女がキープしてあるだろうボトルのブランデーをグラスに注ぎながら口を開いた。

「どう、うちのホストで担当になりそうなの見つかった？」

「ん～～～……」

天馬の質問に、愛菜は右手を顎に当てながら考え込む。

「いい子はたくさんいるんだけどね……」

「けど？」

「今の在籍している子には正直ピンと来ないんだよね……」

「相変わらずハッキリ言うよな」

天馬も愛菜も、そう言いながらブランデーが入った水割りのグラスを静かに交わす。

そして、先に天馬が先に言葉を放った。

「なあ愛菜……この二人どう思う？」

「えっ？」

天馬はそう言って、二枚の写真を愛菜の前にかざす。愛菜も不思議そうに、その二枚を見つめた。

「この子達は……？」

「ああ、さっき面接に来た二人さ。こっちは24でこっちの背が高い金髪のは19って言った」

「ふーん」

愛菜は二人のポラロイド写真を交互に見つめながら、タバコをフッと取り出す。

そこに天馬がさりげなく火を点した。

愛菜は軽くフッと煙を吹くと一枚の写真に目を注ぐ。

そこには翼が写っていた。

「……」

火を点したタバコを一旦灰皿に置いた愛菜は、あらためて天馬に問いかける。

「ねえ……」

「どうした？」

「この24って人、今日面接きたの？」

「ああ。何か暗そうなんだがな」

「ふうーん……」

愛菜はじっと翼の写真を見つめる。

『似てる……あの子の瞳に』

愛菜は心の中でそう呟く。

「愛菜……？」

天馬の声に愛菜はハッとする。

「どうした？」

「ううん、ちょっと昔の知り合いに似てたかなって思っただけ。それと天馬、こっちの子……」

「ああ、逆にこちらは明るくてワイワイするようなタイプだな」

「さっきそこの道ですれ違ったのよ。はしゃいでたから、思わず笑っちゃったけど。この子名前は？」

「こいつは羽月(ハツキ)。愛菜、こいつ気に入ったのか？」

「さあねっ」

愛菜は天馬に言葉を返しながらかみ煙草を口にくわえた。

「さあね、か。さすが愛菜さんの目は厳しいことで」

天馬も軽く笑いながら言った。

「天馬はどう思ってるの、その二人のこと」

愛菜が聞き返す。

「さあな。羽月に関してはまだホストっぽい雰囲気はあるが…」

天馬は愛菜にそう答えながら、翼の写真にちらっと目をやる。

「この翼に関してはハッキリ言って未知数ー」

「未知数？どうゆうこと？」

「本人は全く夜にそぐわない雰囲気だけどな、なんか気になっちまって……コイツのこと」

「どうして？」

「さあな。まあ強いて言えば変わった原石…ってところか。磨き方次第で宝石にもただの石ころにもなるって感じのな」

「まるでギャンブルね。まあ水商売なんてそんなものだけど」

天馬と愛菜は、フッと笑いながらグラスの中の酒を飲んでいく。

「明日からこの二人も出勤するんだ。どうだ？愛菜の卓につけて二人を見て欲しいんだけど」

「明日ね……いいわよ、天馬の頼みだもの」

「そっか！ありがとうな」

「フッ、そんなに改まらないで」

天馬の礼の言葉に、愛菜は謙遜しながらも微妙な照れを見せる。

「このお店は天馬にとってやっと築き上げた大切なものでしょ？だったら私は当然現役のときと同じように応援するわ」

「ああ、昔からホント愛菜には感謝してる」

二人は再びグラスをカチンと交わす。

その光景を、離れたところから店のホスト数人が見ていた。

「なあ、あのめっちゃキレイカワな人は誰なんだ？」

「知らないのか？あの人は歌舞伎町のカリスマキャバ嬢の愛菜さんだよ。社長が独立する前からのお客さんなんだぜ」

「にしてもモデルみたいに超キレイだよな愛菜さんって。あんな人から指名欲しいなあ……」

「あんな人をお客にした天馬社長もすごいよな」

ホスト達の話は、現役を退いた天馬に継ぐ新しい担当ホストを探している愛菜のことで持ち切りだった。

美貌も品性も知名度も……そして金も全てを備えている愛菜は、指名を欲しがるホスト達にとって注目の的であり憧れでもあった。

しかし、これほどまでに素敵な女性が何故ホストに……？という疑問が走るのもまた事実だった。

かつて担当ホストだった天馬に対しても求愛している様子も無く、一体何故にホストクラブに通っているのか。

それは天馬と愛菜にしかわからない、【Pegasus】に在籍するホスト達にとっての一つの謎になっていた。

「じゃあ天馬、私そろそろ行くね」

「ああ、今日もありがとう！……愛菜」

「うんっ？」

「無理……するなよ。それと悪いな、今は俺が忙しくて力になりきれなくて」

「天馬…。何言ってんのよ！私は十分に天馬に支えてもらったわ。それに、新しいホストさんにも支えてもらいますからねーだ☆」

愛菜は舌をべーと出しながら笑顔で天馬を見つめた。天馬もフッと笑みを零す。

「ありがとうございましたあ！！」

愛菜の帰りを見送るように、ホスト全員が声を上げる。

「じゃあね！」

そう言って愛菜は、【Pegasus】の白いまでの店内をどこか惜しむように後にした。

「翼...か。まさかあんな瞳をした人間にまた会うなんて...」

愛菜はそうつぶやきながら、歌舞伎町のネオンの中へと姿を消していった。

その頃翼は帰路につき、すでに自宅の前にいた。

ポストにささっている一枚の封筒を取り出すと、彼はそれを右手でグシャッと握り潰した。

「こんなもん一々送ってくんじゃねえよ」

翼は部屋に入ると、右手の中にあるその封筒を睨みつけ、ポイツと棄てた。

するとベッドへと向かい、そこにドサリと横たわる。

「俺は明日から生まれ変わるんだ.....！もう俺は昔の俺じゃないんだ！」

翼は笑いながら、何度となくその言葉を繰り返した。

まるで過去の自分との決別をするかのようにー。

翼は一本の煙草に火を着けた。

そこから舞い上がる煙は、彼が生まれ変わる狼煙のように、ゆらゆらと空をさまよっていった。

一方ー

面接を終え帰宅した羽月は、明日からの仕事に備えスーツや靴などの準備をしていた。

「はぁ～憧れの歌舞伎町ホストにいよいよ俺もなるんやなあ！緊張するけどめっちゃ楽しみやあ～！」

羽月は鼻歌を鳴らしながらご機嫌で準備を進める。

すると、彼のケータイが着信音を鳴らした。

「おっ、じいちゃんかな」

羽月は嬉しそうにケータイを手を取った。

「もしもし？あ、じいちゃん！……ああ、何とかやっとするよ。大丈夫やて！……うん、心配せんといて。ホンマありがとう……うん……うん……それじゃあな」

羽月はケータイでの会話を簡単に終わると、スッと机の椅子に腰をおろした。

机の上には、写真立てにおさまる一枚の写真があった。

上京の際、手に取って見ていた幼い二人が写っていたものである。

羽月はそれを神妙な表情で見つめた。

「待っててな、俺が必ず逢いに行くから……！」

羽月は力強くそう囁いた。

翼と羽月—

それぞれが自分の想いや決意を胸に、ホストへの道へと歩み始めようとしていた。

こうしてここに、二人の新しいホストが歌舞伎町【**Club Pegasus**】を舞台に産声をあげていくのだった。

【Club Pegasus】での面接の翌日ー

「こんなもんだよな……」

翼はしばらくしまっておいた会社員時代のスーツに袖を通していた。

ホストと言えはきらびやかなブランドスーツを着ているイメージが彼自身あったものの、今現在の自分にそんなものを買える経済力はないこととそれ以上に似合わないだろうと言う自覚があった。

「……」

翼は鏡の中の自分を見つめた。

黒髪とはいえ髪型は整髪剤でなんとか形にはなっているものの、濃紺のスーツにネクタイをキチンとしている姿はホストよりもむしろ会社員に近いものだった。

「……」

翼は沈黙するしかなかった。

まず何よりホストの仕事をする上での簡単な予備知識すらなかったことに今更ながら薄々と気づき始めていていた。

それでも翼は「しょうがない」とばかりに自宅を出ることにした。

それよりも、未知の領域である夜の世界に一步踏み出すと言う緊張感が心地良い感じに彼を支配していた。

1 時間後ー

スーツ姿の翼は新宿・歌舞伎町に着き、【Club Pegasus】へと向かうためにセントラルロードを歩いていた。

面接のときに一度来たとはいえ、多数の人間が行き交い様々なの飲食店や娯楽店で盛り上がるこの街の喧騒は、未だに彼に新鮮な印象を与えていた。

『俺も今日からこの街で働くんだ……』

翼はグッと胸の内を引き締めるように、店への路地を歩いた。

コマ劇場の脇を通り歩くこと数分、多数の飲食店がひしめく雑居ビルが並木のように姿を現す。その一角のビルに、翼は約24時間ぶりに足を踏み入れた。

「確か4Fだったよな」

翼はエレベーターの上りボタンを押した。

すると直ぐさまドアは開き、彼はその中に入っていく。

そして、4Fのボタンを押そうとしたその時だった。

「ちょっと待ってっえ〜」

「??」

翼が覗いたエレベーターの外の向こうには、白いシャツと黒いパンツに身を包んだ背の高い金髪の男が急ぐように走ってきていた。

「ハア、ハア……あ〜待っててくれてありがとうございますう！助かりましたわあ！」

「あ…」

息を切らしながらも手にジャケットを抱え元気にエレベーターの中へ入ってくるその人物に、翼はハッとしたように気が付いた。

「あ〜お兄さんは！」

「……」

「昨日面接一緒だった人ですねえ！よかったあ〜今日から一緒にお仕事なんですね！」

「まあ…」

ゼエゼエと息を切らしながらも、高いテンションで翼に言い寄ってきたのは羽月だった。

翼はそんな彼を横目で見ると同時に静かに返事をする。

「いや〜しかしホスト一日目に誰かと一緒のスタートって嬉しいわあ！あ、俺羽月って言います。お兄さんよろしくお願いしますう！」

「あ、ああ……よろしく」

「あ、お兄さんの名前聞いてもいいですか？」

「翼」

「翼くんかぁ！よろしくお願ひします、翼くんっ！」

一人でも盛り上がるかのような羽月のテンションに、翼は軽いため息をつく。

そしてエレベーターは4Fに着き、翼と羽月は【Club Pegasus】の店のドアを開け、中へと入っていった。

「おはようございますっ！」

羽月は店の中に入るも、元気良い挨拶の声を上げた。

「お、おはようございます」

翼もそれにならうように後から挨拶をする。

「おう、おはよう」

店に入ってすぐ横にあるキャッシャーのカウンターから二人に声をかけたのは、代表取締役社長の天馬だった。

「翼、羽月。二人とも今日からうちのホストだ。店を開ける5時までの間、お前達には軽い研修を受けてもらう」

「はい」

「はいっ！」

「じゃああっちのテーブルに二人でいてくれ」

天馬に促されるように、翼と羽月の二人は、フロアの方へと足を運んだ。

「うわぁ……」

羽月は息を漏らすように驚きを見せる。

中には各々のスーツに身を包んだホスト達が、テーブルやソファー・床や壁などの掃除に勤しんでいた。カチカチに髪を盛った者から短髪の者まで、多種多様なホストの姿がそこにはあった。

「ホストさんやぁ……ねえ、翼くん！」

「あぁ……」

羽月が再び驚きをストレートに見せる中、翼は至って冷静さを見せていた。

しかし、これまで会社員として働いてきた彼にとって、その光景はあまりにも新鮮だった。

『ホスト……クラブ』

翼は自分が今ホストクラブにいると言う事実を改めて実感し始めていた。
そんな中、二人は指定されたテーブルのソファーにて座って待つことにした。

数分後、そこに黒髪で短髪の風貌をした20代後半くらいの一人の男が現れる。内勤スタッフである、店長の佐伯だ。

「どうもはじめまして、店長をしている佐伯です。えっと、翼に羽月だったかな？今から簡単なテーブルマナーやルールについて研修してくからよろしく」

「はい。よろしくお願いします」

「羽月です！よろしくお願いしますっ！」

佐伯は早速と言わんばかりに、二人への研修を始めた。

グラスの持ち方や酒の作り方などの接客の基本から、『爆弾』に至るまでの店内でのルールまで、数十分ほどかけて一通りの研修を施した。

「...とまあこんな感じだ。いきなりで覚えることは多いだろうけど、だいたいのことは理解したかな？」

「はいっ！」

「はい」

「そうか。とにかくお客さんはもちろん、店や他のホストの迷惑になることは絶対にしないこと。これだけは、まず覚えておいてくれ」

佐伯の一言一句に、翼と羽月は納得するようにうなずいた。

「それとホストは接客業だから元気だけは必ず持ってること！わかったな？」

「はいっ！」

「はい」

「よし。じゃあ今あっちのフロアでミーティングやってるから、自己紹介してこい」

佐伯は二人を一際広いAフロアへの移動を促した。

二人が足を踏み入れたAフロアには、30人近いホスト達がソファやヘルプ用の椅子に座っていた。

皆一斉に翼と羽月を見ている。

「みんな、今日からうちに新人が二人入った！さっ、じゃあ羽月から自己紹介してくれ。とりあ

えず元気に名前と歳をな」

佐伯がホスト達に一言言うと、まずは羽月に彼らへの挨拶を促した。
羽月もそれにすぐ頷く。

「えっと……お疲れ様です！今日から入店します羽月って言います！19です！まだ何もわからへん未熟者やけど……よろしくお願ひしますう！」

「よろしくうっ！！！」

緊張した面持ちの羽月に、ホスト達は元気よく言葉を返す。
うっかり出てしまった彼の訛りに、先輩ホストの何人かが軽い笑いを見せていた。

「よし。次は翼っ！」

羽月の挨拶が終わり、佐伯は次の翼の自己紹介を指示する。
翼はコクッとわずくと、羽月と入れ代わるように先輩ホスト達の前に立つ。

「お疲れ様ですっ」

翼はそう言いながら頭をペコッと下げた。

「今日からこちらのお店でお世話になります翼と言います。歳は……24歳です。よろしくお願ひします」

翼は羽月と違い、淡々とした口調で挨拶を終える。

「……よろしくうっ！！！」

先の羽月との印象が違うせいもあってか、一瞬ホスト達は戸惑いながらも元気な声を彼に返した。
。

「よしっ、二人ともそこに座れ！」

後ろからやってきた天馬が、二人に着席を促す。

「よし、じゃあみんな、お疲れッス！！！」

「お疲れッス！！！」

天馬の挨拶に、ホスト達全員のこれまでにないくらいの声が響く。

「今日から新人が二人入ってこれからどどんうちも盛り上がってくから！今のところ全然トップ3のナンバー変わってないし、ハッキリ言う！結果出せない奴はダメとは俺は言わないけどやる気ないと思われるのは自分らだからな？」

「ハイッ！！！」

「お前らみんなやる気バリバリ持てば出来るんだから、それがわかってるからホストやってんだろうし！だから絶対に一人一人やる気と自信は失うな！！わかりましたか！？」

「ハイッ！！！」

天馬の喝のような言葉に、その場の空気感が引き締まっていった。

「よし、じゃあ翼と羽月。こっちにいるのがうちのナンバーだ。左からナンバー2 光星(コウセイ)、ナンバー3 由羽(ユウ)！」

天馬の声に、普通のホスト達とは別の『ナンバー席』の二人・黒いロン毛の光星と金髪にショート由羽が翼と羽月の二人にその鋭い視線を送った。

二人もナンバー席にいる彼らと目を合わせる。

「よ、よろしくお願ひしますっ！」

羽月はそう言いながらペコッと頭を下げる。翼もそれにならう。

「二人とも、今はまだ新人だろうがナンバー1をめざすつもりでがんばるようにな！」

天馬は二人にそう言うと、ホスト全員を見渡しあらためて開店の言葉を発した。

「今日も一日やるぞっ！！」

その言葉を狼煙に、今日も【Club Pegasus】は営業を開始していった。

「くは～緊張したわぁ！」

ミーティング終了後、羽月は溜め込んだ息をすべて吐き出すかのように言った。

「でもこれで俺も念願のホストやぁ！翼くん、がんばろな！」

「.....そうだな」

「もお～翼くんせっかくホストなったんやから、もっと楽しそうにせんと！」

「俺の勝手だろ」

翼は相変わらずのように羽月の言葉にも耳を貸さないように返すだけだった。

「ま、お互いがんばってこな！」

羽月はニコツとしながら翼の肩をポンと叩くと、その場からスタスタと去っていった。

『何なんだよあいつは.....』

翼は軽く舌打ちしながら彼の後ろ姿を見ていた。

1 時間後ー

「いらっしゃいませえ！！」

BGMの音量にも負けず、店内のホスト達が一斉に元気な声を上げる。開店わずか1時間で、**【Pegasus】**の店内はすでに半分以上のテーブルが女性客で埋まっていった。

「すごいわぁ……俺すごいお店に入ったんやなぁ」
まだ場慣れのウェイター業務をしていた羽月は、驚きを見せる。
同じく翼も、その圧倒するような雰囲気にごクリと息を呑む。

「翼っ！ちょっとすぐ来い」
佐伯が翼を呼んだ。
「何ですか？」
「今同伴で来たお客さんとこヘルプついてくれ」
「同……伴？」
「ホストが指名客と一緒に店入ることだ。今うちのナンバー1が来たから、そこな席についてくれ。A-1……あそこの角の席だ！」
「はいっ」
「元気よくな！」
「はいっ！」
佐伯に半ば喝を入れられるように、翼はA-1の席につくことになった。
「おお、ついに接客デビューやな翼くん！頑張ってえや！」
羽月はこれからテーブルに向かう翼にエールを送るように言った。

翼は緊張する面持ちで、指定のテーブルに向かう。
今まで接客業をしたことのない彼にとって、そこに向かう一步一步がまるで険しい峠のように思える瞬間だった。
テーブルに着くと、そこには黒いワンピースに身を包んだ30代前半くらいの女性が脚を組んで座っていた。
その隣には一際整ったルックスにウルフヘアの一人のホストが。
二人も翼の存在に気付いたようだった。

「失礼します、翼です。こちらご一緒してよろしいですか？」
「どうぞ」
客である彼女は翼をヘルプ席へと促す。
「失礼します」
翼は一礼してから席へと腰をおろした。

「翼ってんだ？新人？」

女性の隣に座っているホストが翼に問い掛ける。

「はい、今日から入りました」

「俺は翔悟(ショウゴ)。ヨロシクな！」

翔悟は爽やかな笑顔で翼に言った。

「よろしくお願いします」

翼も相槌を打つように頭を下げる。

『翔悟さん……この人がこのナンバー1か』

翼はあらためて翔悟の姿を見してみる。

天馬にも劣らぬくらいの高級ブランドスーツやアクセサリを身につけ、明らかに他のホストとは違うものを漂わせる彼は、自分がナンバー1と言わんばかりの雰囲気を持っていた。

「翼くんだけ、あなたお酒は飲めるの？」

翔悟の客である女性が翼に話し掛ける。

「はい。あの、お名前聞いてもよろしいですか？」

「いつ私が質問していいって言った？」

「えっ……？」

彼女の言葉に、翼はピタリと止まる。

「ちょっと、ボーッとしてないで早く自分のお酒作りなさいよ」

「あ、すみません……」

翼は焦りながら自分のグラスに氷を入れる。

そして、テーブルに並ぶブランデーのボトルの蓋を開け、そこに少量注いでいきミネラルウォーターで割っていく。

「じゃあ、いただきます」

翼は手で添えたグラスを彼女と翔悟に向ける。

しかし二人は楽しそうに話し、翼の方を見向きもしようとしない状態だった。

「あのっ...」

翼がそう言うと、彼女は不機嫌そうに翼を横目を見た。

「何よ」

「いただきます」

「何勝手に飲もうとしてるのよ」

「えっ？」

「何勝手に飲もうとしてるかって言ったの」

「いや、だってさっき.....」

翼がそう言いかけると、彼女は眉間にシワをよせながら顔を強張らせた。

「ちょっとあんた、新人のくせに客に何意見してんのよ！」

「えっ」

「えっじゃないわよ！」

「早紀(サキ)ちゃんまあまあ☆」

怒り散らす彼女...早紀を、横にいる翔悟がなだめるように笑って声をかける。

「そんなに新人いじめないでってえ！」

「だってこうゆうトロいホストって見るとイライラするのよね」

翔悟が笑って諭す中、早紀は横目で翼を見る。

翼は彼女からの視線から目をそらすようにお酒の入ったグラスを黙って見つめる。

「まあまあ☆翼は今歳いくつなんだ？」

翔悟が翼に話を振る。

「.....24です」

「24.....てことは俺の2コ上かぁ。前は何やってたんだ？」

「会社員です。営業やってました」

「会社員？会社員やってたのあなた？」

早紀が興味津々に話に割って入る。

「はい」

「月どんくらい稼いでたの？」

「.....手取りで17万です」

「なーるほど.....そりゃそんなにダサいわけだ」

「!？」

「だってそんな安物のスーツにネクタイピッチリしめてちゃ、ホストってより貧乏リーマンで感

じよっ！」

早紀がそう言い捨てると、翼の表情は少しずつ屈辱感に歪んでいった。
その変化を早紀は気付いていなかったが、翔悟はそれに気が始めていた。

「こ、これから勉強して少しずつ直していきます」

翼はそう言ったものの、その表情には元気さと笑顔は僅かも出ていなかった。
そこに追い打ちするように早紀の言葉は続く。

「勉強したって無理よ。あなた暗いし……それにー」

早紀は言葉を止めると自分の口に煙草を差し火をつける。

「今私が煙草をくわえたのに火をつけないってどうゆうこと？ヘルプの役割じゃないの？」

「あっ……」

翼がハッとする中、早紀はゆっくりと煙を彼に向かって吹き込んだ。
煙が嫌味なほど翼の顔に充満していく。

「ゴホッ」

翼が軽く咳込むと、早紀はフーッと大きいため息をついて煙草を灰皿に置く。

「翔悟、私この子ダメ。ヘルプ変えてくれない？気分悪い」

「もお～しょうがないなあ」

すると翔悟はスッと手を上げる。

それに気付いた佐伯は、A-1テーブルにやってくる。

「何でしょうか？」

佐伯の問いに、翔悟は指であるサインを送る。

それを理解した佐伯は、直ぐさま翼の肩を触り席を外すように指示をした。

「失礼します……」

翼は今すぐ出そうな憤りを何とか隠すように、その場を後にした。

「はい翼くんでしたあ～☆」

そんな彼を送るように…そして場の空気を崩さないために、翔悟は明るく振る舞っていった。

「おい翼、お前あのお客さんに何を言ったんだ！？あんなに怒らせやがって！」

佐伯は厳しい口調で翼に詰め寄った。

「いえ、僕は何も……」

「言い訳はいい！あの人はナンバー1 翔悟の最も太いお客さんなんだ……売上に影響するようなことするんじゃないっ！」

「……すいません」

翼を叱咤する佐伯の様子に、近くにいる羽月と数名のホストが横目で覗いていた。

「あ～あ……あの翼ってやつ何やらかしたんだ？」

「翔悟さんの客怒らせたらしいぜ」

「マジ？歳いってるのにそりゃありえね～べ」

ホスト達がそんな風に話している中、羽月は心配そうにそんな翼を見ていた。

「羽月っ！」

「へっ！？」

佐伯が羽月を呼んだ。

「お前次A-1の翔悟のヘルプに行ってくい」

「は…ハイッ！」

羽月は嬉しそうに返事すると、直ぐさま指定されたテーブルに向かっていった。

「どうも失礼します、羽月ですう！ご一緒さしてもらってもいいですか☆」

羽月は翔悟と早紀に明るく話し掛けるように席へと入った。

「あらっ、今度は明るい子ねえ。とゆーか身長いくつあなた??」

「188ッス！お飲みものをいただいていいですかぁ？」

早紀からの反応もまあまあである。

「羽月だっけ。君も今日から？」

翔悟が羽月に問い掛ける。

「ハイッ！ナンバー1 翔悟さんのヘルプにつけてめっちゃうれしいですわぁ」

「なまってるけど、関西の方出身なの？」

「東京生まれの京都市育ちです☆あ、お酒作りますねえ！」

羽月は内心緊張しながらも、つねに元気だけではなくさмайと笑顔の接客に努めた。

話も少しずつ盛り上がり、翼のヘルプで下がった雰囲気は少しではあるが盛り返していた。

そんな光景を、翼は雑用をしながら口惜しそうに見ていた。

『くそっ、こんなんじゃ……』

初日に関わらず、羽月が接客で上手くいっていることで翼の中に新人特有の小さな焦燥感が生まれ始めていた。

会社員とは違い、ホストになればだれでも簡単に稼げる……心のどこかでそう思い込んでいたのもあり、悔しさや憤りは膨らんでいくばかりだった。

「どうしたんだ」

「あっ……」

考え込んでた翼の横から、天馬が声をかけてきた。

「どうだホストとしての接客デビューは？」

「いえ……」

「その様子だとあの翔悟の客にこっぴどく言われたらしいな」

「はあ……」

「まあ新人ならよくある話だ。次からは気をつけろ、ヘルプも大事な仕事だからな。それと顔に出てるから店の中……特に客の前では絶対に出すな」

「はい」

天馬の言葉に、翼はコクッとうなずく。

天馬もそれに対して軽く笑顔になる。

「ああそうそう」

天馬は何かを思い出したかのように言った。

「もうすぐあるフリーの客がくるんだ。佐伯にも話通しとくから、翼お前後でそこに羽月とつけ」

「あ、はい」

「元気足りねえぞ？」

「はいっ！」

「よしっ、お前基は全然悪くねえんだからしっかりやれ」

天馬は翼の肩をポンと軽く叩き、フロアの各テーブルへの挨拶へと向かっていった。

『社長……』

天馬の思いがけない励ましに、翼の気持ちはどことなく軽くなっていた。
さすがカリスマホストだと納得せざるを得ない…そう考えさせられていた。

『俺もいつか、あんな風に……』

翼の中に新たな何かが目覚めようとしていた。

「いらっしゃいませっ！！」

店内のホスト達の声が、一人の客を【Pegasus】へと招き入れる。

「いらっしゃいませ愛菜様、今日もご来店ありがとうございます」

佐伯が愛菜を迎え入れる。

「こんばんはっ。いいの、今日は天馬の頼みだから特別よ」

「今日もまた素敵な御召し物で」

「やだぁ佐伯さんたらっ！」

淡いパープルのドレスに身を包んだ愛菜の雰囲気は、店内に入るとやはり一際目立っていた。
その姿はもちろん翼の目にも留まっていた。

「綺麗な人だな……」

翼は思わずそう漏らした。

「翼っ！今来たC-1のお客さんのところにっけ！」

佐伯の突然なまでの指示に、翼は驚く。

「えっ！？」

「羽月と二人でつける。すごく大事なお客さんだ、さっきみたいなヘマはするんじゃないぞ？」

佐伯はそう言うと、直ぐさまA-1のヘルプについている羽月を呼びに行った。

『俺が、あのお客さんに……？』

翼の胸中は妙なほどなまでに高まった。

そんな気持ちのまま、彼は愛菜の待つC-1テーブルへと歩いていった。

ざわめく店内の喧噪も先程の翔悟のヘルプの失敗も全く気にならないほど、翼の気持ちはとても高ぶっていた。

気がつくと、いつの間にか翼はテーブルの前に立っていた。

ソファーに座っている愛菜も彼の存在に気がつくと、ニコッと微笑む。

「どうもこんばんは、翼です！こちらご一緒してよろしいですか？」

「どうぞっ」

愛菜は快く翼を自分のもとへと迎え入れた。

第3章へ

「失礼しますっ！」

翼はそう言って愛菜の向かいのヘルプ席に腰をおろした。

「翼くんていうんだ？」

「はい！」

「そんなにかしこまらなくてもいいわよ」

「あ、はい」

翼の初々しい仕草に、愛菜はフフッと笑う。

「失礼しますっ！」

翼の後ろから一人のホストが元気に挨拶をした。

羽月だ。

「羽月です、ご一緒さしてもらっていいですかぁ！」

「どうぞっ」

愛菜は弱冠妙な緊張をしている羽月のことも快く受け入れる。

羽月もニコツとしながら、翼のとなりに座った。

「羽月くんかぁ……君すごく元気いいね。昨日その通りで一人ではしゃいでたでしょ」

「あ、いやー……恥ずかしいとこ見られちゃって……」

羽月は愛菜に対して照れ笑いをしながら頭をかく。

「対照的に翼くんはクールだね？」

愛菜はパッと話の先を翼に変える。

「いえ、そんな。まだ全然慣れてなくて緊張しているだけです」

「緊張してる……か。あんまりダメよ、お客を楽しませるホストが内面必要以上に見せちゃ」

「はいっ」

「翼くん、愛菜さんがすごく綺麗だからすごく緊張してんですよ！あ、僕もですけど☆」

翼をたしなめる愛菜に、羽月が軽くフォローするように話に入る。

「あら、そうなのお？」

「いや～彼の言う通りかもしれません！愛菜さんみたいな人初めて逢ったから」

翼は恐らく今までの人生で言ったことはないであろう歯の浮くような言葉で切り返した。

「ふーん、そうなんだあ」

「愛菜さんは今日はお休みなんですか？」

今度は翼の方から話を切り出した。

その際に、ブランデーの水割りが入ったグラスを差し出す。

「ううん、ホントは今夜仕事なんだけどちょっとわけあって今日は特別にお店抜け出してきてるの」

「お店？」

「うんっ」

「もしかしてえ！」

羽月の声が浮き立つ。

「愛菜さんてキャバ嬢さんか何かですかあ？」

「おいっ」

羽月の言葉を翼が遮る。

「へっ？何翼くん」

「女の人にいきなりそうゆう聞き方はないだろ」

「あっ……」

羽月はハッとした。

つつい『してはいけないこと』をしてしまった。

「す、すみません愛菜さん！」

「いいわよ、そんな気にしないで。ただね、私じゃなかったらすごく怒られちゃうかもだから気をつけなさい」

「はい……」

愛菜の注意で羽月も珍しいばかりに軽く意気消沈する。その話をすぐ改めるように、彼女は続けた。

「まあそう。私は近くのお店でキャバをしてるの。自分で言うのもなんだけど、これでもお水の世界ではちょっとした有名人なのよ。二人とも歌舞伎町は初めてっぽいから知らないかしんないけど」

「はあ」

翼は愛菜に対してどこか気の抜けたような返事をする。

「すごい人だったんですね、愛菜さんは！」

一方の羽月は、はしゃぐように愛菜に言った。

「フフッ」

愛菜がクスッと笑う。

「羽月くん、あなたってホントにストレートって言うかわかりやすいのね。おもしろいわ」

「いやあ〜！」

羽月は照れながらも笑っていた。

ホスト一日目にしてこれだけの美人で気品溢れるステキなトップキャバ嬢と話している……彼にはそれで胸いっぱいになるくらい、非常にうれしいことだった。

「翼くんはあまり私に興味なさそうね？」

「えっ？」

愛菜が翼に尋ね出した。

「普通ホストならここで羽月くんみたいに明るく盛り上がるんだらうけど」

「いや、興味ないなんてそんな……」

「別に怒ってるわけじゃないわよ。ただー」

愛菜は翼に何かを言いかけると、ハッとしたように言葉を止めた。

「愛菜さん？」

「あ、ううん……なんでもないわ。ただね、女の子は少なからず夢心地を味わいにここに来るんだから、あんまり暗い顔しちゃダメよ。天馬のやつからも言われるでしょう？」

「はい……え？愛菜さんは社長とお知り合いで？」

「へっ？」

愛菜のサラっとした発言に、翼と羽月はキョトンとしながら彼女を見る。

すると愛菜は軽くニコッとすると二人に対して口を開いた。

「そうよ。私はこの天馬社長が独立前に現役でプレイヤーやってたときの客なの」

「！」

翼と羽月は目を丸くしながら絶句した。

「フフッ、そんなに驚かなくてもいいでしょ」

「いや〜」

羽月は驚きを少しでも自分から取り除くように、グラスの中をクイッと飲み干す。

そんな中、翼は愛菜に問い掛け始めた。

「あの、愛菜さん一つ聞いてもいいですか？」

「うん、いいわよ」

「えっと……天馬社長みたいなすごい人を指名してた女の人が、何で僕らみたいな新人を？」

「翼くん、ええやんそなん。せっかく愛菜さんが俺ら呼んでくれたのにー」

羽月が翼を咎めようとしたとき、愛菜が割って入るように口を開いた。

「理由は簡単よ。天馬に頼まれたの。ってより、私が前から天馬に頼んでたって言った方がいいかもね」

「社長に？」

「ええ。私、彼が現役を退いて独立して経営側になってからも、彼を応援したかったからしばらくずっとこのお店でフリー客として通ってたの。でも、ナンバー1の翔悟も含めても中々いなくてね……。天馬と同じくらい魅力のあるホストが」

「それで社長さっき僕らを」

「そう。それで久しぶりに入った新人であるあなたたち二人を今付けさせてもらったの」

愛菜は淡々と二人にいきさつを話していった。

「でも新人の俺らが天馬社長みたいなカリスマと同じくらいになんて恐れ多いですわ。ましてや今日入ったばかりですしい」

羽月がそう言うと、愛菜は再びサラッと言葉を返した。

「あら、誰だって最初はそんなもんよ。あの天馬だってそうだったんだし」

「社長がっ!？」

羽月は思わず声を上げた。愛菜はプツと笑いながらも続けた。

「そりゃそうよ。天馬も今でこそはあんな冷静だしカリスマとも言われてるけど、昔……っても2年くらい前私が指名し始めた頃は、すごいがむしゃらで不器用だったのよ。まあ、私や他のお客が磨いたからってのもあるんだろうけど、彼は今のホストにはあまりないような凄まじいまでの努力家なの」

「そうなんだあ」

羽月が静かに驚く。愛菜はさらに続けた。

「今のホストもすごい魅力的ではあるんだけど、当時の天馬みたいなあの『必ず成り上がってやる!』みたいな気合いと独特の魅力がないのよね」

「そうだったんですか」

「言うとな、今夢である経営者になって忙しい天馬に代わるホスト……つまりいずれ天馬のように大きくなる後継者みたいなホストを指名したいのよ」

愛菜はそう言うと、煙草を一本取り出した。

すかさず翼と羽月がそれに火を点そうと同時にライターの火をつける。

「フッフ、二人とも今の話でちょっとは私に燃えたのかしら？」

愛菜はとりあえずな感じで羽月が点した火にくわえた煙草を近づけた。

「フー……。まあ、私は今日今すぐあなたたちを指名するわけじゃないから安心してね？もしかするとあなたたちじゃないかもしれないんだしね」

愛菜は意地悪そうに二人にそう言った。

その際に、彼女は気付かれぬようにうまく翼を特に観察していた。

『この子……やっぱり……』

愛菜は心の中でそうつぶやくと、たまたま通り掛かった佐伯に話し掛ける。

「佐伯さん！」

「何でしょう？」

「ここにピンク入れて！」

「かしこまりました」

佐伯はそう言うと、すぐにその場からスタスタと歩き去っていった。

「あのお愛菜さん、ピンクってもしかして……？」

翼が愛菜に問い掛けると、彼女は無言でうなずいた。

「それくらいはテレビとかで知ってるでしょ？シャンパンの王様、通称ドンペリ。これからホストでてっぺん目指そうと思ってるなら、まずこの味を知っておきなさい」

すると、佐伯の手によりすぐにドンペリ・ピンクが到着した。

三つのフルーツグラスになみなみと注がれる淡い輝きに、翼と羽月は一つの驚きを覚える。

「じゃっ、いただきます」

「ハイッ」

「カンパーイ！」

愛菜・翼・羽月の三人は、クイツとフルートグラスの中を口に注いでいく。
飲み終わると、愛菜はクスッと一笑いをした。
まるでそれが、何かを決定付ける彼女の意志のように……

数十分後一

「じゃあ私はそろそろ帰るわね」
翼と羽月に導かれ、愛菜はエントランスへと歩いていく。
「今日はどうもね」
愛菜は二人に軽いウインクをする。

「いえっ、こちらこそ」
「愛菜さん、また近々遊びに来て下さいねえ！」
翼と羽月もそれぞれ彼女に言葉を返した。

「ああそうそう！」
愛菜が何かを思い立ったように言った。

「二人とも……ホストラしく頑張るのもいいけど、自分の芯だけはしっかり持たなきゃダメよ。
……短い時間だったけど楽しかったわ。それじゃあね！」
「ありがとうございましたあ！！」
エレベーターの中に消える愛菜を、翼と羽月は大きな声で送り出した。

PM 11:30—

「お疲れ様でしたあっ！！」

その挨拶とともに、【Club Pegasus】のこの日の営業は終了した。

「はああっ……」

羽月が糸が一本切れたように深いため息をつく。彼の脇にいる翼も、初日のせいもあり疲れた表情を見せていた。

「よおっ、お疲れさん」

「えっ？」

二人に声をかけてきたのはナンバー2の光星だった。

「お、お疲れ様です」

「どうよ、ホスト初日は？」

「いやぁ～思ってたより大変とゆーか」

羽月は疲れながらも明るい声で光星に言った。

「どうだ……これから店の奴らで飲みに行くんだが来いよ？」

「あ、ハイっ！」

光星の誘いに、羽月は快く返事をする。

「……お前は？」

光星はついでと言わんばかりに翼に声をかけた。

「いえ……せっかくのお誘いですが、俺は今日は帰らせていただきます」

翼は光星の誘いを断った。

すると、光星は一瞬表情をムッとさせると、「行くぞ」と羽月に声をかけその場を後にした。

「あっ……じゃあ翼くん、お疲れ様あ…！」

羽月は翼にそう言うと、光星の後を追うようにそこから走り去っていった。

『苦手なんだよな……職場の大人数での飲み会は
翼はそう思いながら、帰るためにとエントランスに向かった。

「翼」

「えっ？」

翼の後ろから誰かが声をかけてきた。

ナンバー1の翔悟だ。

「お疲れ」

「お疲れ様でー」

すると突然翔悟は翼の服を強く掴みにかかった。

「!？」

気がつくのと、彼の右膝は翼の腹部に勢いよく槍のように突き上がり、僅かな鈍い音をたてていた。

「ぐっ……！」

突然の自らの体への衝撃に、翼は濁った声を漏らしながら膝から崩れ落ちた。

「がはっ……けほっ……」

翼は腹を抱えながら自分の目の前に立っている翔悟の顔を見上げた。

彼は営業時とはまるで別人のような恐ろしく鋭い眼光で、翼を見下ろしていた。

「なっ……」

「なっ……じゃねえよ、翼」

翔悟のドスの効いた低い声が響き渡る。

それにより、ホスト数人が何事かとその光景をやじ馬のように見始めていた。

「お前……今日みたいな接客で早紀が店こなくなったらどうするつもりだ？」

「げほっ……。いや、俺は何も……」

その時、翔悟は翼の襟首を両手で掴み、しゃがんでいる彼を無理矢理立たせるようにグイッと持ち上げた。

「何も、じゃねえんだよ。お前がどうかじゃなくて結果客の気分を害させたことを聞いてんだよ？」

翔悟はさらに両手に力を入れる。

「す、すいませんでした……」

翼は痛みで苦渋の顔をしながらそう言った。

「今度あんなありえないヘマしたら、こんなもんじゃすまないからな」

翔悟は翼を睨みながらそう言うと、彼の襟首をドンと突き放し無言でその場を後にした。

翼はヨロツとしながら、ひとつ大きなため息をつく。

「君、翔悟さんとか光星さんをあまり怒らせない方がいいぞ」

そう言って後ろから翼の肩をポンと叩いたのは、ナンバー3の由宇だった。

「じゃあお疲れ」

「お、お疲れ様です……」

由宇は軽くニコツと挨拶すると、すぐにエントランスから消えていった。

『くそっ……』

何も言わなかったものの、翼の心は苦渋の感情に充ちていた。

そんな気分で彼が帰ろうとしていたその時だった。

「翼！」

エントランスを出ようとした彼を天馬が呼び止めた。

「社長...お疲れ様です」

「お疲れ。どうだった今日は？」

「何とか...」

「元気ないな。そんなんじゃ、ホストは務まらないぞ？」

「はい、すみません……」

「よしっ、じゃあまた明日な！」

「お疲れ様でした……！」

翼は天馬に挨拶をすると、そのままエントランスを出てホスト一日目に終わりを告げるようにビルを下りていった。

ビルから下りた翼は、一本の煙草に火をつける。

「くそっ……あんな年下のやつらに……！」

翼は煙草の煙を口からはきながら、道ばたに落ちている空き缶を八つ当たりするように蹴り飛ばした。

「カンカーン」と軽い音がネオンの中を虚しく響かせる。

「はあ……はあ……」

よほど疲れたのか腹立たしいのか、それだけの一瞬の動作でも翼は激しく呼吸を乱す。

「翔悟……あいつ……！」

翼は恐ろしいまでの目付きでそうつぶやく。

すると、目の前の電柱に勢いよく右手の拳をたたき付けた。

「ぎっ……！」

電柱からの『ゴッ』という鈍い音が、さらに翼の表情を険しくさせる。

「あの客の女も気に入らないが……あの野郎……」

翼は再び拳を電柱へとぶつけた。

もう一度、さらにもう一度…彼は自らの右の拳をその電柱へと何度も何度も打ち込んだ。

その度に鈍い音がさらに鈍さを増して虚しくこだまする。

打ち込み続けた電柱には、赤い痕跡が生々しく残っていた。

その出所は、痛々しいまでに赤く染まった翼の右手からなのは、どう見ても明らかだった。

「くっ……！」

翼は右手の動きをピタリと止めると、苦渋の表情を著しく示した。

「あいつ……翔悟……。翔悟オ……ナンバー1だか知らないが俺が絶対に……！」

血で滲んだ右手をぶらりとふらつかせながら、翼は息を切らせるように翔悟への憎しみを口から漏らしていった。

するとふっと、その表情をニヤリとさせる。

「そうだった、暗くなってる場合じゃない。ホストは実力の世界……偉そうにしてるあの野郎を

引きずり下ろしてやる……！それであいつをひざまづかせてやる！」

翼はその瞳に恐ろしいまでの何かを宿したように、再び電柱に目をやり右の拳をこれでもかと言う勢いで激突させた。

「今に見てろ……！！」

その真っ赤に染まった右手を握りしめ、翼はその場を離れるようにネオンの中を歩いていこうとした……その時だった。

誰かが翼の肩をトントンと叩いた。

「んん？」

翼が後ろを振り向くと、買い物袋を持った一人の黒いセミロングヘアの大人しそうな少女が立っていた。

年齢は二十歳前後くらいだろうか、彼女は大袈裟なまでに驚いた表情で彼の右手を見ていた。

彼女は翼のその怪我した右手をゆっくり指さしていく。

「ああ、これね。いいんだ……て言うより、君は？」

翼がそう言うと、彼女は無言で肩にかけていたバッグからオレンジ色のハンカチとポケットティッシュを取り出した。

「……」

「へっ？」

彼女は翼の右手を自分によこすように、左手を差し出した。

翼もわけのわからないままにと、その血まみれの右手を差し出す。

すると彼女は、数枚のティッシュでこびりついた血を拭きだした。

「お……おい、そんないいよ君……！」

彼女の突然の行動に、翼は驚きながらそう言った。

しかし、彼女は彼の目をまっすぐ見つめ首を横に2往復振る。

「……」

翼はそんな彼女の行動を不思議と思いつつも、黙って見ていることにした。

彼女はティッシュで血を拭き終わると、そこに絆創膏を貼り、さらにその上からオレンジのハンカチを包み込むように結んだ。

彼女は『これでよし』と言わんばかりに、笑顔で縦に首を振った。

「あ、ありがとう」

翼は応急処置されたその右手を見ながら言った。

彼女もニコツとしながら彼の顔を見つめる。

「ホントにありがとう。これー」

翼がそう言いかけると、彼女はペコツと頭を下げその場をスタスタと歩いて去っていった。

「あっ……」

翼はしばしそこに立ち尽くした。

『何だったんだろう、あの女の子』

翼はそう思いながら、右手に縛られたハンカチと消えゆく彼女の背後を交互に見続けていた。

「……」

翼はふと何度も殴り続けた電柱を見た。

自分の右手と違い未だ赤く染まったそれは、数分前の憎しみの感情に燃えていた自分の象徴のようにも見えた。

『また明日から仕事だ。俺は必ずあの店で成り上がってやる……！』

翼はそう誓い、ネオンに輝く歌舞伎町からの帰路へとつこうとしていた。

その瞳に、さらなる闇を宿しながらー。

第4章へ

翼と羽月が【Club Pegasus】に入店して一週間、二人は少しずつではあるがホストの世界に慣れはじめようとしていた。

しかし、肝心の女性客からの指名と言う点では、如実差が開き始めていた。

「羽月やったな！この一週間でもう二人の指名客をつかんだな」

「いや～社長や皆様のご指導のおかげですう」

嬉しそうに自分をほめる佐伯に、羽月は照れながらも嬉しそうに答える。

「その調子で、どんどんいけよ！」

「ハイッ、ありがとうございますう！」

まだ京都訛りの抜けない元気な声は、店中に大きく響き渡った。

「羽月すげえな。入店二日目で一人指名とって、一昨日で二人目だもんな」

「ああ、あいつ若いし身長高いし女ウケもいいもんな」

周りのホスト達も、少しずつホストとしての芽が出てきた羽月を評価し始めていた。

だが一方の翼はと言うと、この一週間でまだ一人の指名をも取れずにいた。

『くっ...』

羽月の元気な声が、複雑に彼の心に突き刺さる。

入店わすが一週間などまだ新人だが、同期の羽月が順調に指名をもらっていくことに彼自身その差に焦らずにいれるわけがなかった。

もちろんそれにより、店内での自分への評価も羽月と比較された上でのものになっていく。

それらのことが、彼の心を大きな焦燥感として煽っていた。

そんな彼を周囲がどう思っていたかと言うと.....。

「まあ羽月はいいとしてもよ、あの同期に入ったって奴どうよ？」

「ああ.....翼だっけ？」

「ああ～。あいつは.....なあ？」

「顔はいいんだけど、無愛想だし付き合い良くねーし、なんか固いつてか絡みづらいんだよな～

」

「翔悟さんたちからのいい風に思われてないしな。仕事もそんなできてるってわけじゃなさそうだし」

周囲からの翼への反応は、羽月へのそれとは全く逆のものだった。

翼本人も、歯を食いしばるようにそれを耳にしては耐えるように店での仕事に勤もうとしていた。

「いらっしゃいませえ！！」

【Club Pegasus】は今日も開店と同時に、多数の女性客が店内へと入っていく。

学生・OL・サービス業など、様々なタイプの女性の姿がそこにはいた。

ナンバー1の翔悟をはじめ、ここのホストに何かを求め彼女達はやってくるのだ。

雑用を主にしている自分と、ソファで高級酒片手に女性と楽しげに話している……翼は今の現状に天国と地獄とさえ言っていいくらいの落差を痛いほど感じていた。

『くそっ……これじゃ会社のとときと何ら変わらない……！』

翼の中の不安や焦りは、時間と比例しながら少しずつ膨らんでいった。

「翼！ A-3 ヘルプだ！」

佐伯の声が翼を呼ぶ。

「はいっ」

翼は雑用で汚れた手をサッと洗うと、直ぐさま指定の A-3 テーブルへと向かった。

「おい！ こっちだ！」

翼を誰かが招いた。

ナンバー2の光星である。

そこには、彼のお客らしき20代前半くらいのギャル風の女性と、同じ歳くらいのもう一人おとなしめな女性の姿があった。

「失礼します、翼です！」

「おう、座れ」

光星は翼をヘルプ席へと招き入れる。

「えっと翼だっけか？」

「はい」

翼と光星の会話は最初そんな平淡なものだった。

「翼くんて言うんだ？新人さん？」

光星の指名客らしきギャル風の女性が、翼に話し掛ける。

「はい。えっと、お名前伺ってもよろしいですか？」

「あたしは果穂(カホ)、よろしくね。んで、こっちのおとなしい子は友達の梨麻(リア)ね」

「どうも...」

光星を挟んで彼の反対隣に座る梨麻という名前の女性は、ミニスカートなどの露出の多い服装の割には妙なほどおとなしい反応を示した。

「よろしくお願いします！」

翼は彼女達の挨拶に習うように、頭をペコリと下げた。

「まあ飲めや」

光星は、ブランデーの入ったボトルを手に取りその口を翼に差し向けた。

「いただきます」

翼はアイスを入れた自らのグラスをそこに差し出す。

トクトクと注がれる茶色い輝きを放つブランデーは、勢いを止める事なく翼の手にあるグラスを充たしていった。

「えっ.....」

翼は一瞬声を漏らした。てっきり半分くらい入れて後はミネラルウォーターでそれを割るものと思っていたからである。

「まあ飲めや」

光星は先程と同じ言葉を淡々と言うだけだった。

そう話す彼の前で、翼はあらためて自分の手にあるグラスに視線をやった。

明らかに40度はあるだろう高アルコールの臭いとが濃いまでのブランデーの色が、彼の嗅覚と

視覚を著しく襲っていた。

「光星さん、ロックこんなに……ですか？」

翼は息を詰まらせるように光星に尋ねた。

一方の光星は当然とでも言うように首を縦に振る。

その際に彼の口元がニヤリと形を変えたのが、翼にさらなる緊張感を与えた。

「早くう、飲んでよお～」

向かって光星の左隣にいる果穂が、とどまっている翼をさらに煽った。

「お前新人だろ？新人ヘルプは少しでも多く飲んでくのが仕事なんだよ！」

光星は見下すような目付きで翼に詰め寄る。

「……」

翼は黙ってゴクリと息を呑む。

そして意を決したように、満たんのグラスをそのまま口に持って行った。

「おお～」

光星と果穂は、特に驚くわけもないように同時に声を出す。

「んぐ……んぐ……」

微かに声を漏らしながら、翼はグラスの中身をやっとの思いで消化していった。

「ぷはっ」

翼は思わず勢いよく息を吐いた。

「翼くんカッコイイ～♪」

果穂の黄色い声はその場に響き渡る。

「どうも……いただきましたっ！」

翼は急なアルコールに酔いを感じながらも、何とか振り絞った笑顔で言った。

その光景を、もう一人の客・梨麻が神妙な表情で黙って見ているなど知らずに。

「よしっ」

光星は当然のようにボトルを持ち出し、その口元を翼に再び差し向けた。

「えっ……？」

翼は目を疑った。

「えっ、じゃねえよ。ホラ」

「いや……さっき……」

「俺がさっき言ったことをもう忘れたか？」

光星はドスの効いた声を翼に突き刺す。

「ヘルプは飲むのが仕事……だよな？」

そう言うと、光星の手にあるボトルの中身は強引の如く翼の右手にあるグラスに注がれていった。

やっとの思いで飲み干したものが、再びグラスを茶色い輝きに染めていく様を、翼は信じられないとでも言うような表情で見っていた。

それから30分後ー。

「ほれほれ！翼～早く飲めよ！」

「翼くーん！まだまだ飲めるよねえ～☆」

光星と果穂の煽りは全く留まることなく、さらにエスカレートしていった。

その間すでに6杯、翼はグラスに次々と充たされていくブランデーを飲み干していった。

「くはあ……はあ……」

翼はその顔を通常とは比べものにならないほど赤らめ、を苦悶の表情を浮かべながら呼吸を乱していた。

「はあ……う……」

「おい翼あ！まだまだだあコノヤロオ！」

「翼くーん！もう終わりなのお！？だっらしなあ～い」

ほろ酔いもあるのか、光星と果穂は罵倒するように翼に言葉を発した。

「ねえ果穂ちゃん……」

それまで、横で静かに黙って見ていた梨麻が口を開いた。

「梨麻～どうしたのお？」

「もおそのへんにしてあげようよ…翼さん、辛そうだし」

梨麻はおとなしげな口調ながらも、果穂に制止を促した。

「ちょっと～梨麻どうしたのよお？一度ホストクラブ行きたいってからせっかく【Pegasus】に連れてきたのにい……楽しくないのお！？」

「楽しいよ。楽しいけど……これじゃ翼さんが……」

梨麻は横目で翼を見ながら言った。

しかしこの一言が笑っていた果穂の表情を恐ろしいまでに一変させた。

「ちょっと梨麻アタ！誰の金で今日飲めてると思ってんのよ！」

「まあまあ、落ち着けよ果穂」

「光星は黙ってて！ちょっと梨麻、だったらあんた帰りなさいよ！誰の金でこーゆーところで高いお酒飲めるとしてんのよ」

果穂は間に入る光星をさえぎりつつ、さらに梨麻につめよった。

「だって……」

一方の梨麻も、果穂の勢いに押されたのか半分俯いたまま黙ってしまった。

「おいおいやめろって二人ともお」

「光星！あんたどっちの味方なのよっ！」

「果穂お～」

酔った勢いもあり大声で怒鳴り付ける果穂に、光星も少したじろぐ。

しかし、彼は一瞬にして目を鋭く変化させ、その視線の標的をへばりかけている翼へと向けた。

「おい翼っ！もとはと言えば、お前がそんなだらしねえ感じになってるからだろうが！！お前が空気読まねえせいで果穂と梨麻ちゃんがケンカしてんだよ！！」

光星はまるで八つ当たりでもするかのように翼に大声を浴びせた。

「ケホッ…ケホッ…」

「ケホケホじゃねえんだよ！！オラ飲めよ！！」

「光星さん！もうやめてあげて下さい！翼さんもう辛そうなのに、何でそこまでさせるんですか……！」

「梨麻ちゃん、悪いけどこれがホストなんだよ」

光星は梨麻に視線を合わせずそう言って立ち上がると、自分の向かい側にいる翼の襟元を左手でグイッと掴みだした。

「ちょ……光星……さん」

翼は酔いながらも驚きの表情を見せる。

しかし、光星は止まらない。

「お前の仕事は何だ？ええ？」

翼の襟首を掴む彼の反対の手には、いつの間にか飲み続けていたブランデーのボトルがあった。

「ちょっと……光星さん?!」

梨麻の表情が緊張で強張る。

「これがお前の仕事だろうがっ!!」

その時、「ガッ」という鈍い音がした。

気付くと、光星はボトルの注ぎ口を無理矢理翼の口に突っ込んでいた。

「うぐえ……！」

「ほら、飲めよ！！」

「飲め飲めえ～！」

果穂の煽りも手伝い、光星はボトルの中身を全て翼の体内に注ぎ込むかのように、右手のそれをグリグリと押し込んだ。

「うっわ、あれはきついぞ」

「さすが光星さん、新人キラーだよなあ。あの翼ってやつ、もうもたねえかもな……」

他のホスト達が遠くからそう囁く中、光星の『新人潰し』は止まることなく続いた。

その光景は、周囲のテーブルにいる客やホスト達からの視線すらも集め、その中には光星を応援する人間さえもいた。

「光星！光星！光星～！！」

「ほーら新人君だらしないぞ～！！」

終いには、翼に対するヤジまで現れる始末になっていった。

「オラっ、飲め翼ァ！！」

光星の右手の力がさらに込められ、ボトルは翼の口の上で垂直にまでなるほど強引に押し込められた。

「いけいけ～☆」

「つ、翼さんっ！」

煽る果穂・心配する梨麻に見つめられる中、翼は赤い顔をさらに赤く染めその表情を苦しくしていった。

『うっ……』

その時だった。

翼は突然自分の中の何かがフッと失った感覚を覚えた。

気付いたときには、口に押し付けられたボトルを振り払うように顔を左右にグラグラと動かした翼が、ぐらりぐらりと不規則に揺れながら足元をもたつかせていた。まるでスローモーションでも見ているかのように、翼はそのままの立っている体勢で横に体を倒していた。

「キャアアア！！」

「ちょっと何よこれえ！！」

気付いたときにはすでに遅かった。

翼が口から振り払ったブランデーのボトルは、光星の手から離れ隣のテーブルへと真っすぐに飛んでいった。

それが着地した瞬間、「バリン」という弾けた音と同時にボトルはオシャレなデザインの面影が全く見え失せるほど、木っ端みじんに砕け散っていた。

しかし、騒ぎの出所はそれだけではなかった。

極度の酒酔いでフラフラになった翼は、ボトルが飛んでいった方の反対側のテーブルに、その体ごと放り投げ込むかのように沈んでいった。

翼の衝突が原因となり、そのテーブル上にあったアイスペールやグラス・灰皿などが見るも無惨に様々な音をたてながら散乱していった。

「ちょっと何よもう！！」

「服にかかったあ～！！」

「やだ……グラスで手え切っちゃった……」

騒ぎのあったところで、女性客からの様々な痛々しい声が聞こえ始める。

「お客様、大丈夫でしょうか！？大変申し訳ございません！」

駆け付けた佐伯が、ざわめく中頭を下げに下げる。

そして、彼の視線の先には散乱したテーブルの上にもまるで惨殺死体のように横たわる翼の姿があった。

「おい翼！お前...何をやらかしたんだ！お客様のご迷惑だ、さっさとここからどけ！！」

「う.....」

佐伯が大きな声で怒鳴るも、深い酔いのせいで翼の反応は微々たるものだった。

「翼！起きないか！！」

佐伯は、翼の頬を2、3回強く叩く。

「うぐ.....」

翼の赤い顔は、体温を引いたように徐々に蒼くなっていった。

「光星、お前またどれだけ飲ませたんだ！？」

佐伯は今度は光星へと視線を変えた。

「別に...いつも通りですよ」

光星はフンと鼻を鳴らしながら言った。

「だからって、翼のこの酔いは普通じゃないぞ！」

「こいつが酒弱いくせに飲みたい飲みたい言うんですよ」

光星が佐伯にそう言い返したとき、となりにいた梨麻が信じられないとでもいいかげな驚いた表情を示す。

「信じらんない.....こんなのがホストクラブだなんて.....！」

そう言うと、梨麻はバッグを持って突然立ち上がった。

「ちょっとお梨麻あ、どこ行くのよお！」

果穂が、立ち上がった梨麻を止めるように気の強い声をかけた。

「もお.....帰る」

「ハア！？ちょっと待ってよ、だれのおかげで今夜飲めるとー」

「じゃあいくら払えばいい！？こんなのじゃおごられても全然楽しくないっ！」

自分を制止しようとする果穂に対し、何かが切れたかのように梨麻が言い返す。

そんな彼女の一言に、果穂もビクッとしては黙ってしまった。

「.....じゃあね」

梨麻はそう静かに言うと、テーブルに5万円置きバッグを持ってその場からスッと立ち去っていった。

「な.....何よあれえ！！超ムカツク！！」

すると、果穂はバッグから財布を取り出し、翼を抱えている佐伯に話しかけた。

「ちょっと、もうチェックして！」

「あっ!？」

果穂の言葉に、光星は顔をしかめた。

「ちょっと待てよ果穂、お前はまだいればいいじゃんよ」

「光星、今日はもうなんかいいや。またにして」

果穂は光星にそう言うと、財布から次々と札を出していった。

その際に佐伯は、他のテーブル客に謝りながらも、一人のホストに酔い潰れた翼を預け急いでチェックへと回った。

「じゃあね、光星」

果穂はチェックを済ませると、スッと何かが冷めたように【Pegasus】の店内を後にしていった。

「くっ……あの野郎……！」

光星は目をつりあげながらそうつぶやいた。

一方酔い潰れた翼は—

「おい、大丈夫かよ!？」

「うう……」

他のホスト二人に連れられ、店の外に出されていた。

客のいるテーブルに倒れたため、アイスや酒などでスーツは所々湿り気を帯びていた。

「しかしお前も光星さんに飲まされたな～」

「……」

翼は彼のその言葉に反応しなかった。

いや、できなかった。

「おい!!」

その時、怒りのこもった声が翼達の背後から聞こえてきた。

「こ、光星さん……」

翼を抱えていたホスト二人がそう言うと、光星はずんずんと歩いてきては突然翼の髪の毛を右手でわしづかみにした。

「ちょっとこいや！」

「うう…」

すると、光星は酔った翼を強引に引っ張るようにエレベーターの中に引き込んだ。

「あれ……やべえよな」

「ああ……」

二人がそうつぶやく中、そこに店から出てきた羽月がやってきた。

「すみません、翼くんは！？酔い潰れたって……！」

「あいつ……今さっき光星さんがエレベーターで連れてったよ」

羽月がふとエレベーターのランプを見ると、それは1Fへ下りていったことを表示していた。

「ちょっと行ってきます！」

「お、おいっ！」

羽月はもう一つのエレベーターに入ると、すぐさま1Fへと下りていった。

「おい翼！！お前のせいで果穂が帰っちゃったじゃねえかよ、えっ?!」

光星はビル脇の壁に翼をたたき付けるように詰め寄っていた。

「うう…」

「ううじゃねえんだよ！！翔悟さんに続いて、今度は俺の客にまで妨害する気かよ、ああ!？」

「そんな……俺は言われた通りに……」

「言い訳するんじゃねえよ、他の奴ならもうちょっと要領よくやってんだよっ!!」

その際に、光星の右の拳が翼の左頬を一発打ち抜いていた。

「ぐぶっ」

「覚悟できてんだらうなあ……てめえ」

もはやグラグラの翼には、抵抗する力すらも残っていなかった。

光星は再び、その右の拳を振り上げた……その時だった。

「やめて下さい！」

光星の右手を誰かが抑えた。それは羽月だった。

「羽月、お前……」

光星も意外そうな表情でそんな彼を見ている。

「光星さん、今翼くん弱ってるわけやし、今は穏便に見とって下さい。お願いしますう！その分僕がんばりますからあ！」

羽月は懇願するように光星に頭を下げた。光星もその右手をスッと下げる。

「何でそこまでこいつに気を使うのかは知らねえが……。まあいいや、今回はお前に免じてやるよ」

「おおきに……ありがとうございます、光星さん！」

「ケッ！」

光星はそう捨て台詞を残すと、エレベーターの方に向かっていった。

恐らく店に戻るのだろう。

「うう……」

「翼くん、大丈夫！？」

羽月は今だ青ざめてる地面で仰向けの翼に声をかけた。

彼の顔には、光星に殴られた痕跡がくっきりと残っている。

「どないしよう……こんなんじゃ店に翼くんを戻せへんな……」

羽月がそうつぶやいていたその時だった。

「あらっ、羽月くんじゃない。どうしたの？」

彼の後ろから声をかけてきたのは愛菜だった。

第5章へ

「ま、愛菜さんっ！おばんですう！」

突然姿を現した愛菜に、羽月は緊張した面持ちで言った。

「ふふ、そんなに緊張しないでよ。それよりこんなところでどうしたの？」

愛菜は羽月にそう問い掛けたが、彼の両手に抱えられている泥酔した翼を見て大まかなことは理解したようだった。

「相当飲まされたみたいね。しかも顔にまでアザを作っちゃって」

「ええ……僕も何がどうなったかは詳しくはわからへんのやけど、さっきー」

羽月は自分が知ってる限りの一部始終を愛菜に話し始めた。

「……ふーん、あの光星にねえ」

「はい、すごい剣幕やったんやけど」

愛菜は羽月からの説明でほぼ事情はつかんだようだった。

「で、羽月くんはどうしたいのよ」

「えっ？」

「翼くんよ。今の状態じゃあ店に戻すわけにもいかないでしょ」

「はい、光星さんにはああ言ったものの、もうどないしようか……」

羽月の言葉に、愛菜はフッとため息をつく。

「あなたって後先考えず口や手が出るタイプでしょ」

「そうかもしれへん」

愛菜のたしなめに、羽月は何かを自覚したかのように言った。

「まあいいわ。ホントは店に行ってちょっと飲んでこうって思ったんだけどね」

すると愛菜は、偶然そこに通り掛かった空席のタクシーを止めようと手をあげた。

タクシーは愛菜のもとに流れるようにスッと止まり後部座席のドアを開ける。

「愛菜さんすみません、せっかくお店来てもらったのに」

「ん？羽月くん、早くっ」

愛菜は何かを羽月に促していた。

「えっ、何ですか愛菜さん」

「翼くんをよ。早く後部座席に乗せて」

「ええっ??」

愛菜の一言に、羽月は目を丸くする。

「乗せるって.....??」

「今日の彼は私が連れていくわ。天馬には私からTELしておくから、あなたはお店に戻りなさい」

「連れていくって.....」

「別に変なことするわけじゃないわよ。今彼を店に戻してもまたごちゃごちゃするだけでしょ？」

「で、でも翼くんはー」

「ごちゃごちゃ言わない！あなたもホストならお客の言うことくらいスッと受け入れなさい！」
困りふためく羽月を愛菜が一喝した。

「.....はい、すいませんでした」

「お願い、後で私もTELしとくけど天馬や佐伯さんにはうまく言っておいて。さっ、手伝って」

羽月と愛菜は、酔い潰れて意識が朦朧としている翼をタクシーの後部座席の奥へと押し込むように座らせた。

その隣に愛菜がスッと腰をおろす。

「じゃっ、お願いね羽月くん」

翼と愛菜を乗せたタクシーは、立ちすくむ羽月のもとを走り去っていった。

「.....愛菜さん」

羽月はポツリと愛菜の名前を切なそうにつぶやいた。

「...アカン、店に戻って言ってこな...」

そう言うと、羽月は店へと戻るためにエレベーターへとかけていった。

「.....そうか。愛菜さんが」

「ハイ。後で社長にも電話するってことみたいですわ」

「わかった、社長はまだ同業から帰ってきてないから、後で俺からも連絡しておく。羽月、お前

も仕事に戻れ」

「ハイっ！」

羽月は佐伯との話を終わると、ホールの方へと元気に向かっていった。その元気の裏に、微かなわだかまりを抱えながら。

それから数時間後ー

「うんん……」

あれから愛菜に連れられていった翼が、うなりながら目を覚ました。

『ここは……？何で俺がベッドに？』

翼は横になっていたベッドからムクリと体を起き上がらせ、周りや自分をキョロキョロと見渡した。

白を基調とした壁に茶色のテーブルや椅子、窓の外に広がる夜景、そして何より自分が今ぼつんというダブルベッド。

そのベッドの上でワイシャツとパンツだけになっている自分自身。

突然のことに、翼は今の状況が半ば理解できずにいた。

「イテッ！」

激痛が走ったのか、翼は自らの右側頭部をパッと右手でおさえた。

『そっか……確か俺はあの席ですごく飲まされてー』

翼は少しずつだが、店からの記憶を呼び戻そうとしていた。

「しかし……ここはどこだ？」

翼はベッドからグレーのカーペットが敷いてある床に両足をおろすと、重い身体を起こすようにその場に立ち上がった。

「どこの部屋だ……んっ？」

すると、部屋のどこかから一定量の水が滴り落ちる音が翼の耳に入った。

「シャワー……誰かいるのか？」

すると、その水の滴る音はパッと止まる。翼は何かと思い、その音がしてきたバスルームらしきドアを見つめた。

『誰だ……こいつが俺をここに連れてきたのか』

30秒ほどたっただろうか、翼は構えるように心の中でつぶやいた。

するとそのドアは、呆気ないほどガチャリと開いた。

「ふうう」

そのドアからは、湿気を帯びたシャンプーの香りとともに、白いバスローブに身を包んだ長身の美女が姿を現した。

「えっ!？」

翼は言葉を失った。そんな彼に、彼女は「おっ」と気がついたようだった。

「翼くん、目を覚ましたみたいね。気分は大丈夫？」

「……」

翼は絶句して固まったまま動かなかった。

「ちょっと、私のこと忘れた？前にお店で会ったでしょ？愛菜よ、マ・ナ！髪下ろしてるからわかんないかな」

「い……いや、はい……」

目の前にいるバスローブの美女が愛菜だということはわかったようだが、翼にとっては何故自分

がここにいて、そして何故愛菜がいるのか……という突然の状況に頭の中の整理がついていけなかった。

「あの、愛菜さん……俺は何故ここに？ってより、何故愛菜さんが??」
翼は今の自分が誰だかわからないと言ったようなそぶりで愛菜に尋ねた。
愛菜はフッとため息をつく。

「とりあえず簡単に教えてあげるわ。まずここは私がたまに気分転換に使ってるシティホテルよ」

「ホテル??」

部屋をキョロキョロと見回した翼は無理矢理ながらも納得したようだった。

「まあそれはいいとして…聞いた話だけどあなたお店ですごく飲まされて酔い潰れちゃったのよ？覚えてない？」

愛菜の言葉に翼は一瞬考え込むと、何かを思いだしたかのようにフッと顔を上げた。

「……！俺は確か光星さんに……」

「そうよ。店で大倒れしたあなたはその後ー」

愛菜は自分が知ってる限りの事の顛末を翼に話した。

「そうだった……」

翼はなにもかもを思い出したようだった。酔いが少しずつ消え失せたその顔に、今度は苦渋の色が浮かび始める。

「光……星……」

翼は気が付くとその名前をじわりじわりとつぶやいていた。

彼の表情のそれは、怒りなのか悔しさなのか…わからないほどの歪みを見せていた。

「くっ……！」

翼は膝からガクンと崩れ落ち、上体をベッドに預けるようにうなだれた。そんな光景を、バスロ
ーブ姿の愛菜は黙って見つめる。

「くそっ……」

「ちくしょう……！」

翼はその二つの言葉を何度となく繰り返しながら、握り込んだ右手の拳でベッドに打ち付け続けた。

「バフッ」という柔らかい音の連続が、虚しく空を切るように響く。

「あいつ……あんなやつに……あいつ……」

前の二言の次に出た翼の言葉はそれだった。

声は時間を追うごとに弱々しくなり、終いには言葉になっていなかった。

その時、ベッドの白いシーツをじっと睨んでいる翼の顔からポタポタと滴り落ちる何かが、真っ白いそれをじんわりと濡らし始めていた。

「うう……うっ……くっ……」

翼は泣き崩れていた。

理不尽な光星への怒りか、いいように飲まされてただけの自分への悔しさか、はたまた情けない姿を愛菜の前で曝している今の自分への怒りかー。

様々な怒りと悔しさの積み重ねで、翼はベッドに拳と涙を打ち付けることしかできなかった。

しかしその時だった。

愛菜は翼の上体を無理矢理起こした。

その直後、「パン」と言う音が部屋の中を響き渡る。

「なっ……」

翼は自分の左頬をおさえながら、目を丸くして驚いていた。

彼の目の前には、右手を素振りしたかのような姿勢をとっている愛菜の姿があった。

彼女の瞳は鋭く、しかしどこか切ない光を放っていた。

「男がいつまでもウジウジ泣いてるんじゃないわよっ！！」

愛菜は強い眼差しで、翼にそう言い放った。

「愛菜さん……」

「水商売なんてのはね、やってれば嫌なことや辛いことなんて誰だっていくらでも出てくんのよ！そりゃ光星のしたことは理不尽だったかもしれない……でもね、男なら……ホストならちょっとは見返してやるくらいの根性出してみなさいよっ！！」

愛菜は、落ち込み続ける翼に対してさらに言い放った。

「男はね、どんなつらいことがあっても折れそうなきときでも、絶対負けちゃいけないの！」
そう強く言い放った愛菜の瞳は、厳しさと同時にどこか悲しさを漂わせていた。
彼女の激しい言葉に、翼は動こうともせず無言で彼女の瞳を見つめていた。

「自分を証明したいって、あなたそう天馬に言ったんでしょ？それともその言葉は嘘だったってこと？」

「.....」

翼は言葉を失っていた。

男としてホストとして、突かれない痛いところを指摘されてしまった彼は、もはや何を言うこともできなかった。

ただ、言いようのない悔しさと憤りが彼の瞳から多量の涙を頬へと導いていた。

「翼くん、ホストを辞めるの？」

「.....」

「まだ一ヶ月も経っていないのに、辞めてしまうの？」

「.....」

「.....そう」

無言の翼に、愛菜が諦めたように言った。

しかし、その時だった。

「.....たくない」

「えっ？」

「辞めたくない.....。俺はまだ、辞めたくない...」

「翼くん」

「もう、もう.....あの時みたいな惨めな目に合うのはたくさんだ！」

そう言った翼の瞳を見て、愛菜はハッとした。

『あの写真のときと同じ瞳だ……。やっぱり似てる、あの子に……』

愛菜は、今日の前にいる翼をとある人物を再びオーバーラップさせていた。

悔しさや怒り、哀しさと言ったドス黒いほどの心の闇のすべてを映し出した彼のその瞳に、彼女はまるで吸い込まれていくように魅入っていた。

『似てるのはあの子だけじゃない……。昔の私とー』

愛菜は翼とその人物だけでなく、加えて過去の自分自身をも重ね合わせていた。

そんなことも知らず、翼はその黒い瞳から流血にも似た痛々しい涙を流し続けている。

愛菜はハッとするように我に返り、再び口を開いた。

「あなたに昔何があったかはわからない。でも今は顔を拭きなさい、せっかくのルックスが台なしよ」

そう言って愛菜は、持っていたフェイスタオルをスッと翼へと差し出した。

「……すみません」

翼は受け取ったそれで顔を拭くと、一言力無く愛菜に返した。

「シャワー浴びてきなさいよ。スッキリするわ」

「はい」

翼は愛菜に促されるまま、体をよろつかせながらバスルームへと歩いていった。

「……」

そんな彼の姿がバスルームの中へと消えていくまで、愛菜は見守るようにそれを自らの視界の中へとらえていた。

服を脱ぎ全裸となった翼は、大理石を基調としたシャワーの中で湯浴みを始めていた。先刻間もないときに愛菜が浴びていたのもあり、中はまだ残った蒸気と甘い香りが舞っていた。

「……」

翼は無言でシャワーから出る湯の霧を自らの頭に浴び続けた。

まるで自分の中の何かをすべて洗い流したいかのように……ただ、シャワーの湯が床とぶつかる無数の音だけが彼の耳を掠めていた。

『紗恵……』

翼の心の中でその名前が響いたとき、彼は滝のようなシャワーの中でガクンと崩れ落ちた。

「紗恵……紗恵……」

と、翼はある女性の名前を何度となく口にしていった。

まるで、過去に対する惨悔と現在の自分への嫌悪が、彼をさらに蝕んでいくように。

約30分後ー

シャワーを浴び終えた翼は、バスローブを身にまとって愛菜が座っているベッドルームへと姿を現した。

「ずいぶん長かったね、シャワー。少しはサッパリしたかしら？」

「はい、おかげさまで」

愛菜の問いに、翼は頷きながら答える。

彼の体から出る冷めぬ蒸気と濡れた髪の毛が、長い入浴をしていたという事実を嫌がおうでも語っていた。

「そこに座って」

愛菜は翼をベッドの片隅へと座らせる。

「ハイっ、飲みなさい」

愛菜はそう言うと、ミネラルウォーターの注がれたグラスを翼へと差し出した。

「あっ、ありがとうございます」

やはり飲み過ぎで喉が渴いていたのか、翼はそれをクイツと飲み干した。

それを見てフツと微笑した愛菜は、彼の横隣へとスツと腰をおろした。

「ねえ翼くん、一つ聞いてもいい？」

「はい？」

「あなたは何でホストになろうと思ったの？」

突然の愛菜からの質問に翼は一瞬キョトンとしたが、手に持ったグラスを脇に置きながら答えた。

「今しかできないってのもあるけど.....自分が頑張ったことを、そのまま評価してくれることかな」

「そうね、お水をやってるならそれはみんな思うわよね」

「それに.....」

翼は言いかけるように言葉を止めた。

「それに.....なに？」

「いえ、何でもないです」

「何でもない??」

「ええ.....」

「何よ、そこまで言いかけて.....気になるじゃないー」

しかしその時だった。

愛菜がそう言った瞬間、翼の表情が一瞬恐ろしいまでに豹変したのを彼女は見てしまった。

「……！」

愛菜はそれを見てからか、そのまま絶句した。『この人は想像を絶するような過去をくぐり抜けて今存在している』と瞬間で認知せざるを得なかった。

すると、翼の表情は再びもとの普通の様子にフッと戻った。

自分でもその一瞬の変化にハッとしたのか、翼は自分のこめかみに手を当てた。

「ごめんなさい翼くん……もしかして聞いてはいけなかったかしら」

「いえ……」

愛菜の謝りの言葉に翼はすぐに大丈夫だと返事をしたが、その一言はとても力がないものだった。

その後、10秒ほどか1分ほどか、長いような短いような沈黙の時間が二人の間に訪れる。

「……」

「……」

しかし、その沈黙を愛菜が破った。

「ご…ごめんね！変なこと突っ込んでしまって。誰でも聞いてほしくないことの一つや二つあるのは当然だし……私もどうかしてるかな……」

愛菜は、何かをごまかすように翼に言葉をかけた。

しかし、今の翼は斜め下に俯きながら重い沈黙を続けたままだった。

「ちょっと翼くん、あんまり黙り込まないでよ。まるで私が一」

「愛菜さん」

愛菜の言葉を遮るように、翼が口を開いた。

「お話します」

「えっ？」

愛菜はキョトンとした。

「愛菜さんは俺を助けてくれました……。それにー」

「？」

翼の突然の言葉に、愛菜は目を丸くした。

そんな言葉を言いながら自分を見る彼に、彼女自身妙な感覚を覚えていた。

しかし、そのまま翼は続けた。

「俺も、本当は誰かに言いたかったのかもしれない。理解してほしいのかもしれない。本当は隠したい、忘れたくない自分のことを」

「翼くん……」

「これをここであなたに言わなきゃ、俺はもうホストはできないような気がするんだ」
翼はそう言いながら、自分の着ているバスローブの裾を強く握った。

「わかったわ。あなたに負担が無ければ話して。今のあなたがいる理由」
自分の髪を軽く触りながら、愛菜は翼の瞳をまっすぐ見てそう言った。

「ただし、無理に言いたくないことは言わないで。私が必要以上に詮索したとは思ってもらいたくないし、あなたが話したいことを私は聞きたいの」

「わかりました」

愛菜の言葉に頷きながら、翼は語りを始めた。

本人ニトッテハ思イ出スダケデモ血ヘドロヲ吐キソウナ、自ラノ過去ヲ

時はさかのぼること約半年前――

暑さが響く8月、懸命に仕事に打ち込む一人の青年の姿がそこにはあった。

『彼』の名前は浅川一也。

不器用な性格ながらも、会社員として一人の24歳の男として、明るく素直に一生懸命に生きていた。

「浅川くん、あの例の書類はまだか！」

「はい、ただいまお持ちしますっ！」

会社のオフィスにて半袖のワイシャツにネクタイをしめる一也は、上司の催促に応えるように書類の束を持って歩く。

「課長、よろしくお願ひします！」

一也は書類を課長と呼ばれる三十半ばくらいの男に提出すると、ササッと自分のデスクに戻り再びパソコンに向かい合う。

「ふうー」

一也はかるく溜め息をつく、再び気合いを入れるように仕事へと入る。

「浅川くん」

白髪頭の50代の男が、一也に話し掛ける。

「あっ、常務。お疲れ様です」

「お疲れ。どうだ、仕事の方は慣れてきたか？」

「はい！何とか」

常務と呼ばれた男に、一也は元気に答えた。

「そうか。私も君をお父上からお預かりしてる以上しっかり育てなければならぬからな。しっかり、やってくれよ」

「はいっ！」

一也は常務にペコリと頭を下げると、再び気合いを入れるようにパソコンへと向かい合った。

「浅川くんはいいねえ、常務に優しくしてもらえて」
向かいのデスクにいる社員の一人・岡本が一也にそう言った。

「いや、そんな……」
「さすがいずれはパパの会社を継ぐボンボンですもんねえ」
岡本は、謙遜する一也の言葉を無視するかのよう嫌みたらしく言い放った。
その顔はヘラヘラしながら一也の顔の方を向いている。

「……」
一也は内心ムツとしながらも、岡本のそんな言葉を気にしないようにパソコンへと向いた。
「そんなぁ無視しないでよお浅川くん♪」
ボンボン呼ばわりされ内心嫌がっている一也を見て楽しんでいるかのように、岡本はそのむさ苦しい四角い顔でニヤニヤしながら話し掛けた。
それをよそに、一也は一所懸命に仕事へと打ち込んでいった。

一也は実家がとある商社を営む、いわゆる『御曹子』。
四年制の大学を卒業後、父の会社を継ぐために、その取引先である、ここ(株)KKへと二年間の武者修業へと出されていた。
社員として約一年半、一也は不器用ながらも持ち前の明るさと素直さで謙虚に会社での仕事をこなす毎日を過ごしていた。

「ふう」
一也は、夜遅くの残業の合間にコーヒーを片手に一息をついていた。

「一也っ、お疲れ様！」
グレーの制服に身を包んだ20代のOLらしき女性が、一也に話し掛けた。

「紗恵！」
「だいぶ疲れてるみたいだけど、大丈夫？」
「ああ」
一也は日々の残業や早出などの繰り返しで疲労がたまっていたものの、紗恵と呼ばれたその人物の前ということもあり、疲れを見せないように努めた。

だが、彼女にはその疲労や心労の度合いが彼の表情から読み取れていた。

「一也もやっと仕事に板がついてきてるところだろうけど……無理はしないでね？ ご両親だって心配されるから」

「うん、ありがとう」

紗恵の言葉に、一也は素直に頷いた。

「でも緊張するなあ……。私、今度お会いしたときに一也のご両親に気に入っていただけるかしら？」

「大丈夫だよ、紗恵なら！」

「そうかなあ。でも、一也がそう言うんなら大丈夫かな」

「ああ、うちの家族も紗恵みたいな女の子なら絶対歓迎してくれるさ！」

「……うん、そうよね！ありがとう一也」

そう言うと、紗恵はオフィスに今は自分達以外がいないのをサッと確認すると、一也の唇にソッと自分の唇を重ねた。

「……！」

一也は突然なことに一瞬ビクリとしたが、そんな彼女の髪の毛を優しく撫でながら目を閉じた。

そして、スッと彼女の華奢な腰に手を回し抱き寄せる。

「ん……」

「う……ん……」

気がつくのと、二人は激しくお互いを求め合うように抱き合い唇を重ね続けていた。

「一也……好き……」

「俺も……紗恵のこと大好きだよ」

一也は自分を抑え切れなくなったのか、紗恵とともにオフィスのデスクの上に静かに倒れていく。

「一也……ダメよ、ここ会社だから……」

「あっ……」

一也は我にかえったようにムクリと起き上がった。

「ご、ゴメン……ちょっと俺どうかしてる……」

そう言って一也が恥ずかしそうに背を向けると、紗恵はピタリとその背中に顔を埋める。

「紗恵……」

「終わるまで待ってるね……」

「ああ」

すると紗恵は、顔を合わせることもなくオフィスを後にした。

「よし、仕事終わらせるか」

一也は気合いを入れ直すように再びデスクのパソコンへと向かい合い始めた。

数時間後一

一也と紗恵の二人は、彼のマンションの一室へと来ていた。

時間は深夜 1 時一

週末なのもあり、二人はベッドの上でお互いを確かめ合っていた。

「あっ……一也……」

「紗恵え……」

着ていた衣服は乱れながらそこらじゅうに散乱し、二人は何も身につけていない状態のまま布団一枚の中で寄り添っていた。

「一也……」

「うん？」

「好き」

「うん……俺も」

二人は言葉も少ないが、お互いの確かなものを求め合うように抱き合い続けた。

唇や握った手は、そしてすべてが激しく重なり合い、それを何度となく繰り返していく。

「ねえ一也」

「うん？」

「私、ご両親に認めてもらえるように……一也とずっと一緒になれるように頑張るね」

「紗恵、いいのか？俺なんかで…。俺、不器用だし仕事だってそんなに自信があるわけでもないし……それに……」

「？」

「お前が会社の中で変な目で見られないかって心配でな」

「私は一也がいいの。それじゃダメ？」

紗恵はそう言いながら、自分を腕枕してくれている一也の左頬に軽いキスをした。

「紗恵……！」

一也は再び求めるように、紗恵を抱きしめた。

紗恵は一也が後継ぎの修業として働いているKK(株)にOLとして勤める、一也のひとつ年上の容姿端麗な女性である。

栗色のストレートロングヘアが特徴で、その才色兼備ぶりは会社内でも評判だった。

年齢が近いのもあり、少しずつ話しているうちに一也と意気投合し、気がつくとも社の人間として以上に一人の男女としての付き合いをするようになり、将来を考えるような関係にまでなっていた。

辛い仕事の中、取引先の社長のボンボン息子と言われる中、一人の男性として自分を見てくれる紗恵との関係が今の一也にとって唯一安らぎだった。

8月半ば

お盆にさしかかったとある真夏の猛暑の日、一也は紗恵を連れて実家の横浜へと来ていた。

「はあ～……緊張するなあ。一応綺麗めのカッコで来たつもりだけど大丈夫かなあ」

張り詰めた面持ちで、グレーのフォーマルスーツ姿の紗恵はため息をつきながら呟いた。

「そんなに緊張するなって、いつもの紗恵らしくないぜ」

一也は緊張し続ける紗恵を和ませるように肩をポンと触る。

そう言いながら、二人は豪華な一也の実家のドアをくぐっていった。

「すごく大きいおうちね」

紗恵は思わず声を漏らす。

「ただいま〜！」

一也は元気のいい声で玄関から叫んだ。

すると奥から、40代後半くらいのショートカットの女性がトコトコ歩いてきた。

「一也……お帰りなさい」

「オフクロ、ただいまっ」

女性は一也の母であった。

すると彼女は一也の斜め後ろに立っている紗恵に視線をやった。

その視線に気が付いたのか、紗恵はペコリと頭を下げる。

「一也、その人は？」

母が一也に問いかけた。

「ああ、こないだ電話でちょっと話したけど、この人がその……会社で知り合った飯山紗恵さん」

「飯山です。はじめまして」

はずかしげに母に説明する一也の後に続くように、紗恵は母に挨拶をした。

「ああ、あなたが飯山さんね。はじめまして、一也の母です。いつも息子がお世話になっていきます」

母は優しい口調で紗恵に対して一礼をする。

「あっ、いえ」

紗恵も相槌をうつように、あらためてペコリとする。

その際に、母は紗恵を一瞬下から上まで眺めるように見ている。

「親父は？」

「ああ、奥で待ってるわよ。ちょっと行って挨拶してきなさい」

「わかったよ」

一也は母に促されるように、奥にあるリビングルームへと足を運んだ。

相変わらず緊張した面持ちの紗恵も、彼の後に続く。

「親父、ただいま」

「一也か」

リビングに入った一也と紗恵を、彼の父である半ば白髪の人物がソファに座りながら二人を迎える。

その際に、紗恵はさりげなく父に対してもスッと頭を下げる。それを父も見る。

「まあ座りなさい」

父は二人に向かいのソファへの着席を促す。

「失礼します」

一也が「ああ」と返事して座る中、紗恵は一礼をしてからソファへと腰をおろした。

「えっと……一也、そちらがお前が言っていたー」

「ああ、飯山紗恵さんだ」

「はじめまして。一也さんとお付き合いさせていただいています、飯山と申します」

一也の言葉に誘導されるように、紗恵は彼の父へ挨拶の言葉を言った。

「どうも、息子がお世話になってますね。確か……KKさんで働かれてるんですよね？」

「はい」

「こいつはちゃんと仕事してますか」

「はい、とても毎日頑張っています。いつも夜遅くまで残業したり……とても一所懸命です」

父のいきなりの質疑応答に紗恵は緊張を隠しながらも答えていった。

「紗恵さん、だったね。しかし綺麗な方だ」
父は足元から顔まで舐めるように紗恵を見ながら言った。

「いえ」
「一也のどこに好意を持たれたのかはわからないが、こんな美人は息子にはもったいないな！」
「親父！」
「お父さん、失礼ですよ」
大声で話す父を、母が諫めるように言った。
その際に一也と紗恵にもお茶が注がれた湯呑みが配られる。

「おっと失礼。まあ紗恵さん、そんな緊張せずにゆっくりしていきなさい」
「はいっ、ありがとうございます」
半ば和やかな雰囲気です挨拶を終えると、一也と紗恵は彼の部屋へと足を運んでいった。
部屋に入ると、二人はどっと疲れたようにベッドへと座る。

「はあ～緊張したあ」
紗恵が思いきったようなため息を吹き出した。
「悪いな、妙に気を使わせちゃって。それに親父が変なこと言ってさ」
「あ、ううん」
そう言うと、一也と紗恵は軽くキスをした。
「本当にいいのか？こんなところに来てもらっても」
「いいわ。いいお家じゃない。それに私は一也とがいいんだから」
しんと静まり返るその部屋の中で、一也と紗恵は抱き合った。

その時だった。

突如部屋のドアがガチャリと音をたてた。
「わっ！」
一也は身体をビクッとしながら声を上げた。
それに伴い、紗恵も瞬間的に身体を硬直させる。
二人が視線を注いだ先には、ドアノブをつかんだままの一也の母がじっと二人を見ていた。

「な、何だよオフクロ！いきなり黙って入ってくるなよ！」

「.....」

一也が声を大きくして言う中、紗恵はポカーンとしながら何も言えなかった。

「オフクロ！」

「あら.....二人で何をしてたの？」

母は半ば開き直ったような口調である。

それを聞いた一也は、表情をキッとさせた。

「何じゃないだろう！紗恵だっているのに、ノックもせずに突然入ってくるなんてどうゆうことだよ！」

「心配になっちゃったのよ.....。一也もお年頃だから.....若い男女が部屋で二人っきりなんて何が起こるかわからないからねえ」

母は本気で心配を訴えていたが、一也はそうはとらなかった。

「だからってこんな風に入ってくるな！紗恵だってびっくりしてるじゃないかよ！！」

「あら.....何か隠し事でもあるの？怪しいわねえ」

「何も隠してねえよ！いい加減にしろよな、オフクロ！！」

「いいえ、それは何か隠し事をしているわね」

疑い深く追求してくる母に対して、一也はついに堪忍袋の尾が切れた。

「もういい加減にしてくれっ！！」

「ちょっと...一也！隠してるわね、隠してるわね」

一也は、もうたまらないと言った感じで、無理矢理母を部屋から押し出しドアをバタンと強く閉めた。

「ハア.....ハア」

思いきり怒鳴ったせいか、一也は著しく息を切らす。

そんな彼を見て、未だ言葉を発せない紗恵は何をしていいかわからず固まったままだった。

ひと呼吸置くと、一也は紗恵の方を向きながら口を開いた。

「紗恵ゴメンな.....オフクロがいきなりこんなことして」

「あ.....ううん、きっとお母様も心配になっちゃったのよ。男の子を子供に持つ母親にはよくあることだわ。一也気にしないで」

『気にしないで』

彼女のその言葉が、現在の高ぶった自分の感情を諷める気遣いのものだと、一也は気付かずには
いられなかった。

数時間が経過したその夜ー

一也・紗恵の二人は、彼の父と母を交えての夕食をとっていた。

「ああ〜うまいっ」

父はそこそこアルコールが入り、ほろ酔い程度に顔を紅潮させていた。

ただ、先程の母親と揉めたこともあり、一也の表情は未だ曇ったまま。

よって、その場の雰囲気はどこと無くギクシャクしていた。

「紗恵さん、お味はいかが？」

母が紗恵に尋ねた。

「あ……はいっ、とっても美味しいです」

「そう、よかったわ」

紗恵は母に対してごく普通に答えたが、やはり一也と母とのことが気になって正直夕食を味わう
どころではなかった。

当の一也はなるべく顔には出さないと努めていたようだが、憤りに満ちた感情を全て押し殺すこ
とまではできないでいた。

「一也」

父が一也に対し口を開いた。

「何だよ」

一也も久しぶりと言わんばかりに口を開く。

「お前、本当にKKさんに面倒なことをかけてないんだろうな」

「かけてないよ」

「本当か？紗恵さんはちゃんとやってると言っていたが、お前は昔から人一倍不器用だからなあ
」

「本当だよ」

「圭介は何をやらせても要領良くやっていたが、昔からお前はからっきしだったからなあ」

「……」

父の煽るような言葉に一也はさらに別の憤りを覚えたが、彼は何とかそれらを飲み込むように黙っていた。

そんな彼の横顔に、さすがに紗恵も内心ハラハラがおさまらなかった。

「あなた言い過ぎよ紗恵さんの前で……」

母が横目で紗恵をチラ見しながら父に言った。

「ああ～紗恵さんすまんねえ、でも昔からこいつは勉強も運動も何やらせても本当に中途半端でねえ。上の兄と比べると何でこんなに違うのか～って感じなんですけどね」

父は酒が入ったグラスをクイクイ口元に運びながら一也のことを続ける。

「あなたちょっと飲み過ぎですよ」

「いやね、こいつったら昔中学のときー」

「やめろ……」

母の制止も聞かずに酔い任せな父に、一也がついに言葉を発した。

「えっ？何だよ、お前の昔のこと紗恵さんに話してやろうって言うのに」

「いいから、やめてくれ親父」

「何だ？お前紗恵さんに聞かれたくないことでもあるのか？？それなら俺から話してやろうか」

「やめてくれよ頼むから……」

「何だお前……父親のせっかくの厚意を無駄にする気か～？」

「親父……飲み過ぎだ」

「紗恵さん実はこいつ中学のときにー」

その時、一也はものすごい勢いで両手の掌をテーブルに直撃させた。

その瞬間に伴い、凄まじいまでの音と振動がテーブルから発せられた。

酔っている父を含むそこに居合わせている一同が、ビクンと反応する。

父、母、そして紗恵の三人が、掌をテーブルにつけている一也に視線を合わせた。

「……」

約10秒ほどの長く感じさせる沈黙は、重い空気としてその場を支配していた。

しかし、その沈黙をまず最初に破ったのは息子の一也に威圧的に反抗された父であった。

父はその顔を怒りの形相に変え、ついにその満ちた感情を一也にぶつけ始めた。

「一也～……お前何だその態度は！！ええっ！？」

その言葉に、一也も目付きを鋭利にさせながら返していく。

「そっちこそなんなんだよ！酔った勢いで俺が人に言われたくないような昔のこと紗恵に無理矢理しゃべろうとしやがって！！俺が嫌がってるのがそんなに楽しいのかよ！？」

「一也、やめなさい！」

憤る一也を母が制止するが、当の彼は全く聞く耳など持っていなかった。

すると一也はバンと席を立ち上がり、ツカツカとその場を後に自分の部屋の方に行ってしまった。

「一也っ！」

紗恵も立ち上がり声をかけたが、反応も虚しく彼が戻ってくることはなかった。

「……」

紗恵はそれ以上何も言えなかった。どうしていいかわからず、戸惑うことしかできなかった。

「紗恵さん、あんな馬鹿は放っておきなさい！あんなことで一々怒りおって」

父は少し呂律の崩れた口調でも怒りの言葉を発した。

「もう……圭介に比べて相変わらずわがままなんだから一也は」

母もどこかしょうがないと言った感じで呟いた。

『一也……あなた……』

紗恵は心の中で何かを確信しながら、複雑なほど切ない表情を浮かべていた。

すると、ガタンと音をたてながら席を立ち上がる。

そんな彼女に、父と母はキョトンとした顔をする。

「紗恵さん、どうしました？」

「……私、一也さんの様子を見てきます」

紗恵がそう言うと、母は明らかに遺憾を覚えた目付きになる。

「放っておきなさいと言ったでしょう。あの子は家だからってちょっと甘えてるんですよ」

「でも……」

「紗恵さん、あなたはさっき呼び捨てにするくらい一也を思ってるみたいだけど、あまり甘やか

さないで」

「えっ？」

母の言葉に、紗恵の表情にも徐々に変化が訪れる。

「あなたがKKさんのOLって聞いてから思ってたんですけど、どうせあなたはうちの後継ぎと聞いて一也に近づいたんでしょ？」

「……！」

「あなたの容姿を見てれば何となくわかるわ。最近の女の子はお金のあるところに平気で向いてくみたいだからねえ」

「そんな……」

「どうせ一也にも色仕掛けでもして近づいたんでしょ？さっきも部屋で抱き合ってたの見たのよ？」

母から次々と出てくる言葉の連続に、紗恵は顔をしかめた。

「抱き合ってた？そうなのか紗恵さん」

父が興味津々と言った具合で言った。

「違います、あれは……！」

紗恵は必死に否定をしたが、二人は信用のかけらもその目に抱いてはいなかった。

「一也に何を吹き込んだの紗恵さん。言ってちょうだい」

母の最後のその台詞に、紗恵はキッと表情を変えた。

「私は何も吹き込んだりしてません！私は…一也さんを一人の男性として見ているんですっ！！」

紗恵は強くそう言うと、スッと頭を下げ一也の後を追うようにその場から出ていった。

「……」

父と母は黙り込みながら彼女が出ていったドアもとを見続けていた。

「一也！開けて一也っ！」

紗恵は一也の部屋のドアをノックしながら彼の名前を呼んだ。

「……紗恵？」

紗恵の正面にあるドアの向こうから、彼女の名をつぶやく一也の声が掠めた。

すると、ドアはすんなりと細く開く。

「一也…！」

紗恵は安堵の表情を浮かべる。

「一也、入っていいよね？」

「.....うん」

一也は元気こそ失っていたものの、どこか安心したように彼女を部屋の中に招き入れた。すぐにドアを閉めると、紗恵は一也にスッと抱き着いた。

「紗恵.....」

一也はわずかな驚きを見せる。

「一也.....大丈夫？」

「.....ああ。ゴメンな、紗恵」

「えっ？」

「うちの奴らが.....って言うか、みっともないもの見せちゃって」

「.....ううん、一也は何にも悪くないよ。何も.....」

一也と紗恵は強く抱きしめあった。

「明日.....朝一番で帰ろう」

一也はそう囁いた。

しかし、その翌朝に二人が一緒に帰ることはなかった。

『彼』ノ運命ヲ分カツ夜ハ、ソノ後ノコトダッタ。

第7章へ

「……」

かれこれ、話してどれほど時間がたっただろうか。

翼は一息を入れつつ急に黙り込んだ。

愛菜はそんな彼に何も言わず、何も詮索せず、ただじっと横で座りながら彼の口が開くのを待っていた。

そんな愛菜の気遣いが、翼にはどこか心地よかった。

「続けますね」

「ええ」

愛菜が頷きながら答えると、翼は再び『その時』のことを語り始めた。

「一也っ！開けなさい！」

二人がいる部屋のドアの向こうから、一也の母がドンドンとノックしながら彼を呼ぶ。

「一也……」

紗恵が一也の方を向くと、彼は鋭い目付きでただドアを見つめるだけだった。

「どうするの？お母様、このままじゃずっと……」

「反応すればまた騒ぐだけだ……放っておけばいなくなるさ」

一也の言葉は冷静を装ってはいたが、紗恵は一触即発のその雰囲気、もうどうしてよいかと思うしかなかった。

それ以降、しばらく母からのノックや呼びかけは続いた。

10分、20分、30分.....

しつこいと言う台詞がよく似合うように、母からのそれは果てしないかのように続いた。しかし30分を過ぎた頃、それはピタリと止まった。

「.....諦めたか？」

一也は久々かもしれないぐらいに口を開いた。紗恵も、その現状にどこか安心する。

「一也.....」

紗恵は一也にきゅっと抱き着いた。

「紗恵.....」

「疲れたでしょ？少し休もう」

「...うん」

一也と紗恵は、ベッドに腰をおろした。

「はああ...」

一也がこれ以上ないぐらいの大きなため息をつく。

「一也ゴメン.....」

「えっ？」

突然の意外な言葉に、一也は驚きの表情を見せる。

「どうして紗恵が謝るんだよ？」

「私さっき一也のお父様達にちょっと強く言っちゃって.....」

「紗恵.....」

「ついカッとなっちゃったのもあるんだけど.....私、許せなかった。何で自分の子供が嫌がってるのにあんなにしつこくできるのかなって.....」

「昔からそうだったよ」

「昔から？」

「ああ」

一也はもう一度ため息をつく、再び話し始めた。

「親父達が言うの見てわかる通り、俺は小さい頃から何をやらせてもダメだった。その上兄貴は何をやらせてもできるから、よく比較されてきた.....。昔からそれが苦痛だったよ」

「一也.....そうだったんだ」

「それに.....母親があんな.....過保護な感じだから.....」

「.....」

「だからKKでの会社の仕事は頑張ろうと思ってたんだ。なのにー」

一也はひざ元をギュッと両手で握りしめる。

「わかっていたこととはその親の過保護なせいで会社でも『ボンボン』『お坊ちゃん』とかの扱いがずっと続いた……。紗恵も知ってるだろ？」

「……うん」

「正直……辛かったよ」

一也のその言葉と同時に、あの岡本の四角い顔が頭に卑しいほど浮かんでくる。

歯を食いしばる彼の横顔を見ながら、紗恵は黙って聞いていた。

「だから、紗恵との時間はとても安心してた。俺が入社したばかりの頃から『無理しないでがんばれ』って言うてくれたのは、紗恵だけだったから」

「一也……」

「俺は紗恵から色んなものをもらった。色んな思い出も作ることができた。だから、これからも……」

その言葉を交わしたのを最後に、二人は気がつくとは抱き合っていた。

「俺…紗恵が好きなんだ。ホントにホントに好きなんだ」

「私も……一也をいっぱいいっぱい大好き」

「子供も……作りたい」

「うん……」

時は23時過ぎ……一也と紗恵は、激しくお互いを求め合い始めた。

「一也あ」

「うん」

二人は生まれたままの姿で、結ばれようとした一

その時だった。

一也の部屋のドアが、『バキン』と何かが外れたような激しい音をたてた。

「キャッ！」

「な、なんだ!？」

紗恵と一也は抱き合ったベッド上で、一斉に音のした方を振り向く。

すると、鍵をかけたはずの部屋のドアはギィ……と音をたてながら、ゆっくりと廊下の明かりを部屋へと入れる。

「うっ……」

暗闇に慣れた一也達の目にまばゆいばかりの光が差し込む。

「何だ……？」

そう言って目が次第に慣れてくると、一也は明るい廊下に照らされる一人の人影を確認する。

「えっ…」

一也と紗恵は絶句した。

暗闇の外の廊下でじっと自分達を凝視している人物がいたからだ。

150センチ半ばの高くない背丈、荒れる呼吸、両足にはどこかで見慣れたスリッパ。

そして右手に工具のような鋭利な物体を持ちながら、鬼女のようにギロリと二人を睨んだその人物は、一也の母だった。

「お、オフク……」

一也は驚愕のあまり、言葉にならなかった。

「な、なんで……いや……」

紗恵も思わずそう口にする。

すると母は、一枚のタオルケットに包まる二人の現在の状態を分析するように視線を左右させる。

そして、事は起こった。

「この女狐えええ！！！」

母は突然狂ったように二人のもとに飛び掛かった。

「うわあああ！！」

「キャアアアア！！」

母は一度一也をドンと突き飛ばすと、その恐ろしい視線を紗恵一人に向けた。

「お……おかあさー」

「あんたみたいな淫乱女にお母様とか言われる筋合いなんか無い！！！」

すると母は、その左手で紗恵の髪の毛をグイッとわしづかみにした。

「イヤアアアあ！！」

紗恵は恐怖と痛みで信じられないほどの悲鳴を上げた。

「痛いっ！やめてくださいい！！」

「痛いじゃないんだよこの馬鹿雌が……人の大事な息子をたぶらかしやがって」

母はまるで人格を一変させたような口調で紗恵に言い放った。

「た……たぶらかすだな……痛いっ！！やめてええっ！！」

「うるさい、うるさいうるさい！！」

母は紗恵の髪を掴んだ左手を執拗に引っ張り、平手にした右手を思いきり振り下ろした。

「キャアアっっ！！」

その右手は紗恵の顔面や頭と恐ろしい勢いで衝突し、鈍い音を上げる。

その際に紗恵の悲鳴はまたさっきとは異なった狂気のメロディを奏でた。

「うるさい！！このっ、このっ、このこのこのっ！！！」

母は無抵抗で泣きながら悲鳴を上げる紗恵の顔を次々と平手打ちした。

「オフクロやめろ！！」

一也が狂った獣のような母を止めに入った。

「お前は黙ってろ！！」

母は、全裸の一也の股間に右足で蹴りを入れた。

「ぐっ……！！」

一也は一瞬で床に突っ伏して、苦悶の表情を見せる。

彼が伏せたのを確かめると、母は再び異常な泣き顔の紗恵にその視線を向けた。

「この女……初めて見たときから思ってたけど、こんないやらしい身体で……！」

母は露になっている紗恵の乳房をバチンと叩いた。

「イヤアアアア！！」

「うるさい！！騒ぐな！！この胸が、この尻が、うちの一也をたぶらかしたんだ！！

！ええ！？？」

母は左手で掴んだ髪をグイグイと引っ張り続けながら、紗恵の身体の至る所を足蹴にした。

「イヤァァァ！！何でこんな……！信じられないっ！！」

「信じられない！？この雌豚が……人様の家で平気で息子と交尾する雌豚が生意気なこと言うんじゃないよっ！！！」

母は紗恵への平手打ちと足蹴を、再び乱れるように繰り返した。

「いやっ！！やめてえええ！！」

部屋を突き抜けるような紗恵の悲鳴が、伏せて動けない一也の耳に刺さる。

「紗恵え！オフクロやめろ！やめてくれええ！！」

「うるさい！お前もボンボンのくせに親に逆らいやがって！！こんな女……こんな女こんな女こんな女こんな女……！！！」

「イキャァァァァァ！！」

母の止まることのない虐待のような行為に、紗恵の美しい顔は恐怖と痛みに見たことのないような醜い形相へと変化していた。

それに伴い、悲鳴も著しく動物の鳴き声のそれに近いようなものへと変わっていた。

「紗恵……チクショウ！！やめろよオフクロ、やめろっ！！何でこんなことするんだ！！」

母はピタリと手を止め、床に突っ伏している一也に目を向けた。

そして、唾まみれのその口をゆっくり開く。

「あなたのためよ一也。こんな女はあなたには合わない」

「なんでオフクロがそんなこと決めるんだ！俺にとって紗恵は……」

「会社での安らぎだったんでしょう？無理しないで頑張ってたって言うてくれたんでしょう？それだけでしょ？」

連続する異常なまでの『でしょ？』に、一也はハッとした。

「なんでそのことを……なんで俺達しか知らないことを知ってるんだよ！！」

「子供を作る？こんな汚い女と？ふざけるんじゃないわよ！！」

一也はさらにハッとした。紗恵も大きく目を見開いた。

二人とも、体中がブルブルと震え出していた。

「子供つくること……さっき初めて言ったばかりなのに……。静かに言ったから聞こえるはずもないのに……」

紗恵はボソッとそう言うと、何かに気付いたように母を見た。

「まさか...」

紗恵はその表情に映る恐怖の色をさらに濃くした。

「私と一也は.....この部屋は盗聴されてた.....!？」

紗恵が涙ながらにそう言うと、一也の目は一瞬にして大きく開いた。

「な、何だって？盗聴.....??オフクロ、マジなのか？」

一也の声が震える中、母は何もなかったように答えた。

「そうよ。一也、あなたの部屋には盗聴器がしかけてあるの」

「な.....何でこんな？何でこんなことしたんだ！」

「何って、あなたのことが心配だったからに決まっているでしょう？お母さんの気持ちもわからないのあなたは？」

母は、まるで『当たり前でしょう?』と言わんばかりに一也に言った。

「.....俺の部屋.....盗聴されてたなんて.....!」

一也はもう喋れなかった。

いや言葉を発する気力をパッと失った。

「.....」

一方の紗恵は、茫然としながらぽろぽろと大粒の涙を頬に流すだけだった。

母が傍若無人に暴れたのが嘘だったかのように、その場は不思議なほどの沈黙に覆われていた。

その時だった。

「一体何事だっ！」

壊れたドアもとから、バスローブ姿の一也の父がそこに怒鳴り声を発した。

一也・紗恵・母は、一斉にそっちを見る。

やはり驚いたのか、父はその状況を見て目を丸くする。

特に裸になっている紗恵姿を凝視していた。

「もう.....イヤ」

紗恵はそう呟くと、父の視線もありってカタオルケットを身体に強引にかける。すると、目の前にいる母を突き飛ばしドアもとに走っていた。

「ギャッ」

母は思わずそう叫ぶ。

「さ、紗恵！」

一也は徐々に蹴られた下腹部が回復してきたのか、少しずつ立ち上がった。

「さ、紗恵さん」

そう言う父の前をダッと走り過ぎた紗恵は、廊下の方へと走り去っていった。

「紗恵え！待ってくれ！」

全裸の一也は走り去っていく彼女のもとを追った。

「紗恵っ！！」

「もおイヤ……イヤっ！」

後から一也が追ってくる中、彼女はタオルケットで顔を全部覆いながら泣き声を漏らし……走った。

「紗恵っ、危ない！！」

一也がそう叫んだ時は既に遅かった。

紗恵はある手すりのある場所を境に、下の方へと消えていった。

その際に『ガタガタ』という鈍い音が、何度となく続いた。

連続する音はしばらくすると止まった。

最後の音は下の階の方で止まった。

「紗恵えええ！！」

一也は消えた紗恵の行き先を血眼で追った。

自分がいる2階から1階におりる階段の最も下に、白い全裸にタオルケットをはだけさせた紗恵がピクリとも動かず横たわっていた。

「紗恵！紗恵ー！！」

一也は直ぐさま倒れている紗恵のもとに駆け付けた。

「紗恵、紗恵……大丈夫か……？」

一也は彼女を抱き起こし、軽く身体を揺さぶってみる。

しかし、彼女は動かない人形のように何も反応しなかった。

無造作に揺れる首がぶらんぶらんと動いているだけだった。

そして、乱れた髪の毛に俄かに隠れる彼女の額から深紅の液体が滴り落ちるのを見て、一也は眼球が飛び出そうなほど目を開いた。

「さ……え……」

紗恵はピクリとも反応しなかった。

「紗恵————！！！」

一也の絶望感に充ちた悲痛な叫びが、家の中に虚しく響いた。

翌早朝一

あの後、救急車にて紗恵は病院へと運ばれ、緊急の集中治療を受けた。
無論、一はずっと外で彼女のことを待っていた。
祈るように、何時間も、彼は額の前で両手を強く握りながら待っていた。

すると、集中治療室の扉がゆっくりと開いていく。

「紗恵っ！」

一也はじっと座っていた身体を無理矢理のように起こし、運ばれてくる仰向けの紗恵のもとに駆け寄った。

「紗恵……」

頭に包帯を巻かれながら目を閉じている紗恵を、一也は瞳を潤ませながら見つめた。

「先生、紗恵は！？」

一也が問い掛けると、医師は顔につけていたマスクを取りながら答えた。

「命に別状はありません。外傷も思ったよりひどくはありませんので、時期に目が覚めるでしょう。今日一日は様子を見るつもりで休ませてあげてください」

「はい……ありがとうございましたっ」

一也は医師にペコリと頭を下げる。

そのまま一般病棟に移された紗恵に付き添うために、彼はベットに横たわる彼女をずっと見守る

ようにそばにいた。

刻々と時間は経ち、時刻は既に夕方を迎えていた。

紗恵が病室に運ばれてから、一也は一睡もすることなく彼女が目覚ますのを待ち続けた。

「紗恵……」

紗恵は生きている……それがわかっている、彼の中ではいつ彼女が亡くなってしまうのではないかという不安もあった。

しかしその時だった。

「う……ん……」

午後7時、紗恵はその瞳をうっすらと見せながら声を漏らした。

「紗恵！」

一也は跳びはねそうな自分を必死でおさえながら紗恵のもとに寄った。

「紗恵大丈夫かー」

そう言いかけたとき、彼女の表情は一瞬にして豹変した。

「キャアアア！！！」

「さ、紗恵？」

「イヤア！あっちへ行ってえ！！」

紗恵は突然鼓膜を破りそうなくらい大きな悲鳴を上げると、一也を見ながらベットの上で後ずさった。

一也は、そんな彼女を見て何がどうしたかわからず混乱していた。

「紗恵……どうした？」

「イヤァ来ないでっ！来ないで来ないで来ないでえっ！！」

意味不明に自分に拒絶反応を示す紗恵に、一也は茫然とするしかなかった。

「飯山さん、どうしました！？」

悲鳴を聞いてか、そこに医師と看護師の二人が駆け付けた。

「イヤァあ！怖い……怖い！」

「怖……い？」

一也は思わず口にした。

「飯山さん～大丈夫ですよ、落ち着いて下さい」

医師はそう言って乱れる紗恵を諫めながら、チラリと一也を見て病室の外に出るようにと視線を送った。

「紗恵、どうしちゃったんだ……！？」

一也はハラハラしながら、病室から出ることにした。

数分後一

病室から医師と看護師が出てくる。

「先生……紗恵は……？」

目の下にすっかり黒い隈を作った一也が、医師に尋ねる。

「恐らくですが……」

一也は息を呑む。

「彼女の様子からすると、異常な恐怖体験か何かによる心的外傷……つまりトラウマを持ってしまったようです」

「トラ……ウマ？」

一也は今までにないくらい目を大きく見開く。

医師は頷きながら続けた。

「様子から見て、彼女は浅川さん……あなたを見て"何か"を思い出してあのような反応を示しているようなんです」

「ぼ、僕を見て??」

その時一也は、昨夜起こったことを真っ先に思い返した。

『まさか、まさか……!』

一也の顔色が一瞬にして蒼白になる。

医師はさらに続けた。

「あなたが直接そのトラウマに関係しているかはわかりませんが、彼女の反応では間違いなくあなたは関係しているようです」

「そんな……」

一也は肩を落とす。

「お気持ち察しますが……今はあなたは彼女に会わない方がいい。かえって彼女の精神をさらに混乱させてしまいますから……。ここは、私達に任せて下さい」

医師はそう言って頭を下げると、後ろにいる看護師とともにその場を後にした。

「そんな……」

「紗恵が、俺のせいで……？」

「そんな……」

一也は心の何かが外れたようにフラフラな状態で自宅マンションへと戻っていった。

『紗恵、俺は……俺は……』

心の中で何度も、何十回も、何百回も、彼は自分を責めことを繰り返した。

そのうち、睡眠不足とあらゆる疲労が影響し、彼は深い眠りについていた。

それから時間が経ち、一也がそのまま眠りこけている時に彼のケータイの着信音は鳴り続けていた。

「う……ん……」

一也は目を擦りながら着信音を鳴り続けさせているケータイを手取る。

「はい……」

その着信に出ると、彼の耳元には怒りの声が鳴り響いた。

「おい浅川くん！今何時だと思っているんだ！？」

「……！？」

一也はハッとした。カーテンから差し込む日の光が著しいことに気がついた。時計を見ると、すでに午前10時をまわっていた。

「しまった……！今日から夏休み明けの出勤だった！！」

一也は思いきりそう叫ぶと、電話の向こうの課長が再び怒声を上げる。

「何をやってるんだ！今日が大切な商談なのを忘れたのか！！」

「は、はい！今行きます！申し訳ありません！」

「もういいっ！！」

すると、課長からの電話はガチャリと大きな音をたてて切れた。

「大変だ……！」

一也はあわてふためきながら、通勤の準備をして家を出た。

1時間後—

「バカヤロウ！！」

デスクを猛烈に叩きながらの課長の怒声が一也を責める。

オフィス内がしんと静まり返る。

「すみません……」

「すみませんで済むか！今日が例の大切な商談だとあれほど念を押しただろう！お得意さんはもうカンカンだぞ！！」

「ホントに申し訳ありません……」

一也はただ…ただ頭を下げることしかできなかった。

「これだからボンボンは……」

謝る彼の後ろで、岡本が皮肉を込めた口調で言い放った。

一也はグッと歯を噛み締めた。

紗恵のことで頭がいっぱいだったとは言え、自分の仕事を失敗してしまったことに言い訳など効く余地などなかった。

その日、一也は肩を落としながら会社での一日を過ごした。

そして当然ながら、紗恵はその日会社に姿を現すことはなかった……。

数日後一

一也は紗恵を心配しながらも、仕事に励んだ。

面会謝絶である今は会えないとしても、数日たてば大丈夫だろう...そんな気持ちで日々を過ごしていた。

「ただ今戻りました」

夕方、一也が外回りから帰ってくると、オフィスにいるOLを含む社員全員が彼を冷たい目で見ている。

「えっ？何ですか??」

一也がそう聞くと、社員達はスッと目をそらした。

『な.....なんだ?』

そこへ深刻な顔をした常務と課長がやってくる。

「浅川くん、ちょっといいか」

「常務」

一也は給湯室へと連れていかれた。

「常務、課長.....。一体みんなどうされたんですか?」

一也がそう尋ねると、常務はその重い口を開いた。

「昨夜に.....飯山くんが病院で自殺未遂をはかった」

「えっ.....??」

一也は固まった。

常務はそのまま続けた。

「ここ数日出社がしてないので電話をかけてみたら、彼女は自宅も携帯電話にも出ない。おか

しいと思いやむを得ず彼女の実家に連絡をしたら、病院にいることがわかってな」

一也の顔に少しずつ生気がなくなる。

「先程女子社員が見舞いに行ってきたらしいんだが、話によると彼女は君の話をする、見たこともないような怖い顔になって怯えていたらしい。どうやら先日君の御実家に行った際に君と揉めて階段から落ちたのが原因らしいが」

「えっ？」

一也はおかしいことに気付いた。

「すみません、僕と揉めたって、彼女がそんなことを……！？」

「君のご両親に聞いたら、そう証言したそうだ」

隣にいた課長が答えた。

「そんな……そんなのおかしい！僕は、彼女を階段から落としてなんかない！本当は一」

「浅川くん！常務の前だぞ！！」

課長が興奮する一也をおさえた。

その先を常務が続けた。

「浅川くん……事実はどうであれ、今の飯山くんは君に対して何らかの拒絶反応を示しているそう。もう彼女に関わるのはやめるんだ。ご両親からの経済的なご厚意もあり、彼女は慰安退職してもらうことになった」

「……！そんな……じゃあ僕が……！」

「君はいずれお父上の後を継ぐために今ここにいるんだろう！……彼女のことは忘れるんだ」

常務はそう言うと、その場をスッと後にした。

すると、課長が口を開く。

「今さっき君が社内に変な視線を浴びていた理由がわかっただろう。もう社内の女と恋愛なんかするんじゃないぞ」

そう言うと、課長もそこからツカツカ歩いていなくなった。

『そんな……紗恵が俺のせいで……』

一也はヨロヨロとテーブルに寄り掛かった。

いきなり突き付けられた現実を、受け止められなかった。

「慰安退職だと??ただの手切れ金だろうが.....！」

知らず知らずのうちに目から出てきた涙が、溢れて止まらなかった。

目を真っ赤にしながら、一也はオフィスへと戻った。デスクに座る社員達が、一斉に彼を見る。落ち込む彼を励ますどころか、全員蔑んだ表情しか浮かべていない。

一也は無言で自らの席へとついた。

「浅川く～ん残念でしたねぇ♪」

岡本が四角い顔をニマニマさせながら一也に話しかけた。

「.....？」

「飯山さん、入院しちゃった上にあんなことになっちゃって。あーあ残念」

「岡本さん.....あんな何が言いたいんですか？」

一也はギロリと岡本を睨み付けた。

「いやぁね。結局飯山さんはお金欲しさであったのかな～と」

「なに.....」

「飯山さん、仕事できるし顔やスタイルもいいから浅川くんにはもったいないな～ってずっと思ってたんですよ♪だってお金以外、彼女が浅川くんを選ぶ理由がないですからねぇ」

「だま.....れ.....」

「ホントは僕が彼女と付き合いがあったんだけど、さすが金持ちのボンボン！あんなにいい女を引き付けちゃうんですから♪ま、それだけが取り柄なのかもしれないですけどねぇ、アハハハハ♪♪」

「だまれ.....」

「大丈夫大丈夫！ボンボンなんだからお金目当ての馬鹿女はいっぱい寄ってきますよ♪♪ね～、ボンボンくん☆アッハッハ♪♪」

「岡本くん言い過ぎだよ～」

岡本を筆頭に、一也の周りを囲んだ社員全員が笑い声を上げた。

その時、

一也の中の何かが音をたてて切れた。

気がつくと一也は

ボールペン片手にそこから飛び掛かっていた。

そこにいた全員が、嘲笑いを一瞬で硬直させたときには『グチャッ』という生々しい音が鳴り

気付いたときには、一也は既に手に握ったそれで岡本の四角い顔を突き刺していた。

「ギャアアア！！痛い！やめてえー！！」

岡本がその四角い顔を赤く染めながら歪ませた。

その赤く染めた塗料のようなものの出所は、一也が逆手で手にしたボールペンが突き刺さる鼻筋からであることが明らかだった。

「キャアアア！！」

「浅川くんっ！やめるんだ！」

その様子に社内は騒然な雰囲気へと化した。

そんな周囲をよそに、一也はその恐ろしい目付きで岡本を睨みつけ、右手に持つボールペンを『グチュッ』と抜き取り、再び別の箇所突き刺した。

「イキャアアア！！」

「クズ野郎が……人の気持ちも知らずに言いたい放題言いやがって！！」

すると一也は悲鳴を上げる岡本の襟首を掴み、今度は血で濡れたその右拳でその顔を殴打した。

「アァッ！！」

四角いせい、ゴツゴツした感が彼の右手に伝わる。

しかし、一也はそんなことはお構い無しと言った具合で岡本の顔を殴り続けた。

三度、四度、五度……十度、溜めに溜めて着火した赤い炎のような感情を爆発させるかのように、一也は岡本へのやるせないほどの怒りをぶつけた。

「やめるんだ浅川くん！」

社員数人に抑えられ、一也は息を激しく切らせながらも仰向けになる岡本を睨み続けた。

「フー！！フー！！」

「これじゃご両親が……！」

「うっせえんだよ！！どいつもこいつも、俺を坊ちゃんやら下っ端社員やら都合のいいように扱いやがって！！ストレス発散のサンドバッグみたいにしてきやがって！！」

一也は涙を流しながら、その場に悲痛な怒りをぶつけた。

「もう、たくさんだ……たくさんだぁっ！！」

「浅川くんっ！」

一也は、そこから逃げるように走り去った。

気がつくと、彼は自宅マンションにいた。

今はもう幻のような過去……つい数日前まで紗恵と何度も愛を誓い合った、シングルベッドの上で、一人悲痛な涙を流していた。

「紗恵……紗恵え……」

その時、着信音が彼のケータイを鳴らした。

うっすらとそれを確認すると、それは横浜の実家からのものだった。

一也はキッとした。

◇「もしもし……」

◆「あ、一也！お母さんだけど、あなたKKさんの会社で何てことをしてくれたのよ！常務さんから電話があったわよ！」

◇「……そんなことかよ」

◆「そんなことじゃないでしょ！あんなことしちゃダメでしょ！ちゃんとしなきゃダメって言ったでしょ！」

◇「でしょでしょじゃねえだろ！お前ら紗恵に手切れ金渡しやがったな！あいつは……自殺未遂まで起こして……！しかも階段から落ちたのも全部俺のせいだと！？」

◆「あら、あなたのためよ。せっかく別れてくれたんだから、よかったわねえ」

『よかった……？俺がこんなに嫌な思いしてなのに……怒りながらつらい思いをしてても……』

『こいつは、それを喜んでいるのか……？』

『俺ハ……コンナ人間ノ血ヲ引イテイルノカ……??』

「ハハハ……」

一也はうっすら笑うと、ケータイのスイッチを切り、電源を落とした。

それから数カ月の間—

『彼』は部屋にじっと閉じこもり、飲めない酒を浴びるように飲み、それまで一度も吸ったことのなかった煙草を大量に吸う……アルコールと煙にまみれたそんな毎日を送った。

無論、KK社は退職扱いとなった。

全てに絶望したかのように、彼の輝いていた瞳は明るく優しい面影を一切消し、どす黒い暗闇が乗り移ったものになっていった。

自分を含む全てのモノを憎むことで、『彼』は自分を支えることしかできなくなってしまっていた。

そして『彼』は、素直で明るい青年『浅川一也』であることを捨てた。

気がつく、話し終えた翼の瞳からは一筋の涙が流れていた。
そんな彼を、隣にいる愛菜は神妙な表情でただ見つめていた。

第8章へ

「.....こんな感じです」

翼は大まかに話し終えたのを示すかのように、涙で濡れた自分の頬をバスローブの袖で拭いた。

「そんなことがあったのね」

「ええ。あれほど何もかもが嫌になったことはなかった」

「その後.....紗恵さんやご両親はどうなったの？」

愛菜の冷静なまでの質問に翼は一瞬躊躇したものの、ここまで話したんだとばかりに再び口を開いた。

「紗恵に関しては全くわかりません.....。あれから会社にも全くコンタクトせずでしたし。親はもう.....連絡は来るけど拒絶してますよ。俺のふがいなさもあるけど、あいつらの異常な束縛や詮索にはもう耐え切れなかった！」

翼はそれ以上は口にしたくなかったのか、口を閉じてしまった。

「家系.....というもののなのかしらね」

愛菜はポツリと言った。

翼もそれを理解していたのか、否定しなかった。

「とにかく、ホントに辛かった。俺を心配する振りをして結局は俺のことなんて何も考えてなかったんですよ、あいつらは。あんな人の皮かぶったみたいなやつらから作り出されたかと思うと、自分を呪いたくなります」

作り出された.....愛菜はその言葉に、翼の中の激しいまでの負の感情の根源を見たような気がしていた。

そして彼女は再び口を開く。

「翼くんがそれまでに自分自身を評価してもらいたかったのも、そんな家庭環境や会社での扱いがあったからなのね。それで、ホストを？」

「はい」

翼は首を縦に振りながら答えた。

「俺は認めさせるために.....ホストを始めました。俺を馬鹿にした奴ら全員に、大金たたき付けて見返してやるんだ.....金がこの世のすべてなんだから！」

翼は床をじっと睨みつけながら憎しみを込めるように言った。

そんな彼を、愛菜はじっと見つめた。

『やっぱり、彼も同じなんだ。金や力に理不尽にねじふせられた今の世の中の犠牲者……』

愛菜は心の中でそうつぶやいた。

彼女の中で約3年前のある出来事が走馬灯のようによみがえる。

それは、翼のように心に痛い程の血を流し全てを憎みながらも、最後は愛すべき命のために自らの心を砕いた一人の少女の後ろ姿だった。

愛菜は、その少女と翼をずっと重ね合わせていた。

そして、意を決したように彼に問い掛けた。

「翼くん」

「何ですか？」

「あなたに決心はある？」

「決心？」

「そう。何があっても余計な感情はもたない、人を信じることなく全て蹴落とすくらいの決心はある？どんなに人に憎まれても、すべてを敵にまわしてもいいくらいの覚悟はある??」

愛菜は、今までにないくらい鋭い目つきで翼を見つめた。

いや、翼の瞳を見つめた。

すると、彼の瞳は彼女の視線をそらすことなくそれを真正面から受け止めていた。

翼の瞳には愛菜の瞳が、愛菜の瞳には翼の瞳が、お互いが瞳の中に宿す闇を映し出していた。

「決心も何も……」

翼が口を開いた。

「俺は既に一度死んだような人間だから、もう失うものなんてないから。だからー」

「だから？」

「俺はやります。ホストの世界で、一からてっぺんまで駆け上がってみたい。すべてを蹴落としても、他の何を犠牲にしても。どんな風に思われてもいい、どれだけ悪く言われようがかまわない。自分を……証明したい！」

『浅川一也』は死んだ……

それを意味するかのように、彼は過去の素直で優しい自分を一切捨て去り、ホスト『翼』としての新しい自分の道を歩んでいく決意を新たに固めた。

それを隣で見ていた愛菜の中にも、一つの決意が実っていた。

「これで決まりね」

愛菜は煙草に一本火をつけながら言った。

「決まり？」

翼が愛菜に聞き返すと、彼女はフーツと煙をふきながらその問いに答えた。

1 時間後—

翼はスーツに着替え、部屋を出ようとしていた。

「じゃあ」

「ええ、また明日昼に」

翼と愛菜はごく自然のごとくそう言葉を交わす。

「翼っ！」

ドアから出ようとする翼を、愛菜が呼び止めた。

「どうしたの？」

「あなたに一つ言い忘れたことがあるの」

「？」

「羽月くんのことよ。覚えてないだろうけど、今日酔い潰れて怒った光星からあなたをかばったのは彼なの」

「羽月……あいつが？」

翼は目を丸くした。

「そうよ。私も彼から聞いただけだし、あなたは彼をどう思ってるか知らないけどね」

「……」

「後で、一言お礼だけでもいいなさい」

「ええ」

「かしこまらなくていいって」

「わかった」

翼は複雑な表情で愛菜に返事をした。

「酔いの方は大丈夫なの？」

「ああ、もう大丈夫。ありがとう」

「じゃあ」

翼と愛菜は最後にそう言い交わした。

ホテルのエレベーターで降りる中、翼は一人今日起きた出来事を振り返りながらも、羽月のことを考えていた。

「あいつが俺を。何で……」

翼は小さな声でそうつぶやいた。

彼の中で特に好意的な存在ではなかった羽月からのその行動が、翼本人にとってはあまりにも意外だった。

ホテルを出てタクシーの中、翼はずっとそのことだけが頭に残っていた。

一方その頃、愛菜はホテルの部屋でケータイで電話をしていた。

「ええ、そうするわ。……うん、心配しないで天馬、もう大丈夫よ。ちゃんと一人で帰ったわ。……うん、じゃあ明後日ね」

愛菜は天馬との通話を終えると、シャンパンの入ったフルートグラスを持ちながら部屋の窓際へと歩いた。

窓のハーフミラーには、彼女の美しすぎるまでの姿がぼんやりと映し出されている。

その向こうに広がる新宿の夜景を見つめながら、彼女は心の中で囁き始めた。

『見守ってみるよ私……あんたと同じ傷と瞳をもった人間が、この先どんな風になっていくのか……』

愛菜の瞳の中には、その少女の3年前の姿が再び蘇っていた。

それが、彼女の中で止まった何かを動かしているとは、彼女自身まだ気付いていなかった。

二日後一

休日である日曜日の明けた月曜日、【Club Pegasus】は再びその日の営業を始めようとしていた。
二日前の騒ぎが嘘かのように、開店準備に勤しんでいた。

「翼、もうこね一かな」

「来れねえだろ、光星さんの前であんな粗相しちまったんだし」
ホスト達の間では、やはり二日前の翼の失態は記憶に新しかった。
一足先早く店に来ていた羽月は、それを近くで聞いていて心配でならなかった。

『翼くん、あれから大丈夫やろか。それに……』

羽月の中では翼の心配もあったが、あの時酔った彼を強引に連れていった愛菜とのことが気掛かりだった。

「はああ……」

羽月は深いため息をついた。

「おい羽月」

羽月に声をかけたのは天馬だった。

「へっ？あ、社長っ。おはようございますっ！」

「おう、おはよう。ため息なんてらしくないぞ」

天馬は羽月をたしなめるように言った。

「あ、ハイ。すみません」

「翼のことだろ？」

「えっ、社長なんで」

「お前の顔にそう書いてある」

「えっ？」

羽月は慌てながら自分の顔を手でおさえた。

天馬はそんな彼を見ながら軽くフツと笑う。

「お前は本当にわかりやすいな羽月。まあ、翼がああゆうことになったからだってのもわかるが、あんまりぼんやりして仕事に差し支えるなよ？」

「ハイっ、ホンマすんませんでした！」

羽月は天馬にペコリと頭を下げた。

「それと翼のことだが、あれから愛菜から電話が来て、数時間後に帰ったそうだ。心配するな」

「そうですか……」

「だからちゃんと仕事に励め、お前にはもうお前の客がいるんだ。わかったな」

天馬はそう言うと、羽月のもとから去っていった。

「そうか……翼くんちゃんと帰ったんやな。よかったわぁ」

羽月がそうつぶやいていたその時だった。

「おはようございます！」

エントランスの方から一人のホストの声が聞こえてきた。

店中にすでにいたホスト全員がそこを見つめると、一同が口を開けっ放しにしながらハツとしていた。

「おい……」

「マジかよ……」

「アレって……！」

皆が驚きながら、エントランスから一步一步歩いてくるその人物を見ていた。

「あ、アレは！」

その場にいた羽月も、驚きながらその『彼』を見ていた。

明るめの茶色に染められセットされた髪の毛、左耳のシルバーのピアス、その身に纏った高級ブランドのスーツと靴、そしてキリッとしつつも落ち着いた表情でその場に現れたのは、以前とは見違えるような変身を遂げた翼だった。

店内のざわつきに気付いてか、天馬が翼のもとに歩み寄る。

さすがの天馬も、彼の急激なまでの変化に驚きを隠せなかった。

「翼……」

「社長、ご迷惑おかけして、すみませんでした」

翼は天馬に対して頭を深く下げた。

「お前わかってるんだな？今のお前はこの店で限りなく悪い立場にあるんだ。それに耐えられるか？」

天馬のその言葉の後、翼は頭を上げ彼の瞳を真っすぐに見ながら口を開いた。

「耐えるも何もありません」

「なにっ？」

「俺は成り上がります。この店のホスト全員ねじ伏せてでも、俺はいずれ成り上がります。もうここにも味方なんていないんですし、だから耐える必要なんてありません」

翼はその暗闇に包まれた瞳で冷静に天馬に向かって言い放った。

『こいつ、何て目をしてやがんだ』

天馬も翼の瞳にある暗黒の輝きと変化に気付いたようだった。

「おい、てめえ！！」

翼の背後から声が聞こえてきた。

声の主は光星だ。

怒りに満ちた表情で、翼を睨み付ける。

「翼、てめえノコノコ出てきただけじゃなく、今何て言いやがった！？」

「光星さん、おはようございます」

「おはようじゃねえ！今何て言ったか聞いてんだよ！！」

光星は、怒り任せに怒鳴り散らす。

しかし翼は冷静に彼に言葉を返した。

「言った通りですよ。俺は必ず成り上がります」

すると、光星の怒りはますます増したようにその怒声も上がった。

「ふざけんな！！未だ客の一人もないやつがザケたこと言ってんじゃねえぞ！！しかも俺の客にまで不機嫌にしてくせによお！ええ！？」

「光星、落ち着け！」

怒鳴り付ける光星を、横にいた天馬が一喝する。

「しゃ、社長。何ですか！何でこんなやつをー」

「確かに翼のしたことはスタッフとしてやってはいけない。だが、無理に飲ませたお前に全く非が無いと言えるのか？そこらへんに目を配るのも、上としてのお前の仕事だろう？」

天馬の鋭い言葉に、光星は言葉を詰まらせながら黙りこんだ。

その光景を見ていた羽月や他のホスト達もどこかホッとしていた。

光星は「チッ」と言いながら、その場から去っていった。

「社長」

「なんだ翼？」

「今日から一からやり直すつもりで頑張らせていただきます。よろしくお願いします」
翼は改めるように、天馬に深々と頭を下げた。

「ああ。……それと味方なんていないと言ったが、それは違うぞ」

「？」

「お前を心配している奴も一人はいると思うがな」

「えっ？」

「後でちゃんと佐伯にも謝るんだぞ」

天馬はそう言うと、何も言わずにそこからキャッシャーの方へと歩いていった。

『社長……？』

翼はそう思いながら後ろを振り向いた。

すると、それを見ていた羽月が心配そうに立っていた。

「翼くん！」

羽月はトコトコ翼のもとに歩み寄った。

「おはよう、翼くん！」

「あ、ああ。おはよう」

「ちゃんと今日来てくれたんやな。こないだ飲んだのとか大丈夫かいな??」

「ああ」

翼は心配げな羽月にどこか詰まりながら言葉を返した。

「えっと……」

「ん、何や翼くん？」

「あの後聞いたんだけど、あの時俺をかばってくれたんだって？」

「えっ？あ、ああ～あん時のことやね？翼くんそんな気にせんでー」

「……がとう」

「へっ？」

翼は羽月と最後にそう言葉を交わすと、彼から離れるように後ろを振り向いて歩いていった。

「えっ、翼くん何やー？最後何て言ったかわからへんてえ〜！」

羽月の訛った声が店中に響き渡る。

そのせいで、翼は顔を赤らめながら、無言でそこから歩き去った。

目つきや口元に、ちょっとした緩やかな変化を帯びながらー。

「今日も一日やるぞ！！」

天馬のその言葉を狼煙に、今日も【Club Pegasus】は営業を開始した。

「今日翔悟さんはまた同伴？」

「また早紀さんって太客とだってよ。やっぱりさすが、No.1はずば抜けてるよな」

ホスト達がそう話してるうちに、エントランスのドアが開いた。

「いらっしやいませえ！」

元気のいい声が、一組の同伴客を迎える。

No.1翔悟とその客の一人早紀である。

威風堂々とした翔悟の横には、彼の常連客である紅いワンピースを纏った早紀が腕を組んでいた。

「いらっしやいませえ！」

「いらっしやいませ、早紀様」

エントランスに並んだホスト達と内勤の佐伯が、翔悟に連れられた早紀を迎える。

「いつもご丁寧にとありがと、佐伯さん」

「恐れ入ります」

早紀は頭を下げる佐伯にこやかな表情を見せる。

「おい、早紀さんを卓にご案内してくれ」

翔悟はヘルプのホストに早紀を案内させるように促す。

「ちょっと先に行ってて、すぐに行く」

翔悟がそう言うと、早紀はうんと頷いて指定のテーブルの方へヘルプのホストに案内されていた。

「……」

翔悟は、店に入ってからとある一人のホストの変化に気付いていた。

無論それは翼のことだった。

一方の翼も、彼からの視線に気付いていた。

翔悟はスッと翼のもとに歩み寄った。

「よう」

「おはようございます、翔悟さん」

「もう一昨日のあれから、店に出ないと思ってたが。意外と神経が図太いんだな」

「そうみたいです」

翼の予想以上の冷静な反応に、翔悟は表情をピクッと鋭くさせた。

「あのリーマン上がりみたいなダサイスーツの印象が強かったからな。まだ客もいないどころか、ろくな接客もできないお前が、どうしてこんないきなり変わったのかな？」

翔悟は口をニヤリとさせながら、翼に言っ放った。

しかし翼は動じずに、冷静に言葉を返す。

「俺にもお客様ができました」

すると翔悟は吹き出しながら笑いを上げた。

「ハッハッハ！そうかお前.....光星のところであんな騒ぎを起こしたから、店へのお詫びがてらにどこぞのマダムでも引っ掛けてきたか！？そのスーツとかもその人に貢がせたものか.....。翼、お前も中々やるじゃないか」

うすら笑いを浮かべながら嫌味な言葉を並べる翔悟だったが、翼は一切表情を変えていなかった。

しかしその時だった。

「いらっしゃいませえ！」

ホスト達の元気な声が、エントランスからの一人の来客を告げた。

「おお.....」

ホスト達は驚きの声を漏らした。

盛り上げられ巻かれた髪の毛、ハート形のピアス、際だった麗しい瞳、そして胸元の切れた淡いピンクのドレスに包まれた80センチを軽く超える股下。

佐伯は中世の貴族のように圧巻なその彼女を改まるように迎えた。

「いらっしゃいませ、愛菜様」

「こんばんは佐伯さん。天馬から話は聞いてるでしょ？」

「ハイ、本指名の件ですね？お伺いしております」

愛菜からの『本指名』.....

それを聞いた翔悟を含む周りのホスト達は、一瞬で言葉を失った。

「愛菜さんからの本指名って……」

「誰だよ一体？翔悟さんか？」

ホスト達は声が漏れないように、こっそりと話していた。

しかし、驚きによる表情の変化までは隠せていなかった。

それに気付いた愛菜は、クスッと微笑む。

「では愛菜様、担当スタッフに案内させていただきます」

佐伯が愛菜にそう告げると、その場にいる全員が息を呑んだ。

そして、佐伯がその口を開いた。

「翼、お客様からの御指名だ。案内してさしあげなさい」

佐伯のその言葉に全員が一瞬絶句した。

「な、何だって……！？」

「あの翼が、初指名！」

「しかもそのお客が……」

その場にいたホスト達が全員驚いていた。

特に**No.1**である翔悟は、珍しくも一際驚いた表情を示していた。

その口は、あんぐりと開きっぱなしになっている。

「なっ……。歌舞伎町で、あの【**Club Mirror**】でカリスマ嬢と言われたあの女を……ホスト歴たった半月程度の下っ端が……??」

翔悟は言葉を詰まらせながらそう呟いた。

そんな翔悟を見て、愛菜は再びクスッと笑った。

「愛菜さん！」

翔悟が愛菜に声をかけた。

「なに、翔悟？」

愛菜は何気ない口調で答える。

「どうして、どうして翼なんかを……！？」

「私が選んだ担当に『なんか』ってどうゆうこと？」

愛菜は鋭い口調で翔悟にそう言い返すと、プイッと彼から顔をそらした。

そうしてるうちに、翼はテーブルに案内するために愛菜の手を取っていた。

「今日からよろしくね、翼」

「こちらこそ、御指名ありがとうございます」

翼と愛菜はそう言い交わすと、佐伯に指定されたテーブルの方へと歩いていった。

「くっ...」

翔悟はその二人の後ろ姿を見ながら、苦渋の表情を浮かべた。

「愛菜さんが、翼くんを.....」

当然その光景は、複雑にそれを見つめる羽月の瞳にも焼き付いていた。

「よっこいしょっと」

愛菜はそう言いながら、ソファーにその華奢な腰をおろす。

「ありがとう、愛菜」

翼は彼女のとなりに座りそう囁いた。

「いいのよ。私は自分が楽しむためにしてるんだからさ。みんな、驚いてたわね？笑っちゃったわよ」

「ああ。何か飲もうか？」

「まずピンク入れて。今日は初めての記念だもの。飲むわよ～」

翼と愛菜がそんな会話を交わしている中、客を含めた店内全員が二人のいるテーブルを見つめていた。

あのダメホストと言われた翼と、カリスマキャバ嬢の愛菜との間に一体何があったのか？

そこにいる皆がその謎に大きな疑問と関心を抱いていた。

二日前のあの夜ー

「決まりね」

愛菜は煙草を一本火をつけるとフーツと煙を吹いた。

「現役を退いた天馬の次のホストよ。翼くん.....いえ翼、あなたを指名するわ」

「!？」

愛菜の突然の発言に、冷静だった翼もさすがに驚きを隠せなかった。

「俺を??」

「あら、ダメかしら？」

「いや、ダメとかじゃなくて……何でいきなり俺を？」

「そんなこと言ってる場合？あなたホストとして成り上がりたいでしょ？客の要望は素直に聞き入れなさい」

愛菜はそう言いながら煙草をクシュッと消すと、再び口を開いた。

「私が、自分のすべてを叩きこんであなたを一流にしてあげるわ」

「愛菜さん」

「もう私はあなたの本指名客よ。さんづけと敬語はやめてね」

翼は愛菜をまっすぐに見つめながらうなずいた。

「よろしく、愛菜」

翼は気持ちを改まるように、愛菜にそう言った。

「愛菜、一つ聞いてもいい？」

「なに？」

「言いたくないならいいんだけど、俺の……何がよかったの？」

「……」

愛菜は言葉を詰ませた。しかし、すぐに言葉を返した。

「今は話せない……。時期が来たら教えてあげる」

愛菜はそれっきり、それに関して何も話そうとはしなかった。

翼は愛菜の指名理由が気にはなってはいたものの、必要以上に詮索せず、接客に専念することにした。

きっといつかそのうちわかる日が来るだろう、そう考えていた。

しかし、今はせっかく掴んだこのチャンスを生かそう……

彼の中ではその意思が大きく広がっていた。

『馬鹿にしてきた奴ら、俺のすべてを壊した奴ら、すべてねじふせてやる！』
この思いだけが、今の翼の唯一の真実だった。

この闇に包まれた世界で成り上がるため、羽ばたくため、そしてすべてを見返すため、

翼のホストとして、そして一人の人間として紡いでいく結末への狼煙が、今本当の意味で上がっていった。

第9章へ

「A卓、愛菜さんよりピンクもう一本いただきましたっ！！！」

店内に元気なマイクコールが響き渡る。

翼と愛菜のテーブルに入るドン・ペリニョンは、もうすでに3本目を迎えていた。

それ以上に、生まれ変わったように変貌した翼と彼の隣に座る愛菜姿は、他の女性客やホストからも注目の的だった。

「翼、愛菜さんの御指名をもらって見違えるように変わりましたね。一体あいつに何があったんでしょう？」

「さあな」

目を丸くしながら尋ねる佐伯に、天馬は軽く笑いながら答える。

しかし、その光景を見つめる彼の瞳は真剣そのものだった。

『翼……ついにやりやがったな。愛菜の本指名を生かすも殺すもお前次第だ』

天馬は自分の見る目が間違っていないことを確信するかのように、心の中で呟いた。

一方の翼は—

「愛菜、大丈夫？ちょっと飲むペースが早過ぎるんじゃない？」

「ちょっと翼何言ってるのよ。今日はあなたと私の記念日よ？私は大丈夫だから心配なんかしないの」

翼はかなりの勢いで飲むほろ酔いの愛菜をなだめようとしたが、彼女はそれを振り払った。

「お祝いごとなんだから、こんなときくらいシャンパンで騒ぎましょう？」

「ああ、わかった。ゴメンよ、ちょっといつもより飛ばし気味だからさ」

「フフッ、大丈夫よ」

翼と愛菜は、互いに見つめ合って笑うと再びシャンパンを口の中に注いでいく。

『今日ヘルプは一切いらぬ』と言った愛菜の言葉通り、二人のテーブルには彼らを除いて誰一

人としていなかった。

その光景を、翔悟をはじめとした他のホスト達が快く思わないのは言うまでもない。

「チッ」

翔悟は眉間に深いシワを寄せながら口を鳴らした。

「どうしたのよ翔悟？」

彼の指名客である早紀が尋ねる。

「何でもない」

「そうなの？何か機嫌悪いわよ、あなた」

「何でもないんだ」

「あの翼って子のことでしょ？」

「……！」

翔悟が不意を突かれた表情を示すと、早紀はフッと笑う。

「あの時席についた時と比べるとえらい変わり様ね。隣にいるあの女の子のせいかしら」

「さあね」

「翔悟、あのお客の子知ってるんでしょ？だれ？」

「……さあ。見ての通り、ただのキャバ嬢だろう」

翔悟はそう言うと、シャンパンを勢いよく飲み干した。

「ただのキャバ嬢、ね」

早紀はグラスに口をつけながら、離れたところにいる翼と愛菜を見つめた。

一方

光星も、その光景に鋭い視線を送っていた。

「あの野郎……！」

指名客が隣にいるに関わらず、光星の眼は常に翼を捉えていた。

「調子にのりやがってよお！」

彼はそう言いながら突然席を立った。

「光星どこ行くのよ？」

「トイレだよ、トイレ。ちっと頼んだぞ」

指名の客に顔を合わせることもなく、光星はヘルプのホストに後を頼むと一人トイレへと歩いていった。

「あの野郎、急にどうして」

光星はトイレの鏡に映る自分自身に語りかけるようにつぶやいた。

「気になってるんだ？」

光星の斜め後ろからそう言ったのは**No.3**の由宇だった。

相変わらず冷静ながらも明るい短髪が彼の特徴を物語っている。

「由宇」

「さすがに僕も気になったよ。翼くんがあの愛菜さんをねえ。すごいじゃない」

由宇がそう言うと、光星は眉をクンと上に吊り上げた。

「おい由宇、これはただ事じゃねえぞ。今まで社長以外.....翔悟さんや俺らを含め誰も指名しようとしなかったあの女が、あのへぼいのを指名したんだぞ！しかもあんな騒ぎまで起こした奴がよお！」

光星は声を荒立てた。

しかし、由宇は至って冷静だった。

「光星さんしょうがないでしょ。どんな事情があるかは知らないけど、あの翼が彼女の指名をとったのは、もう変えようのない事実なんだから」

「由宇お前、あいつがこの店でのさばってもいいってのか！？」

「そんなんどーだっていいし。それを社長が認めていることならしょうがないんじゃない？」

「お前どっちの味方なんだ、由宇？」

「別に。僕は誰の味方とかどーでもいい。あくまで自分自身のペースで楽しく仕事できさえすればいいんでね。さて、翼の卓の様子でも見物に行こうかなって」

そう言うと、由宇は光星のいるその場から歩き去った。

「.....チッ、クソが！あの野郎！」

光星は、言いようのない苛立ちをぶつけるように鏡の中の自分自身を再び睨みつけた。

それから数時間が経過一。

【**Club Pegasus**】は間もなく閉店の時を迎えていた。

内勤の佐伯がマイクを通して店内に声を響かせた。

「さあ～ラストソングを歌う今日一番輝いてた子は.....」

BGMが流れる賑やかな中ですら、そこにいる全員が息を呑む。

佐伯は、一瞬言葉を止めたかと思うと、ラストソングを歌うそのホストの名前を高々に叫んだ。

「はい！新人ながら今日初めての本指名をいただきました、翼くんですっ！！おめでとう！！」
『翼』という誰も一度も聞いたことのないようなその名前が、店内にいるすべての人間の耳をを支配した。

「翼？誰それ??」

「ラッソン、トップの三人じゃないの？」

「新人でラッソン歌ったの？すごくない!？」

「ねえ誰、翼って。どの子なの？」

指名フリー問わず、大多数の女性客が、彗星のごとく現れた『翼』という謎の存在に興味関心を示し始めていた。

「さあ翼、歌え。今日の主役はお前だ」
翼の前に現れた天馬が、彼に一本のマイクを渡す。
彼のその行動が、翼の未知の正体を明るみにするまでにそう時間はかからなかった。
翼が希望したバラード曲のインストが流れ、そのメロディに沿って彼は歌い始めた。
その姿を、近くにいる愛菜と天馬は、笑って見つめた。

「翼、おめでとっ！」
手拍子に彩られたラストソングが終わる頃、隣にいる愛菜が、翼の左腕を掴みながら言った。
「そんな、愛菜のおかげだよ」
翼は謙遜をしながら言った。
「ううん、最初は記念とか言ってたけど、私も気がついたらあなたと二人でいることに何か浸っていたわ」
「そっか、それならよかった」
「それより翼って意外に歌が上手いのねっ」
「そうかい？」
「うん、歌だけなら天馬よりも上手かったわよ！」
「褒めすぎだって」
翼は冷静さを装いながらも、俄かに照れ笑いを浮かべた。

『自分自身への評価』
ホストとして男として、翼自身が欲しかったものをついに実感し始めていた。

閉店後一

【Club Pegasus】の面々は営業終了後のミーティングに入っていた。
もちろん愛菜を含むすべての女性客はいなくなっている。

「お疲れいっ！！」

「お疲れ様っす！！」

天馬の声に、店内のホスト全員が声を合わせる。

「おーし、今日も一日お疲れ！今日はみんな一人一人がよく頑張ったな。客入りや売上も上々だ」

天馬は誇らしげに言った。

「まあみんなもすでに知ってるだろうが……翼がついに初の指名をとった。そしてラストソングに行くまで売上を出したんだ」

天馬の話す声以外は静まり返っている中、どこことなくざわめきが漂う。

翼をチラ見する者もいれば、彼に目を合わせない者もいるなどそれぞれだったが、やはり急激に存在感を増した彼のことを意識しない者は一人もいなかった。

それは、彼のすぐ後ろにいる羽月も例外ではなかった。

天馬は続けた。

「今まで翔悟・光星・由宇以外がラッソンしたことがなかった以上、これから翼はもちろんみんなのがんばりに期待しているぞ！」

「ハイッ！！」

「よし今日はもう以上、じゃあ解散！！」

「お疲れ様したあ！！」

その最後の挨拶を機に、今日の【Club Pegasus】の営業及び仕事は終了した。

「んん～。疲れたなあ」

翼はぐぐっと身体を伸ばした。

『でもこんな疲れ方、ホスト始めてからは初めてか』

翼は、やっとやり甲斐と充実感を手に入れた自分自身に少し驚いていた。

「翼くん」

「えっ？」

その時、羽月が翼のもとにやってきた。

「初指名と初ラスト、ホンマおめでとう！」

羽月は満面の……とは言い難い笑みで翼に祝いの言葉を言った。

「あ、ああ。サンキュー」

「まさか、翼くんが愛菜さんの指名もらうとは思わなかったわぁ……」

「……」

「ホンマ、うらやましいなあ」

翼はどこと無く切なそうな羽月の表情に気付いた。

『まさか』

翼は何となくそう思ったが、口にするにはしまいと思った。

「まあ、そっちもがんばれよ」

翼は最後にそう言ってそこから立ち去ろうとした……その時だった。

「翼くん待って！」

羽月が翼を呼び止めた。

「何だ？」

「よかったらでええんやけど」

「？」

「もし腹減ったたら……これから一緒にメシ行かへん？」

羽月の突然の言葉に、翼はキョトンとした。

何とも言えない沈黙が、二人を数秒の間覆う。

「ああ、嫌やったらええで。もうプライベートは仕事の相手とは会いとうないかもー」

「いいよ」

「へっ？」

「メシ、行くんだろ？」

翼は笑うことはなかったものの、羽月の目をまっすぐ見つめながら言った。

「ホンマ？ええの??」

「簡単にだったらな」

「いや、簡単でもええよお！おおきに、ありがとう翼くん！」

本人にとっても意外だったのか、羽月はとても嬉しそうにはしゃいだ。

「そんなにはしゃぐなよ」

「ああ！ゴメンゴメン！」

羽月はよっぽど嬉しいのか、テンションがどんどん高くなっていった。

「お疲れ、ちょっと取り込み中か？」

そこに天馬が話しかけてきた。

「社長、お疲れ様です」

「お疲れ様ですう！」

翼と羽月は、天馬に挨拶を返す。

「お疲れ。翼、今日はよくやったな！」

「えっ」

「だがお前にはまだ客は愛菜一人だ。これからもっと指名客増やしていけよな」

天馬はそう言いながら翼の肩をポンと叩いた。

「ハイッ！」

「それとな」

周りに聞かれたくないからか、天馬はいきなり翼に耳打ちをする。

「社長？」

「いつもは平静かもしれんが.....愛菜は今とある事情で苦しんでいるんだ」

「えっ？」

翼は目を丸くした。

「いいか翼。詳しくは言えんが、きっといつか本人から話される時が来る。もし愛菜に何かあったら、その時はお前がホストとしてあいつを支えてやってくれ」

「.....はい」

意味もわからずじまいだったが、真剣に話す天馬に対し翼は返事一つをすることしかなかった。それを聞いて、天馬もどこか安心したようだった。

「もちろん羽月、お前もだ！翼に負けんなよ!？」

天馬は羽月の肩をパンッと叩きながら彼を激励した。

「は、ハイッ！がんばります！！」

羽月も元気よく天馬に言葉を返した。

天馬はフッと笑みを零す。

「じゃあお疲れさん！」

「お疲れ様でした！」

翼と羽月は最後に天馬と挨拶を交わすと、エレベーターでビルの1Fへとおりていった。

「さって何食べよー」

羽月がそう言いかけた時だった。

「おい翼！」

横から誰かが翼に声をかけてきた。

「翔悟さん」

声をかけてきたのは翔悟だった。

「お前……どうやってあの女を」

鋭い眼差しの翔悟に対し、翼は冷静に答える。

「さあ。僕もよくは知りませんが」

「そんなはずはないだろ。お前彼女に何をした？」

「何もしてません」

詰め寄る翔悟に、翼は冷静に返す。

だが、翔悟の詮索はそれだけでは終わらなかった。

「何もしてない？さてはお前、あの女と枕でもしたか？」

「マク……ラ……？何のことです??」

「くっ……ハハハ！こりゃウケるな、枕の意味も知らないでそうなるとは」

「……??」

『枕』という意味がわからなかったのか、翼は首を傾げたままだった。

しかし、横にいた羽月は、その意味を知った上で聞いてか表情を俄かに強張らせていた。

翔悟は続けた。

「まあいい……お前みたいなドシロウトが、そうする以外にあの女を落とせるわけがないんだ。

よっぽど相性がよかったのか、とんだ今日のヒーローだ……なあ、羽月？」

「えっ??いや、どうなんやろ……」

話をふってきた翔悟に、羽月はたじろぐ。

「まあいい。お前がどうゆうスタイルでこようが、あの女一人を客にした程度で上がれるほどこの世界は甘くないんだ。それを覚えておけ！」

そう言うと、翔悟は背中を向け翼達の前から去っていった。

「マクラとかどうとか、翔悟さん何を言いたかったんだ？」

一人つぶやく翼に、羽月は何も言わなかった。

いや、言えなかった。

半ば好意を抱いていた愛菜と翼がそうになっていたなど、若い彼自身想像もしたくないことだった。

しかし、そんな雰囲気は無理矢理にでも消し去ろうと彼は思うことにした。

「きっと翔悟さん、翼くんがラッソンやってちょっと驚いただけやって！さっ、翼くんメシ行こう！」

「あ、ああ」

羽月は、そう言って翼を強引に連れていくように声を張り上げた。

翼と羽月の二人は、ネオンが輝く歌舞伎町の中を共に歩いていった。

「こうやって翼くんと仕事後とか二人で歩くの初めてやな！」

「そうだな」

「翼くん、何か好きとか食べたいのあるん？」

「いや、特に好き嫌いないから」

「そっかあ！好き嫌い無いのは俺と一緒にやな。じゃあどこがええかなあ？」

そう言いながら二人で歩いていると、翼はふと立ち止まった。

「ん、どうした翼くん？」

翼は羽月に答えるわけでもなく、すぐ目の前の街の一角で座りながら子犬の柴犬の世話をしている一人の黒髪の少女を見ていた。

「あれは……」

「ん？翼くんどうしたんや？犬好きなん？」

その時、翼と羽月のことに気付いたのか、その子犬が「キャン」と鳴いた。

それと同時に、そのすぐ隣にいた少女は二人のことに気が付いた。

「あっ、やっぱり……」

翼はその少女の顔を見ると、何かに気付いたようにつぶやいた。

彼女も、翼のことを見るとハッと気付いたようだった。

「何や翼くん、あの女の子知り合いなんか？」

「ああ、ちょっと」

そう言うと、翼はその少女のところに近づいた。

彼女もそれに合わせて立ち上がる。

「キミ、確かあの時の？俺の手にハンカチを巻いてくれた……」

翼はその少女にそう話しかけた。

彼女は「ウン」と言うように首を縦に振った。

「翼くん、いつこんな可愛い女の子ナンパしたんや？」

いつの間にか隣にいた羽月が、翼に問い掛ける。

「あのな……。違うんだ。彼女はー」

翼は、ことのいきさつを簡単に羽月に説明した。

以前、仕事後のストレスと酔った勢いで電柱に拳を打ち付けて血まみれになっていた右手の怪我を、ある黒髪の女の子が応急処置をしてくれたこと。

その人物が、今日の前にいる彼女だということー。

羽月は薄目で翼を見ながらも、「ほ～」と言いつつ納得したようだった。

「あの時はありがとう。あの時キミが治してくれたおかげで、もう怪我は大丈夫だよ」

翼はそう言いながら、少女に軽く頭を下げた。

すると彼女は笑顔で首を横に振った。

「それにしても、めっちゃ可愛いなあ。キミ何てお名前なん？」

「……」

羽月が問い掛けると、彼女は無言で黙ったまま俯いた。

「おい、仕事じゃないとはいえ、いきなり女の子にそんな感じで名前聞くなんて失礼だろ」

翼が羽月をたしなめた。

「あっ、そうやな……。ごめんなさい。気を悪くせんといてえ」

羽月が謝ると、少女は再び笑顔で頷いた。

「キミ、ずっとここでこの子犬の世話をしてるの？」

翼が問い掛けると、彼女は何も言わずただ頷くだけだった。

そして、再び腰をおろし尻尾を振る子犬の頭を撫で始める。

「なあ翼くん」

羽月が突然翼に耳打ちした。

「さっきから思ってんけど、何でこの子ずっと一言もしゃべらへんのかな？」

「さあ」

その時の羽月の言葉はもっともだった。

以前怪我を翼の治した時といい、彼女は翼達の前で一切言葉を発している様子がなかった。何かを言っても、ただ仕草や表情で表しているだけの彼女に対して、翼と羽月はただ不思議に思うしかなかった。

その時、そのすぐ後ろにある小料理屋らしき店の戸がガラガラと開き、そこから30代後半くらいの一人の着物姿の容姿端麗な女性が姿を現した。

「美空(ミソラ)、そこにいたのね」

女性がそう言うと、美空と呼ばれた少女が女性のもとに近づいた。

すると、美空は何か不思議な手ぶりを彼女にやってみせる。

女性はそれを見て、何かを理解したようだった。

それを見て、翼はあることに気付いていた。

「.....そう、そう。わかった、後で買っておくわね」

女性はそう言うと、美空の数メートル後ろにいる翼達に気が付いた。

「あなたたちは.....ホストさん？」

女性がそう尋ねると、羽月はあたふたしながら答えた。

「え、あ、まあ～何なんやろ～.....。えっと今彼女とたまたま会ってそこでー」

「すいません、以前僕が彼女に道ばたで怪我をみてもらったことがあります。それで今さっきたまたまここで会いまして、お礼を言わせていただいていたところだったんです」

言葉に詰まる羽月の代わりに、翼が代弁するように言った。

「そうですか、何かうちの子がしたことにはわざわざそう言っていたいて、ありがとうございます」

女性は、とても腰が低い口調で翼に言った。

「あのう、すんまへん」

羽月が女性に対して突然話を切り出した。

「はい？」

「こちらは、お店をされてるんですか？」

「ええ、一応小料理のお店を」

女性が後ろにちらっと目をやると、そこには

【小料理 "楓"】という看板を掲げた、小さな店がたたずんでいた。

それを見てか、羽月はニッコリと微笑んだ。

「そりゃええわ！なあ翼くん、せっかくやしここでメシ食ってかへん？」

羽月はもう我慢が出来ないとばかりに声を上げる。

そう言うと、女性も笑顔で二人を見て口を開いた。

「ええ、お二人がよかったですらぜひそうなさってください。今日はお客様もあまり来なくて早めに閉めようかと思ってたんです」

それを聞いてか、翼はその流れに納得したようだった。

「じゃあ、一杯寄らせて下さい」

翼がそう言うと、羽月ははしゃがんとばかりに喜んだ。

「俺もう腹減って死にそうやったんや〜」

羽月の様子を見て、女性と美空はクスクス微笑んだ。

翼と羽月の二人は、その夜【小料理"楓"】にて世話になることにした。

第10章へ

「ささっ、どうぞそちらへ」

翼と羽月は、今いる小料理店を営む広崎楓(ヒロサキ カエデ)の言われた通りに端のカウンター席へと腰をおろした。

【小料理"楓"】は、カウンター10席とテーブル2ヶ所の小さな店だが、まだできて日が浅いのか桧をベースにした和風の落ち着いた内装だった。

所々からほのかに漂う桧の香りが、翼と羽月の鼻をくすぐる。

「今お通しをお出ししますね。美空、手伝って」

楓がそう言うと、美空は無言のまま頷く。

羽月は、それを何も言うことなく、ただどこか不思議そうに見つめていた。

しかし翼は、美空が一切しゃべらない理由を何となく理解していた。

「はい、お待ちどうぞさまです」

楓がカウンターごしに小鉢に入ったお通しを差し出した。

中にはほんわかと匂いのする肉じゃがが入っている。

「お二人ともお飲みものはいかがいたしますか？」

「あ〜、じゃあビールで」

「あ、俺もや」

楓の注文に対する質問に、翼達は淡々と答える。

「ハイ！美空、ビールお出しして」

美空はすぐにビールサーバーのところにトコトコと歩いていった。

「お客さん、こんな狭いところすみませんねえ」

「あ、いえ」

「あ、私この店やってます広崎といいます」

楓は翼と羽月にそう言いながら頭をペコリと下げた。二人もそれにならう。

「ママさん、あの子は？」

羽月が返すように問い掛けた。

「ああ、あの子は娘の美空って言います」

「美空ちゃんかあ、ええお名前ですねえ☆」

「フフッ、ありがとうございます」

そうこう話してるうちに、美空がジョッキに注がれたビールを持って二人のもとにやってきた。

「あ、おおきにい！」

「どうもありがとう」

羽月と翼がそう言うと、美空はペコリと頭を下げ無言で店の奥に歩いていった。

「……」

翼と羽月はやはり気になってはいるものの、気を取り直して食事に専念することにした。

「じゃあ翼くん、お疲れ様ア！」

「お疲れ様」

二人はジョッキを交わし、クイツと一口目を口の中に注いだ。

「あー！仕事後に飲む一杯はまた格別やな！」

羽月はため息に近い声を漏らした。

「フフッ、いい飲みっぷり。さすがホストさんね」

楓が笑いながらたしなめると、羽月は照れながら笑顔を見せる。

「お料理、何がよろしいですか？」

「あ、ママさんのオススメで！翼くんは？」

「えっ？……じゃあ僕もオススメでお願いします」

翼と羽月の注文に、楓は「わかりました」とばかりに笑顔を見せた。

「翼くん、ホンマに今日はおめでとう！めっちゃ驚いたわ」

「いいよ、そんな」

羽月の改めでの祝いの言葉に、翼は僅かな照れを見せる。

しかし、羽月の心中は実のところ複雑だった。

本心は、翼に愛菜とのことを尋ねたかったが、食事に誘ったのもあり、何より男として惨めになりそうな気持ちがあっただけか、そのことについては触れないことにしていた。

「それと……一緒にメシつき合ってくれておおきに」

「え？何だよ改まって」

「いやあ」

羽月は少し照れながらビールを一口飲むと、再び翼に対して口を開いた。

「実は……俺今日でハタチやねん」

「えっ??」

羽月の口調が妙に大人しいせいか、二人の間に3秒ほどの沈黙が流れた。

その間、カウンターごしにグツグツと言う煮物を温める音が際立つ。

「ハタチ？今日？」

「うん。こんなこと翼くんに言うのもなんやけど、俺祝ってほしかったんや」

「祝ってほしかったって……。でも、それが何で俺なんだ？俺がこんなこと言うのもなんだが、君には店に仲よさ気なキャストが他にも何人かいるだろう」

翼がそう言うと、羽月はやや俯きながら答えた。

「確かに店にはおるよ、普通に話して普通に仕事する子なら。でも、違うねん。正直言ってまうけど、俺……店の人達とはプライベートまでは合わへん」

「……」

「翼くんも何となくわかるやん？こんなこと言いたくないんやけど……うちの店、翔悟さんや光星さんにべったりな金魚のフンばっかやん」

羽月は溜めていたものを吐き出すように言った。

「俺な、東京出てきたばかりやし職歴があるわけでもないから、何を偉そうなこと言ってんねんて感じやけど……俺、ああゆう風に群れるの嫌いなんや」

「……」

「だからやで、翼くん人と群れたりこびたりせんし、何より俺の同期やから……だから今日……」

「そうか」

「ごめん、こんなことばかり言うて。ハタチの誕生日まで一人でいたくなかったんやな、きっと」

羽月はそう言うと、クイツとビールを飲み続けた。

「ごめん翼くん、変なことばかり言うて」

「あ、いや」

いつも元気な羽月と違ってか、翼は彼に対して複雑な思いを浮かべていた。

何より、誕生日"まで"という表現に彼の心の内が見えてならないような気がしていた。

「さ、鯖の味噌煮と揚げ出し豆腐が上がりましたよ。温かいうちに召し上がって下さい」
楓が暗めの雰囲気割って入るように、カウンターごしに料理を差し出した。

「そやな、せっかくのごはんやし楽しく食べなアカンな！ごめん翼くん、食べよう！」

「ああ」

「いただきます！」

翼と羽月は気を取り直すように、まだ食べてなかったお通しの肉じゃがに箸をつけた。

「……うんまいっ！」

羽月が一口肉じゃがを口にすると、感動の声を大きく発した。

「ママさん、めっちゃうまいでえ！」

「フフ、ありがとうございます」

翼もそれにならうように肉じゃがを一口食べてみると、すぐに口の動きが止まった。

「おいしい……」

「なっ、そやろ翼くん！」

「ああ」

翼と羽月は続いて出された料理に手をつけるも、驚きと感嘆を次々と漏らした。

「すごいおいしいです」

「なあ！あ、ママさんビール二つおかわりお願いしますう！」

「はいっ！美空～、生二つおかわりお願い～」

羽月が残りのビールを口にしようとしたとき、翼は手にとったジョッキを彼に向けた。

「えっ、翼くん？どうしたんや？」

「誕生日なんだろ？今日は」

「翼くん……」

「こないだ、俺が酔い潰れたときには君には助けられたしな。まあ……ハタチおめでとう」

翼がそう言うと、羽月はとても嬉しそうに満面の笑みを見せた。

「ありがとう翼くん！」

その時、美空はすぐにジョッキに注がれた生ビールを持ってやってきた。

そして彼女は、すぐに店の奥にトコトコと歩いていった。

「よしっ、二杯目やな！カンパーイ！」

翼と羽月はもう一度ジョッキを『ゴン』と交わした。

「お二人とも仲がいいんですね？」

楓が微笑みながらカウンターごしの二人に話しかけた。

「あ、いや～」

「翼くんそんな照れんでもええやん」

「いや、照れてるわけじゃ」

翼はわざとらしく咳き込むと、改めるように楓に話しかけた。

「あの」

「はい？」

「よかったですか？その……僕たちみたいな感じのがお店入れてもらっちゃって」
翼がかしこまりながらそう言うと、楓は何も気にしてないかのように答えた。

「別にいいじゃないですか。仕事はホストさんでも今は一人の男の方でしょう？」

「水商売……ホストに対して抵抗は無いんですか？女の人だからやっぱりちょっと気になっちゃって」

楓はグラスの中の水を一口飲むと、すぐに答えた。

「ないです、ホストだからって皆がみんな不真面目で悪い人って言うのは違うと思いますよ。翼さんと羽月さん……でしたよね？少なからずお二人は、いい人だと思います」

「ママさん……」

笑顔を揺るがせない楓の言葉に、翼はただただ相槌を打った。

「それに……」

「？」

「私の主人も昔歌舞伎町でホストをしてたんですよ」

「ええっ!？」

楓の発言に、羽月は驚きの声を上げる。

「声がデカイって」

「あ……ゴメン」

翼が人差し指で耳栓しながら羽月をたしなめる。

「フフ、まあ私も昔はホステスをやっていたね」

「そうか～ママさん、めっちゃキレイやもん」

「羽月さんはお上手ね。それで、その人と私との間に生まれたのが、この子……美空なんです」
楓は、自分の横で野菜を包丁で切っている美空を見つめながら言った。

「美空ちゃんもかわいいもんなあ。親御さんが両方ともお水やってたんやし、美男美女の血筋を見事に受け継いだんやな！一度その旦那さんにも会うてみたいわあ」

羽月がそう言うと、楓はふと表情の明るさを俄かに沈める。

「あれっ？どないしたんやろ？」

「バカ」

脳天気にも首を傾げる羽月に、翼が頭を押さえながら言った。

「えっ？俺何かアカンこと言うたかな……？」

すると、楓は今までと変わらないそのままの口調で話し始めた。

「主人は……美空の父親は、あの子がまだ小学校4年生だった頃に亡くなったんですよ。もう10年前くらいのことでしょうか」

楓のその言葉に、羽月は顔を少しずつ真っ青にしていった。

「あ……す、すんまへん！俺そうとは知らへんかったとはいえ」

羽月は頭をペコペコと下げながら謝った。すると楓はクスッと笑ってみせる。

「いいんですよ羽月さん。もう昔のことですし」

「せやけど……」

「いえ。私には今、この子がいますから」

そう言うと、楓は横にいる美空を見つめた。

するとその美空が、楓に向かってある手ぶりをしてみせる。

「……」

楓は美空のその手ぶりを見て、何かを理解したようだった。

「……うん、わかったわ。じゃあそれもお願い」

楓にそう言われると、美空は作っている料理に次々と手を加えていた。

そして、彼女は食材を取りに店の奥へと消えていった。

その光景を、翼と羽月も興味深く見ていた。

その視線を感じたのか、楓は二人に対して口を開いた。

「お二人とも、もう気付いてらっしゃいますよね？あの子……美空は見ての通り声を出して言葉が話せないんです」

「声が？」

翼がそう言うと、楓はコクッと頷いた。

「美空ちゃん、声が出えへんのか、生れつきなんですか？」

羽月が尋ねると、楓は先を続けるように話し始めた。

「いいえ。元々は話せないどころか、人一倍ハキハキ声を出すくらい元気だったんですよ。でも、先程も話したことですが、主人が亡くなった10年前を境に、声を失ってしまったんです」

「10年前……もしかして？」

翼がそう言うと、楓はただ頷き先を続けた。

「当時肝臓を病んでいた主人が、当時10歳の美空を連れて歩道を歩いていた時のことでした」
楓の瞳に僅かに涙が浮かぶ。

「歩いていた二人のところに、居眠り運転をしていた乗用車が突然猛スピードで近づいて……」
「……」

「そばにいた美空は、まだ比較的軽い怪我で済んだんですが……。娘を庇った主人は……」
その後は言葉にならなかった。

楓は忌ま忌ましい記憶に苛まれるように、着物の裾をギュッと握った。

翼と羽月は、言葉もなく、ただ聞くことしかできなかった。

しかし、沈黙が流れることなく楓は再び口を開いた。

「主人が亡くなり、私はとにかく美空を育てることに専念しました。しかし、事故から間もなく……あの子は声を失いました」

「もしかして彼女……事故の後遺症で？」

翼が尋ねると、楓はただ俯いた。

「はっきりとはわからないんですが、恐らく父親を無くしたショックかと思います。怪我の後遺症にしては喉に損傷は無いし、何よりあの子は父親にとっても懐いていましたから……。何にしても、あの10年前の事故があの子から声を奪ってしまったんです」

「そんなことがあったんや……」

話し終えて涙を一粒零す楓に、羽月が相槌を打った。

「大変だったんですね」

翼もまた相槌を打った。

すると楓はハッとされたように、瞳に浮かべた涙を拭った。

「す、すみません。初めて会う……しかも食事されてるお客様にこんな話をしてしまいまして」
楓は焦りながら、翼と羽月に対して頭を下げた。

「いやそんな、気にしないで下さい」

「そうやてママさん、誰かて一つや二つ悲しい経験とかあるんやしい」

二人がそう言うと、楓はニッコリしながら「ありがとうございます」と返した。

「まあ、それに一応俺らホストやし！お話を聞くくらい何でもないでえ」

「あら、そうしたらお金払わなきゃいけないのかしらっ」

羽月の言葉に、楓は意地悪口調ながらも笑いながら返した。

「んもう、そんなんどーでもええからあ！」

羽月もニカッと笑いながら言った。

そばにいる翼も、僅かにフッと笑みを零す。

「まあ、さっきもやってたんですけど、それ以来私達は手話……さっきやっていた手ぶりを覚えて、普段それで会話をしてるんです」

「シュワ？シュワって何や??」

何のことかさっぱりわからないのか、羽月は楓に質問を投げかけた。

「手話は、手で話すと書いて"シュワ"って言うんです。耳が聞こえなかったり、美空のように声が出せなかったりする人には不可欠なものなんですよ」

「ほえ～」

楓の説明を聞いた羽月が気の抜けたような声を漏らした。

しかしその時だった。

「美空さんは、それで奥の方に調味料を取りに行ったんですよね」

翼が唐突にそう言うと、楓はポカンとしながら彼のことを見た。

「翼さん、何で美空が向こうに行ったこと理由を……??」

自分しかわからないことのはず…そう思った楓は不思議そうに翼に問い掛けた。

しかし、彼が答える前に彼女はそれを察したように、ハッと目を見開いた。

「まさか翼さん、手話がわかるんですか？」

「え、ええまあ」

翼がそう答えると、楓と彼のとなりにいる羽月がとても意外そうに驚いた。

「翼くん、どうして手話がわかるんや!？」

羽月が鼻息を荒げながら翼に尋ねる。

「いや……昔大学にいるときに、サークルでちょっと福祉系のボランティアをやったことがあって、そこでたまたまちょっと覚えたんだ。そんなにわかるってわけじゃないけど」

「福祉のボランティアを」

「ええ。そんなに変でしたか……？」

「いいえ、性格の良いホストさんだとは思ってたんですけど、まさか手話を理解されてるなんてホントに意外だったもので」

楓は感心そうに翼に言った。

「ホンマや。翼くんすごいんやなあ！」

翼の隣にいる羽月も、感心の言葉を彼にかけた。

「いや……そんな」

翼は、ほのかに顔を赤らめた。

「あれ、翼くん顔赤いで」

「仕事でもだけどちょっと飲んだからかな」

そう言いながらも、翼は照れを隠すかのようにジョッキのビールを口に移していった。

「フフッ、でもうれしいわ」

「えっ？」

「翼さんが手話をわかるって聞いてちょっと意外と言うかうれしくてね」

「ママさん」

「翼さんがもしよかったらでいいんですけど、もしまたお店にいらしたときには美空の話し相手だけでもなってあげて下さいますか？あの子、今までそのことで辛かったと思うんです……」

楓がそう頼むように言うと、翼は「ええ」と返しながら首を縦に振った。

「ありがとうございます」

楓は改まるように翼に頭を下げる。

「何か今日は翼くんばっかしカッコええな」

羽月が少し膨れたように横で呟いた。

「あのなあ……」

「ああ、わかっとるよ。美空ちゃんのことに関しては別やけど……何や、ホストとしても差をつけられたような気持ちになってな」

「何だよそれ、それでも君の方がお客さんの数はいるだろう。俺はやっと一人掴んだだけだ」

「せやけど、愛菜さんみたいなすごいお客さんてわけじゃない」

羽月はどこか寂しそうにそう呟いた。

翼は、話しているうちに彼のそんな表情が垣間見れることに対し、珍しいとさえ思い始めた。

「わざわざ俺が言うことでもないが、今日は君の誕生日じゃなかったのか？そんな日くらい仕事のことは忘れたらどうだ」

「うん……そうやな。ゴメン翼くん、お料理温かいうちに食べよっ。うん、ママさんのサバミソめっちゃおいしいわあ！」

羽月はその場に生まれた雰囲気時半ば無理矢理ごまかすように言った。

しかし、翼は不意に彼が見せたその寂しそうな表情が、どこか気になっていた。

約2時間後一。

「そろそろ行こうか」

翼がそう言うと、羽月もうんと頷いた。

「そうやな、ママさんお会計い！」

「ハイ、ありがとうございます」

会計を済ませると、翼と羽月はコートを羽織り始める。

「今夜も寒そうやな」

「今日はどうもありがとうございました。お気をつけて帰ってくださいね！」

「すみません、遅くまで」

翼と羽月が外に出て行こうとすると、そこに美空がスタスタとやってきた。

すると、翼に向かい手話をしてみせた。

『ドウモ、アリガトウゴザイマシタ』

翼はそれを理解したのか、軽くニコリとして美空に話し掛ける。

「こちらこそごちそうさま。あのお通しの肉じゃが、美空ちゃんが作ったんだってね？とても美味しかったよ」

『マタ、食事ニ来テクレマスカ？』

美空がそう言うと、翼は無言で頷いた。

彼女はそれを見て、嬉しそうに笑顔を見せた。

「じゃあ、また来ます」

「ごちそうさまでしたあ、ママさん美空ちゃんまた来ますう！」

そう言って、翼と羽月の二人は"楓"後にした。

「いい方が来てくれたわね」

楓がそう言うと、美空は笑顔でコクッと頷く。

翼達の背中が見えなくなるまで、美空は寒い中ただずっとそこから彼らを見送っていた。

「美味しかったなあ」

「ああ」

翼と羽月は、そう言いながら帰りの道を歩いていた。

「翼くん、ホンマに今日はおおきに」

「何だよ改まって。もういいってそれは」

「俺.....こんな風に誕生日誰かと一緒に過ごしたの、久しぶりやったから...」

羽月は、ふと寂しそうにそう呟いた。

「久しぶりって.....他に友達だっているだろう？」

「友達はおってもな、さっきも言うたけど今までそういう境遇やなかったから」

「.....」

羽月にそう言われ、翼はただ黙るしかなかった。

『こいつ.....』

翼は心の中でそう呟いた。

それは約1時間前—

まだ二人が"楓"にいるときのことだった。

「翼くんは何でホストになったんや？」

羽月は唐突に翼に尋ねた。

「どうしたんだよ、いきなり...」

「いや、みんなホストってそれぞれ野望持ってなるもんやろうなってな。今日愛菜さんの指名とった翼くん見て、死に物狂いって言うんかな.....。翼くんには何かしらあるって思うたわ」

「.....」

「あっ、別に答えたくなければええで」

「俺は.....」

翼は少し俯きながら黙ると、口を開いた。

「俺は自分を認めてもらうため、かな」

「自分を認めてもらうため？」

「ああ。君もあの時の俺の失態でもう何となくわかってるかもしれないが、俺はすごい不器用だからな。あの時に限らず今まで数多くの失敗をしてきた……。いや失敗ばかりだった」

「翼くんにもそんなことがあったんや？」

「まああんまり詳しいことは言えないけど、ホストって世界は自分の本当の力を証明してくれるし、何より自分を変えてくれるような気がしてね」

翼はどこかにはにかむように言った。

そして、話を返すように羽月に尋ねる。

「君はどうしてホストになったんだ？」

「あっ、俺？」

「ああ、君はわざわざ京都の方から来たんだろ？だからー」

その時、翼の言葉は止まった。

そう言いかけながら彼が見たその時の羽月の表情が、それまでの明るいイメージからは想像もできないほど恐ろしく強張っていたからだった。

それを見た翼は、身体の奥からゾクッとするような感覚を覚えた。

「……どうした？もし言いたくなかったらー」

「翼くん」

「えっ？」

「翼くんは家族おる？」

「何だよ急に」

「俺はおらんねん」

「……一体何がどうしたんだ？」

酔いもあるのか、突然態度が一変したような羽月に翼は戸惑った。

しかし、羽月は続けた。

「俺……元々は東京に住んでたんや。10年前、家族がバラバラになるまでは……！」

「……！？」

「いや違うな、バラバラにされたんや……」

羽月の瞳に僅かに涙が浮かんだ。

「家族が、バラバラって……」

翼がそう言うと、羽月は食いしばった歯を見せながら怒りを込めながら言った。

「すべてあいつに、あの男に狂わされたんや……。アサカワカンパニーって会社の浅川って男に……！」

「！？」

羽月の突然の言葉に、翼は驚かすにはいられなかった。

第 1 1 章へ

"楓"からの帰り道、翼と羽月はそれ以降互いにあまり口をきかなかった。

特に羽月の口からとっさに出てきた"アサカワカンパニー"の一言に、翼は驚きながらも動揺を出すまいと必死に努めた。

「.....」

「.....」

寒い夜空の下を無言で歩く二人の間には、体を襲う寒さなど気になってすらいなかった。

しかし、その長いようで短い沈黙を破ったのは羽月の方だった。

「あ.....翼くんゴメン」

「えっ？」

「さっきあの店で飲んでるときに、俺が変なこと言ってもうて」

「あ、いや.....」

すると羽月はプツと笑い出した。

「どうしたんだよ、急に笑って？」

「だって翼くん、"あ、いや....."が口癖なんやもん」

「うるさいな.....」

沈黙が破れてからは、会話を切らすことなく二人は帰路を歩いた。

「じゃあ、ここで」

「うん、翼くん今日はおおきに、ありがとう！」

「お疲れ」

翼は一足先にタクシーに乗り込み、羽月に別れを告げる。

「じゃあ、また明日」

「うん！また明日っ！」

ドアがバタン閉まり、翼を乗せたタクシーは次の乗車を待つ羽月のもとから走り去っていった。

「翼くん.....ホンマに今日はありがとう」

羽月は翼が乗ったタクシーを見つめながら、優しい声でポツリと呟っていた。

タクシーで帰路を辿る最中、翼は先程"楓"にて羽月が言い放ったことを、ずっと考え続けていた。

「アサカワ.....カンパニー.....」

翼はふとそう呟いた。

『親父の会社が.....あいつの家族と一体何があったんだ?』

翼は今日の仕事でのことをすっかり忘れたかのように、それをずっと頭の中に抱えながら、夜の帰路に消えていった。

数十分後—

一方、自宅アパートに着いた羽月は、スーツ姿のままベッドに横倒れになっていた。

しばらくそのまま動かない羽月。

しかし、気が付くと彼は一枚の写真を手にしていた。

写真に写るのは、あどけない笑顔を見せる二人の幼い少女と少年の姿。

羽月はその二人の姿をただじっと見つめる。

「.....」

写真を見つめ続ける羽月の瞳には、いつしか一粒の涙が零れていた。

「お姉ちゃん、どこやねん.....どこにおんねん.....」

羽月はいつも元気なその顔を次々と流れ出る涙でぐしゃぐしゃにしながらかきじゃくっていた。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん.....！」

羽月はそう漏らしながら、力無くしがみついた枕を濡らしていった。

そんな彼がふと眠りについたのは、3時間も経過してのことだった。

翌日—

夕刻が近づき、【Club Pegasus】のホスト達は出勤の時間が近づいていた。
もちろんコート姿の翼も、今日一日の仕事に入るために店舗のあるビルへと向かっていた。

「あっ」

翼は、反対方向からやってくる背が一際高い羽月の存在に気がついた。
羽月も翼の存在に気が付いたのか、小走りで彼のもとに近づいていった。

「おはよう翼くん！」

「おはよう」

「昨日は、遅くまでおおきに！翼くん付き合ってくれたおかげでいいハタチの誕生日迎えられたわあ！」

「そっか」

「今日も一日、がんばろな！」

そう言って、翼と羽月はエレベーターに乗って店のあるフロアへと上がっていった。

1 時間後ー

いつもながらの掃除やミーティングを経て、【Club Pegasus】の営業は通常どおり開始された。

「いらっしゃいませ！！」

17時の開店から間もなく、一人.....また一人と女性客が来店のために足を運んでくる。
学生・会社員・サービス系など、職業や年齢も様々な女性が次々と来店した。

「今日もすごそうやな」

羽月は気を引き締めるように言った。

そんないつもと変わらない彼を、翼は不思議そうに見ていた。

昨夜、"アサカワカンパニー"の名をあれほど憎しみを込めて口にしていた彼は、今はもういなかった。

『酔ってたのかな.....あいつ』

考えてもキリがないと思った翼は、どこか気になりながらも無理に考えないことにした。しかし、目の前にいる羽月が父親の会社と以前関係していると考えれば、気になって仕方がなかった。

「おい、翼ァ！」

考え込んでいる翼に、光星が突っ掛かるように話しかけた。

「光星さん。何です？」

「何ですじゃねえよ、今日はママは来ねえのか？」

「ママ？」

翼が首を傾げると、光星は口元をニヤリとさせながら再びその口を開いた。

「お前が引っ掛けたあの女のことによって決まってるだろうがよ。今日は来ねえのか、オイ？」

「さあ、どうなんでしょうね」

「.....まあ、どんだけ太かろうがお前にとっちゃたった一人の客だもんな。いくら昨日ラッソシしようが、あの女が来ない限りお前は今日一日ヘルプや雑用だ！」

光星はまるで汚物を吐き捨てるかのように、翼に言い放った。

周りにいる何人かのホスト達は、迷惑そうながらも見てみぬ振りをするようにしている。しかし、当の翼はそれを全く気にかけることがないかのように彼に何も返さなかった。

「フン、何も言えないからシカトかよ。いっちょ前に着飾りやがって。ペーペーはペーペーらしく、調子に乗らずにー」

その時だった。

「いらっしやいませえ！」

店内のホスト達からの元気な声が、エントランスからやってきた一人の女性を迎えた。

「あの.....」

一人で入ってきたその彼女は、ピンクのカットソーにファーのコート、白いブーツにデニムのミニスカートと言った、派手な恰好をしながらも、どこかおとなしげな20歳過ぎくらいの女性だった。

顔を見られたくないのか、レンズの大きいサングラスをしている。

すかさず、内勤の佐伯が彼女に話し掛ける。

「いらっしやいませお客様、当店は初めてでいらっしやいますか？」

「あ、いえ……この間一度初回で来たんですけど」

「以前にご来店いただいているんですね、ありがとうございます。本日、ホストの御指名などはありますでしょうか？特に希望のホストがいませんでしたら、フリーで何人かのホストをつけさせていただきますが」

佐伯が質問すると、彼女は数秒ほど考え込むように黙ってから口を開いた。

「あの……翼さんて方をお願いします。今日お店にいますか？」

「！」

佐伯は面食らったように僅かな驚きを見せる。

「あ、翼でございますね？今参りますので」

すると、ざわめきに感づいてか、翼はすぐにその場にやってきた。

「翼、新規の御指名だ。卓まで案内しなさい」

佐伯にそう言われると翼はすぐに頷き、サングラスをかけたその女性客に目をやった。

「いらっしゃいませ！御指名ありがとうございます、翼です。ご案内しますので、こちらにどうぞ」

翼に言われるまま、女性客は彼の後を無言でついていった。

「暗いので、足元気をつけて下さいね」

翼はそう声をかけながら、彼女を店内の一つのテーブルへと誘導していった。

「な……」

光星を初めとする店内にいる従業員達が、再び翼に対して驚きの視線を向けていた。

「あの翼ってやつ、昨日愛菜さんの指名とって、今日はあるなギャルっぽいのを……！」

「こないだまで全然指名無しで仕事もあんまりできなかったのによ…」

「二日連続で新規指名なんて、あいつに何があったんだ!？」

ホスト達は、またもやさらなる変化を見せる翼に対して、感嘆を漏らす。

無論、そのことは先程まで翼に突っ掛かっていた光星の目にも留まっていた。

「あのヤロウ……何で……！」

光星は右手に持っていた缶コーヒーを握り潰しながら不思議なまでの不満をつぶやいた。

その後ろから、天馬がふと声をかける。

「おい、光星」

「社長？」

「今翼を指名したあの子、お前覚えていないのか？」

「え??」

「よく見てみる、お前も前に一度会っているお客だ」

天馬は光星にそれだけ言い残すと、奥の事務所へと去っていった。

「.....?あの女、どこかで会ったか？」

光星は天馬の言葉に首を傾げながらも、テーブルへとついた翼達を陰から覗くことにした。

「どうぞ」

ソファーに腰をおろした少女に、翼はおしぼりを差し出す。

「どうも」

「となり、失礼します」

翼はスッと彼女のとなりに腰をおろした。

「改めて初めまして、翼です。ご指名ありがとうございます」

「いえ.....」

翼が話し掛けると、彼女は大人しげに返事をする。

「あの、翼さん」

「はい？」

「私のこと、わかりませんか？」

「えっ？」

突然の彼女の言葉に、翼は目をパチクリさせる。

彼女は続けた。

「私達、一度このお店で会ってるんです」

「一度会ってる？」

「はい。あ.....すいません、サングラスしてるしわかりませんよね」

そう言って、"彼女"はその小さな顔には大きすぎるようなサングラスをスッとはずした。

「あっ.....！君はたしか」

翼は思わず声を上げた。

「はい、こないだ光星さんとの席で一緒になった.....」

サングラスをかけヘアスタイルが変わっていたものの、ミニスカートなどがベースの体を露出したギャルファッションに身を包んだ細い声の少女は、梨麻だった。

バッチリ決めた妖艶なメイクが、彼女の瞳を大きく際立たせている。

翼は意外そうな目で彼女を見つめる。

「梨麻さん、ですよ」

「ハイ、覚えてくれてたんですね」

梨麻は少しだが笑顔を見せる。

「ええ。髪の毛もストレートだったこの間と違って巻いてるし.....色も少し明るくなりましたよね？」

「うん」

「サングラスだったのもあるけど、最初わかりませんでしたよ」

「えへっ」

梨麻は少しずつだが、最初持っていた緊張感がほぐれてきたようだった。

「梨麻さん何飲みますか？」

「あ、じゃあビールを下さい。乾杯しましょっ！」

「ビールですね？わかりました」

翼はホールで通り掛かったホストにビール二本のオーダーを伝えた。

「でもびっくりしましたよ、まさかあの時一緒になった梨麻さんが今日指名で来てくれるなんて」

「驚きました？」

「うん」

翼に見られたからか、梨麻はどこか照れ隠しをするように、彼から顔をそらした。するとすぐに、表情を曇らせながら俯く。

「梨麻さん？」

「翼さん、この間はごめんなさい」

「えっ？」

翼はキョトンとした。

「梨麻さん、ごめんって？」

「あの時、光星さんと果穂ちゃんの行動を止められなくて.....。翼さん、あれから大変だったんでしょ？」

「いや、そんな」

二人がそう話しているうちに、テーブルにビール二本とビアグラス二つが届いていた。

「梨麻さん、とにかく乾杯しましょう」

翼は、二つのビアグラスにビールをトクトクと注いでいく。

満たんにビールが注がれたグラスを持った二人は、手に持ったそれを交わす。

「カンパイっ！」

グラスの華奢な音が、二人の間に独特の雰囲気醸し出す。

「はぁ～おいっしい！」

梨麻はビールを口にすると、何かから解放されたように声を漏らした。

「梨麻さん、今日は美味しそうに飲んでますね？」

「あはっ☆」

翼と梨麻は、一旦グラスをテーブル上にあるコースターに置いた。

すると梨麻は、どこか改まったように自らの体の正面を翼の方に向けた。

「梨麻さん？」

「翼さん、あらためてこないだはホントにごめんなさいっ」

梨麻は、翼にそう言いながら突然頭を下げる。

「梨麻さん、そんな」

翼は一瞬戸惑ったが、すぐに彼女の口が開くのを察してか、そのまま黙って続きに耳を傾けることにした。

「こないだ、果穂ちゃんと光星さんのこと止められたはずなのに……私、あの時ホストクラブ初めてってのもあって、果穂ちゃんに頼んで、しかもおごりで連れて来てもらってたから何も言えなくて……」

「梨麻さん……」

「ううん。……まあ、結局私最後にキレちゃってお金置いて出てったんだけど……。自業自得だけど、あれから果穂ちゃんとも気まずくなっちゃってさ」

「そうだったんですか……。何かすいません、俺のせいで二人が気まずくなっちゃって」

翼がそう言うと、梨麻は首を横に振って続けた。

「いいの、元々お店の中だけでの上っ面の付き合いだったんだし。ホストクラブ連れて来てくれたのは感謝してるけど、ウマが合ってたわけじゃなかったし」

「お店？」

「うん、言ってなかったっけ？私と果穂ちゃん同じヘルス店で働いてるの」

『ヘルス……確か風俗か』

翼は梨麻の素性の一旦を聞いて、彼女の派手で露出の多い外見に自然と納得した。

「まあこないだのお詫びってのもあるんだけどさ」

梨麻はグラスの中のビールを勢いよく飲み干すと、すぐに続けた。

「初めてこないだ会ったときから気にはなっていたんだよ、翼さんのこと」

そう言うと、梨麻は顔を少し赤らめながら視線を翼からそらした。

「梨麻さん」

「だから……ああもうはずかしいなあ！」

「ありがとうございます、来てくれて」

翼とはずかしそうな梨麻は、一旦視線を合わせると嘔き出すように笑った。

「梨麻さん、飲みましょう！」

「うん飲もう！」

翼は梨麻が飲み干した空のグラスに、ビールを満たんになるまで注いだ。

それに返すように梨麻も翼のグラスにビールを注ぐ。

二人は、何かを祝い合うように笑顔で再びグラスを交わした。

「って言うか、びっくりしたあ！翼さん、こないだ会った時とは別人みたいに変わってるからさあ」

「ああ、これね」

「何かあったの？太いお客さんでもついた？」

「あ、いや……。あのナリはさすがにないだろうって思ってね、ちょっと社長からアドバイスもらって」

「ふーん、そうなんだ～。でも翼さん、似合ってるよ！」

「ありがとう」

翼と梨麻は、友達同士のような…時にはまるで恋人同士のような楽しそうな雰囲気その場に醸し出していた。

そこには、あの時大失態をした記憶など消し飛んでしまうほど微塵も感じられない。

しかし、その光景を遠くから見ていた光星をはじめとする何名かのホストにとっては決して面白いものではなかった。

「翼のヤロウ……！」

光星は楽しげに梨麻に接客をしている翼を凄まじく恐ろしい目付きで見ている。

「あのヤロウ、俺の客になるはずだった女を横取りしやがってよお！」

「光星」

一人翼を睨む彼に、翔悟が話し掛けた。

「翔悟さん」

「何をそんなに翼ごときを意識してるんだ。たかが風俗嬢一人が客としてついたらだろう」

「でも、あの女は……！」

「お前の客の連れだったんだろう？そのまま自分の新しい指名客にしようとしたのが、あいつに妨害された……ってとこか」

「そうっすよ。爆弾まがいのことまでをして指名をつかんだなんて、俺は認めねえ！」
光星は、翼への視線をそらすことがないまま翔悟に言葉を返した。
すると、翔悟は再び諭すように彼に口を開いた。

「なら放っとけ。愛菜のこともそうだが、たまたまラッキーが重なっただけだ。あれ以上翼に客は増えない。俺達がわざわざ気にすることでもないだろう」

「……そうですかね」

「そうだ、客はお前の方が数多くいるんだ。お前、少し翼を意識しすぎだ」
翔悟に諭され、光星は少しずつだが冷静さを取り戻していったようだった。

「そうっすよね翔悟さん、あんな奴にそこまでー」

しかしその時だった。

「いらっしやいませえ！！」

また新たな女性客を迎える掛け声が店内に響く。それが気になったのか、翔悟と光星もそれに目を向ける。

「見たことないな、新規かフリーの客か？」

「いや、曖昧な記憶っすけど、昨日も店に来てたような気が……」

翔悟と光星の視線の先には、二十代半ばほどのOL風の二人組の女性客がエントランスにて待ち遠しそうに立っていた。

すかさず彼女らに佐伯が話し掛けると、二人はそのまま彼にテーブルへと案内されていった。

「佐伯さんがあの卓に連れてった二人、誰か指名っぽいっすね、翔悟さん」

「そうだな」

翔悟と光星は、その二人の女性客のことが気になりながらも、自分の指名客のいるテーブルへと戻ることにした。

一方ー

梨麻の相手をしている翼のところに、佐伯が歩み寄ってきた。

そして、翼の肩をポンと叩く。

「？」

「翼、別の御指名だ」

佐伯は何かを理解しかねている翼に耳打ちする。

「!？」

翼はパチクリと大きく目を開ける。

「お客様すみません。翼の方少しお借りしてもよろしいでしょうか？」

佐伯は、翼の隣でほんのり頬を赤らめている梨麻に申し訳なさげに言った。

「あっ、翼くん別のお客さん？」

「うん。ゴメン、すぐに戻ってくるね」

「いいよお、ヘルプの子も来るだろうし気にしないで！でも、なるべく早く帰ってきてね」

翼はすまなそうに梨麻にウインクすると、テーブルを離れ佐伯の後についていった。

「翼、あの二名のところな」

「わかりました」

翼は佐伯に指示された通りのテーブルへとすぐに向かった。

「いらっしゃいませ！御指名ありがとうございます、翼です」

翼はそう言いながら、二人のOL風の女性客へとペコリと頭を下げる。

「あ～翼くんだあ！座って座って！」

女性客の一人が、翼を自分達の間へと誘う。

「失礼します」

翼はスッと二人の間へと入った。

すると、女性客は二人ともニコニコしながら互いの間にいる翼を見つめる。

「あの、どうかしましたか？」

翼は妙なまでにニコニコと笑う二人に対し、不思議な感覚を覚える。

すると、もう一人の女性客が答えた。

「あなたでしょ、彗星のごとく現れて昨日のラスト歌った新人って！」

「す、彗星のごとく？」

「実は私達昨日もお店に来てただけど、いつも歌う人って決まってるから、もうビックリしちゃった！翼って誰！？みたいな」

「そう！それでその謎の人物翼くんに一目会いたくて、私達二人でまた来ちゃったの！」

二人は半ば興奮したように言った。

「そうだったんですか。でも、ありがとうございます」

翼は改まるように、二人に頭を下げた。

「へえ、けっこう礼儀正しいんだね！それにけっこうカッコイイし」

「ねー！何か気に入ったよ！翼くん、三人で何か飲もう！」

「はいっ！じゃあ、今夜は楽しみましょうね！」

翼は出したこともないようなテンション高い声を上げた。

「.....」

遠くからそれを見ていた他のスタッフは皆驚いていた。

羽月も、光星も、由宇も、そして翔悟も.....昨日の愛菜の指名を含め二日間で突然四人の指名を手に入れた翼の躍進は、誰もが受け入れざるを得ない現実として彼らの脳裏に焼き付いていた。

あの時まで仕事もできず失態ばかりだった翼が、ここまでの新規指名を取るなど誰も予想できずにいたことだった。

唯一、天馬を除いては。

「社長、翼のやつ徐々に売れ初めてますね.....」

佐伯は脱帽したように呟いた。

「だろう？あいつは目立たない原石から磨かれつつある宝石になりつつあるんだ」

天馬はニヤリとしながら佐伯に返した。

「ホント、ビックリですね」

「由宇」

天馬の後ろから由宇が話しかけた。

「社長はわかっていたんでしょ？彼に.....翼くん以外のホストには無い何かがあるのを」

「由宇、お前はどう思ってる？あいつのこと」

「今のところは何とも。でも、彼ならやり方次第で化けちゃうかもしれないですね」

「そうか」

笑いながら接客をする翼を、それぞれが様々な思いを抱きながら見つめた。

そして羽月も。

『翼くんがんばるとるなあ...俺もがんばらんと！姉ちゃんに会うためにも...！』

様々な思いが交錯する中、その日は噂を聞き付けた女性客がさらに一名、翼の指名客となった。

"彗星のごとく現れたホスト・翼"の名前は、口コミ効果で少しずつ自然と一人歩きを始め、
【Club Pegasus】はさらなる盛況を見せ始めていた。

そして、二ヶ月の時間が流れた。

第 1 2 章へ

lost wing～傷ついた愛の羽根～(II)

つづき⇒⇒<http://p.booklog.jp/book/51983>

lost wing～傷ついた愛の羽根～(Ⅰ)

<http://p.booklog.jp/book/50676>

続き(Ⅱ)はコチラ⇒<http://p.booklog.jp/book/51983>

著者：K a i

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kaiweblg/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/50676>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/50676>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ